

セキレイがいる世界

八雲ネム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生した俺は、葦牙としての能力と圧倒的な量の知識を持って、セキレイがいる世界へと飛ばされた。

そのため、圧倒的な知識と共に積極的に関わっていくこととした。

# 目次

プロローグ	1
第1話 セキレイ計画の今	5
第2話 懲罰部隊	9
第3話 出会いと日常	14
第4話 南陣営との邂逅	19
第5話 緑の少女	25
第6話 それぞれのセキレイ	30
第7話 南陣営との決裂	35
第8話 羽化	41
第9話 脱走計画 前編	46
第10話 脱走計画 中編	52
第11話 脱走計画 後編	57
第12話 鶴鴿計画の当初	62
第13話 第三段階	67
第14話 粛正	73
第15話 もう1つの粛正	77
第16話 第四回戦直前	82
第17話 それぞれの思い	87
第18話 第四回戦の裏で	92
第19話 鶴鴿表明 前編	97
第20話 鶴鴿表明 後編	102
第21話 神座島	107
第22話 鴉羽 VS 鹿火	112
第23話 神座島侵攻	117

第24話	反撃の時	122
第25話	機能停止、そして……	127
第26話	嵩天	131
第27話	勝負の行方	136
第28話	鵺鴿計画後 その1	142
最終話	鵺鴿計画後 その2	148

## プロローグ

突然だが、転生と聞くと何を思い浮かべるだろうか？

神様と自称する存在に、特定の能力をもらって圧倒的な能力で周囲を圧倒することだろうか？

それとも、自分が望んだ能力とは違う能力をもらって仕方なく、その能力を使って周囲を圧倒するだろうか？

経緯はともあれ、何かしらの能力をもらって活躍する方が物語にしやすいから、それが流行すると思っっている上に流行しているのだから否定できない。

だが、俺の場合は圧倒的な知識と葦牙という能力、そして普通の人間よりも肉体が頑丈だという以外は何も貰っていない。

そして、なによりも主人公である佐橋皆人とは関係のない人間として生まれたからだ。

え？能力を持っている時点で充分、勝ち組だって？

よく考えて欲しい。葦牙だとしても、いいセキレイに出会えるかなんてわからないだろ？

もしも、俺の手の届かない所で物語が進むならばらく引きこもるね。

そう、思っていた時期がありました。

~~~~~

「みつたん、待つのです〜♪」

「来るんじゃないやねーよ！覗き魔！」

「どこに行こうとしているのか知らん？」

「能力使えなし！この酔っ払いめ！」

「待つんだ、少年。お姉さんといいたいことしよう」

「如何わしいものじゃないよね!?!それ!?!」

俺は、2度目の人生の中で始めて身の危険を感じる鬼ごっこをしていた。

追いかけているのは、シングルナンバーの中でも初代懲罰部隊に属しているNo.02からNo.04までのお姉さん達。

松、風花、鴉羽の3人が神座島に来た俺と怪しい雰囲気で戯れようとしたので、逃走した俺との鬼ごっこを興じることになった。

元々のきっかけは、3歳ぐらいの時から様々な知識をスポンジのように吸収していく俺が、革新的な発明を紙に書き始めたことからだった。

当初は、母親も子供の思いつきだろうとスルーしていたがある日、研究で行き詰まった時に俺の思いつきをまとめたファイルをめくっているところ、気がついた。

それは丁度、研究で行き詰まった部分の問題点と解決方法を書き記した内容があったため、母親は切羽詰まったように俺を呼び出して聞いて来た。

そのため、『こういう問題があったらこう解決したいなあ』という如何にも子供らしい答えをすると、母親はどこかに電話をして出かけて行った。

置いてけぼりをくらった俺は、1人でお絵描きをするために部屋に戻ったが次の日には研究室に連れていかれた。

そこには、多数の大人の研究者がいたので戸惑っていると、母親から問題解決してみろというGOサインが来た。

そのため、研究対象の問題点をあぶり出して解決してみると、研究者達は感嘆の声と共に喜びを分かち合っていた。

そのため、後で母親に聞いてみたら解決した問題は長い間、研究者達を悩ませた問題だったようだ。

その結果、俺が小学2年になった頃に超大国である某A国の超一流の大学と契約して奨学金と援助されたお金で通うことになったため、俺の家族はその国に引っ越して11歳になる頃にその大学を卒業した。

そんな訳で、久し振りに新東帝都に戻ってきた俺は研究に没頭しよ

うとして、今度は母親に連れられて神座島に到着した。

どうやら、俺が大学に行つたことで得られたお金で御中広人が社を大きくするついでに、セキレイ達をちゃんとした施設で研究しようと言っていた。

研究と言つても、人体実験ではなくてセキレイの能力を調整して現代でも闘えるようにしているらしい。

俺も、大卒と言うことでその一員として参加することになったのだがその中でも、鶴鶴基幹が反応した3人が羽化しようとして迫って来ているのだ。

しかし、どんなに美人であつてもおっかないお姉さんに追いかけるのは悪夢だ。

そんな俺を、救ってくれたのが懲罰部隊の初代筆頭であるNo. 01である美哉だった。

「わっ……ごめんなさい！今、急いでいますのでまた後むぐつ！」

「…………何をやっているんですか？皆さん」

「あややや、なんでもないですよ。美哉たん」

「鬼ごっこをしているだけよ」

「相変わらず、おっかないなあ。あんたは」

研究施設の曲がり角を曲がろうとして、初代筆頭の任務をやっている美哉とぶつかりそうになった。

そのため、俺は謝りながら逃げようとして状況を察した美哉が俺をかばいながら、追いかけてきた彼女達にそう言った。

すると、彼女達は焦りながらそう言ったのでリーダーとしての威厳を出しながら、彼女達を追い払ってくれた。

「ありがとうございます、美哉さん」

「全くですよ、道人くん。私の鶴鶴基幹が反応していたらどうするつもりですか？」

「その時は諦めるしか、手はなさそうです。貴女に勝てませんから」

彼女の質問に、正直に答える、何故なら、美哉は浅間健人という同僚の研究者と婚なごうしているのだから。

ただし、それは叶わぬ願いだ。

理由は結構、複雑だから説明は省くが健人は葦牙としての才能に恵まれなかったのだ。

葦牙でなければ、セキレイを制御できないので叶わぬ恋みたいになっっている。

しかし、それでも健人は美哉をセキレイの束縛から解き放つために奔走しているため、俺がそれをやめさせようとしても聞き入れなかった。

それだけ、彼らの思いは確かなのを確認した結果だが原作を知っている俺としては、彼女が悲しむのをなんとかしてでも避けたい。

そのため、俺は事件が発生するまでの間に問題となるものを全て解決するために、本社に戻ってから研究に勤しむのであった。



## 第1話 セキレイ計画の今

佐橋皆人、二度目のサクラチル

彼の母親である佐橋高美から、そう聞かされた時にはどんだけのヘタレなんだかのため息をついたが、そんな俺は出雲荘に住んでいた。

母親から、いざという時に健人の手伝いをしてやれという指令を受けたのと同時に、鴉羽達にファーストキスを奪われて葦牙になったためだ。

そのため、俺と婚いだセキレイは鴉羽を初めとして風花、松、焰、結女の5人とそれとは別に廃棄ナンバーの秋津が俺のそばにいてもらっている。

理由は、調整に失敗によつて廃棄されることになったのだが研究施設から逃げ出して、公園で休んでいるところを鴉羽と結女とで買い物に出掛けていた俺が発見した。

最初は、鴉羽が彼女を機能停止にしようとしていたが俺と結女が必至に止めたので、俺のそばで婚げる時を待っている。

その他の原作との違いは、ガーディアンの仕事をしている焰が俺と婚いだので女性体で安定したことと、浅間健人が出雲荘にいたことだった。

健人は本来、本社のシステムミスで暴走した神器を止めるために自己犠牲になる形で機能停止になったが、俺の手伝いもあつて今も生きて美哉と生活している。

美哉は、鴉羽のことをあまりよろしく思っていないようだが健人と共に生きて帰ってきた俺に、感謝しているように感じられる。

そしてもう一つ、原作と違っているのは鈿女が日高ひだか千穂ちほと同居していることだ。

千穂は、ウイルス性進行型の難病を患っていたが俺が開発した特效薬によつて治癒したため、彼女は鈿女と共に氷山会病院を去つて出雲荘に来た時には互いに驚いたものだ。

その頃になると、俺もセキレイ計画に深く関わっていたし、鈿女も鈿女で研究者姿の俺と何度も会話をしているので面識はあつた。

そして、難病に対しての特効薬を開発したのが俺だと知るとさらに驚いていた。

だって、世間一般ではM・B・Iとは別の会社が特効薬を開発したという認識だったのだが、その基本設計を作ったのは俺だからだ。

元々、医薬品の開発をM・B・Iで行っていたのを別の会社と提携して開発した上に、名義上は提携した会社にしたのだから余程のアンテナを張っていないと分らない。

そのため、2人は俺に恩返しをしたいと言ったのでセキレイ計画を可能な限りで、生き残ることが俺に対しての恩返しだというと2人はかなりの気合いが入っていた。

そんな訳で、休日を満喫するために秋津と鴉羽を引き連れて散策をしていると、拳系のセキレイが雷系のセキレイに追われている場面に遭遇した。

どうやら、雷系のセキレイは羽化前のセキレイを神座島に送り返そうとしていたようなので、拳系のセキレイを手助けするために鴉羽に先陣を切ってもらった。

「やあ、君達。羽化前のセキレイを弄んで楽しいかい？」

「げえ!? No. 04!」

「こんな所で遭遇するとはね」

鴉羽の姿を確認すると、雷系のセキレイ2人がイヤな奴と遭遇した顔になったため、俺も姿を現してこう言った。

「婚ぐ前のセキレイを追い回すとは頂けませんねえ、逆に追い回しますよっ。」

「ぐっ、道人か。響、行くよ!」

「こんな所であんたらと戦いたくないんでね!」

2人はそう言うのと、来た道に戻っていったので鴉羽はやや残念な顔になった。

「ヤレヤレ、久し振りに戦えると思ったのに残念だ」

「誰しも鴉羽みたいに戦闘狂じゃないからなあ」

「鴉羽はちよつと過激すぎ」

「2人とも酷いことを言うものだね、今日は寝かせないよ?」

「美哉達に殴られたくないからラブホでな?」

俺達が互いに、軽い冗談を言い合ってから拳系のセキレイに顔を向けて話しかけた。

「その君、怪我はない?」

「はい!大丈夫です!」

「オケオケ、怪我がないんだったら早めに葦牙を見つけなよ?じやないとさっきのお姉さん達に追いかけて回されるから」

「はい!ありがとうございます!」

彼女はそう言って、すぐに舞い上がってどこかへ行ってしまった。

その様子を見て、鴉羽は懐かしそうな顔でこう言ってきた。

「彼女は無事そうだね」

「ああ、あれだけ元気そうだったら守った甲斐があつたものだ」

そう、No. 88である結はNo. 87鹿火と共に調整中に第二次神座島侵攻が発生、拉致されそうになったが偶然にも居合わせた俺の働きによつて拉致を免れていた。

その際、鴉羽達が駆けつける直前に侵攻してきた兵隊の銃で肩を撃たれたため、鴉羽がぶち切れて兵隊を瞬殺した。

その後、結達さえいなければ俺が怪我をしなかったとして殺そうとしたところを、怪我した俺と懲罰部隊の二代目筆頭である結女で取り押さえた。

そのため、怪我が治るまでの間は鴉羽と一緒にいてくれたのだが大人な美女と一緒にいると、妙にムラムラしてきたので婚ぐ際に童貞まで捨ててしまった。

今となつては、軽い黒歴史ではあるのだがその時に結女も一緒に婚いだ。

そして現在、美哉と共に俺達は北陣営として他のセキレイたちから恐れられている。

まあ、シングルナンバーが多いのが上げられるが初代懲罰部隊であるナンバー01から04までが、1つの屋根で過ごしているからだ。

そのため、シングルナンバーはヤバいと言う噂と共に北陣営を動か

したら世界が終わる、という噂まであるから困りものだ。

おかげで、よく美哉から黒いオーラと共に般若が出てくるからだ。

それとはお構いなしに、散策を再開していると俺の電話が宇宙大戦争のテーマと共に鳴ったので電話に出てみると、M・B・Iの社長である御中広人からだった。

『やあ！元氣そうだね、道人くん！』

「社長はいつも元氣そうですが？それで何の用です？今日は休日のはずですが」

『いやはや、状況は相変わらず好調なのだがシステムにエラーが生じてね。なに、すぐに終わる内容だから時間は取らせないよ』

「俺がいなくても大丈夫なはずでは？」

『浅間君が抜けてからは微調整ができる人材がそう多くなくてね。では！』

社長は、そう言つて勝手に電話を切ったので楽しい散策の時間は終了してしまった。

そのため、俺は2人に指示を出す。

「仕方ない、秋津は美哉に報告してくれ。『夕食は遅れるかもしれない』って」

「わかった」

「ここからだ」とM・B・Iは適度に離れているから鴉羽は俺を運んでくれると助かる」

「ふふっ、仕方ないな」

鴉羽は嬉しそうにしていたが、秋津はやや残念がっていたので報告が終わった後はおやつを運んでくるように指示すると嬉しそうに飛んでいった。

それから、M・B・Iの本社に到着してからは社長が言っていたシステムエラーを迅速に直して、途中でできた秋津と共に出雲荘に帰った。

## 第2話 懲罰部隊

休日なのに、システムエラーで半日が潰れたがその数日後にまたもや社長に呼ばれて、婚いだセキレイ達と共に社長室に入ると佐橋高美主任もいたので何か、ヘマでも起こしたかなと思っていると社長からこんなことを言われた。

「武田道人くん、君のセキレイで懲罰部隊をやってみないかね？」

「……………新たに編成したと聞きましたか？」

「壱ノ宮くんと彼のセキレイは、すでに懲罰部隊の主力メンバーとして加わってもらっている。君たちにはその補佐をしてもらいたい」

「拒否権はあるんですか？」

「勿論、あるとも」

御中社長は、自信を持ってそう言い切ったのでセキレイ達と話し合った。

「簡単に信じられないんだが……………」

「寧ろ、信じた方がおかしいと思うよ」

「社長って意地悪な性格ですから」

「道人、ここは断った方がいい」

「私はどっちでもいいわく、道人くんがいいと思っただ方で」

「マスターの思った方を行けばいいと思う」

俺が、目頭を押さえながらそう言うのと鴉羽や結女、風花がいつものことだと言わんばかりにそう言っつて、焰は反対の意思を示したが秋津は俺の意思を尊重する構えを示した。

すると、俺の携帯がメールの着信を知らせる振動がして見てみると、松からのメールで『何をされるか、わからないからやめておいた方がいい』と言う内容が書いてあった。

そのため、かなり悩んだが結論を出した。

「社長、引き受ける条件があるのですがいいですか？」

「いいとも」

「彼女達が嫌がるような任務は引き受けない、というのを条件に入れていいですよ？それがなければお断りさせていただきます」

「勿論、大丈夫だとも。帝都を崩壊させなければ自由なのだから」  
「……では引き受けさせていただきます」

俺はそう言うと、セキレイ達と一緒に社長室を出た。

元々、M・B・Iで働いている以上は御中社長がトップなので社長命令が出されてしまえば、簡単には断ることができない。

どうしても断りたいなら、他の会社に行くしかないのだが帝都からセキレイが離れられない以上は、帝都内にある大きめの会社に限られてくること考えると、帝都内で今と同等の生活を維持できるかは疑問だ。

となれば、海外に行くと言う手もあるがそうするとセキレイを知りたがっている組織が、海外には多すぎるので今度は彼女達の身柄が危ない。

最悪の場合、神座島侵攻以上の戦力が集まって来るかもしれないから、おいそれと言って逃げ出すこともできない。

つまり、懲罰部隊の任務を引き受けるしかないのだ。

幸いなことに、懲罰部隊の経験者は4人もいるので戦い方に関しては問題ないが、彼女達自身が懲罰部隊として戦うことを良しとするかどうか。

特に、ガーディアンの仕事をしている焰は高美に頼まれたために守ってきた羽化前のセキレイを、自らの手で機能停止にしないといけないからだ。

と言っても、婚いだセキレイの場合は鵠鳩紋に指を当てて祝詞を唱えればいいから、戦って無理やり停止させるよりかは大分マシだ。

そのため、焰に聞いてみるとこう返ってきた。

「道人が決めたことだろう？ならばやれることをやるまでだ」

「そう、ならいいんだ」

俺はそう言うと、懲罰部隊の主力メンバーとの顔合わせのために指定された部屋に行ってみると、そこには優男と2羽のセキレイがいた。

「始めまして、壺いちのみやノ宮 夏朗なつおです。よろしくね」

「始めまして、武田道人だ。社員証から考えると製薬部門の平社員っ

てところか」

「ふふっ、さすがは天才様だ。なんでも知っているんだねえ」

「何でもじゃない。現に俺と君とでは初対面だし、君の名前も初めて知った」

俺達は、そんなことを言い合っているとセキレイ同士での挨拶もそこそこに、サイドテールの少女が鴉羽に喧嘩を売っていた。

「ちよつと！懲罰部隊の主力はボク達なんだかね！そこのところをちゃんと覚えてなさい！」

「新参者が調子に乗っているね。まずはここで懲らしめておくかな？」

確か、ボクっ娘のセキレイはNo. 105の紅翼だったはずで気の短い彼女は、戦闘向きの能力を持っているのだが向かうところ敵無しの状態らしいのでかなりのイケイケな性格になっていた。

そのため、鴉羽は良い獲物を見つけたような顔になったので俺と壱ノ宮で、それぞれのセキレイを止めに入った。

「おやめ、紅翼。彼女は元懲罰部隊のメンバーさ」

「鴉羽も今はやめておこう。いずれは戦うことになるし」

そう、セキレイとセキレイと出会った葦牙は嵩天こうてんに向けて、終わりのない戦いに身を投じる必要がある。

それがセキレイの使命であり、彼女らと出会った葦牙が最終目標としている場所でもある。

そんなことがあるから、今はまだ戦うことをやめておくように伝えただった。

とは言え、懲罰部隊としての戦闘実績のある鴉羽からすれば、紅翼は取るに取らない存在ではあるのだが。

そんな訳で、互いのセキレイについて紹介していくと俺のセキレイが、シングルナンバーで構成していることが分かる。

No. 02の松、No. 03の風花、No. 04の鴉羽、No. 06の焰、No. 08の結女、廃棄ナンバーでありながらNo. 07の秋津とシングルナンバーだけで構成されているなんて、奇跡的すぎる  
と改めて実感した。

一方、壱ノ宮の方はNo. 104の灰翅とNo. 105の紅翼だけであり、戦力的には少し物足りないと感じてしまった。

転生した俺がこの世界に来たからこそ、こうなってしまった訳だが彼には申し訳ないことをしたなあと裏でそう思った。

その後、壱ノ宮と話し合った結果は彼女達が戦闘を行うことが基本となるが大規模な脱走など、人手が足りない場合は俺の方で戦う意思があるセキレイが出動することになった。

そのため、俺達は日常生活の中でルール違反を起こしたセキレイの機能停止をさせることが、中心となっていくだろう。

じゃないと、何のための懲罰部隊なのかが分からなくなるからだ。

そんなことを、彼らと話し合っていたらいつの間にか、日が暮れて外は雨が降り始めていた。

そんな様子を見て、俺は美哉に『雨が降り始めたので帰り道で濡れるかも。タオルを用意してくれると助かります』とメールを打って送信した。

そうすると、『了解しました♪』と言う返信が帰ってきたので適度に話を切り上げて、俺達は出雲荘に帰ることにした。

元々、午後から話があると社長に呼ばれていた上に顔合わせもしておけ、という高美からの指示もあったので今日は重要な仕事をしないようにしていた。

そのため、俺達は一足先に帰ることができたのだった。

「あつちやく、かなり降っているなあ」

「普通に歩けばべしよ濡れだねえ」

「だったら飛んでいきましよう!」

「さらに濡れそうな気がするんだが?」

「雨程度なら私の能力で来ないようにできるわ」

「最悪、氷の天井を作るから大丈夫」

俺が憂鬱そうにそう言うと、鴉羽達がそう言ってきたので考え方や発想が普通に人とは違うんだよなあと改めて思った。

普通だったら近くのコンビニで傘を買ったり、折りたたみ傘を鞆に



入れておくなどの準備をするのだが彼女達はセキレイだ。

建物から建物へ、飛び移るフリーランニングはお手の物だ。

そんな俺も、フリーランニングはできるのだが雨で濡れた屋根に飛び移るのはあまり好きじゃない。

滑るかもしれないし、それで転倒して地面に転落したら笑い話ではないので、鴉羽達に背負ってもらってからフリーランニングとしゃれ込んだ。

元々の基本スペックは彼女達の方が圧倒的に上なので、雨で屋根が濡れていても俺よりかは遙かに安定して飛んでいける。

その結果、俺としてはやや恥ずかしい格好になったが彼女達に背負わされる形で移動していると、町中で異常気象が発生した。

それは、竜巻が起きるほどの風がないのに竜巻が発生したので、俺達はやや唾然としながらも風花に確認すると彼女じゃないらしい。

それから考えられるのは、きつと愉快なセキレイと出会った葦牙が空を飛ばうとしたからだと言うことになった。

その後、俺達は偶然の出会いに驚くことになるとは露とも知らずに。

### 第3話 出合いと日常

出合いというのは、いつも突然として起こるというもので俺達が出雲荘に帰ってくると、そこには庭の木に引掛かった青年とN.O. 8の姿があつた。

その姿に、俺達の間で見知った顔があると言うことで互いに驚いた。

「皆人と結！大丈夫か!？」

「いててててて、あー！なんで道人さんが!？」

「道人さーん、服が破けてしまいましたー」

「ていうか、私達のことも忘れてないかい？」

「久し振りですー、そこのお2人さーん」

「ていうか！なんで道人さんがいるの!?!地元の製薬会社に勤めてたんじゃないの!?!」

「騙して悪いがあれは嘘だ」

「ええつーー!」

とまあ、5分ぐらいはこんな感じでカオスな状況だったが皆人の膝から血が出るほどの、怪我をしていたので一先ずは出雲荘に招き入れて怪我の治療と破けた服を取り替えることにした。

そのため、治療を終える頃には結の服も着物となって部屋にやって来た。

「さて、何から話せば良いのやら」

「さつき、製薬会社に勤めてるのが嘘だつて聞いたんだけど……」

「ああ、あれは色々と事情があつて対外的にそう言っているだけだからな?」

「結ちゃんに関わりがあるようだけど」

「セキレイ計画に関わっているからねえ、彼女ともよく知った仲だよな?」

俺がそう言つて、N.O. 88の結に話を振ると彼女は元気よく返事をしてくれた。

「はい！結女さんに手合わせしてもらいました!」

「……………てことは、あなたも葦牙ですか？」

「勿論、少なくともここにいるメンバーは鶺鴒計画のことは知っているよ」

俺が、事実を述べると鶺鴒達も頷いたので居間に集まったメンバーで自己紹介を始めた。

何故なら、初対面の人もいる上に皆人に関してはこの下宿に、多くのセキレイがいることを知ってもらうためだからだ。

ん？今、思い返してみるとセキレイとそうじゃないメンバーの比率がアンバランスだな。

葦牙が俺と千穂、葦牙じゃないのが健人、セキレイが美哉に松、風花に鶺鴒、焰に秋津、結女に鈿女と人間に対してセキレイが2倍以上になっている。

しかも、その原因が俺だから笑い話にもなりやしない。

そんなことを、説明すると皆人はこの下宿の大家である健人達に、自分達の事情を説明して頼み込んだ。

「お願いします！俺達、アパートを追い出されて行く所がないんです！」

「どうする、美哉」

「いいんじゃないかしら。これも何かの運命ですわ」

健人と美哉で、相談し合うと佐橋皆人と結を歓迎したが彼らはM・

B・Iと袂を分けているので、皆人と結には単なる大家さんとしか説明していない。

しかし、いずれは彼らのことを深く知ることになるだろう。

何せ、M・B・Iで働いている俺達がいる上に彼と婚ぐセキレイが俺の存在で少なくなっても、原作の主人公なのだから。

とは言え、今は彼らを迎え入れるために歓迎パーティやら何やらで忙しくなるため、明日は色々と買い出しをしたり、皆人達の荷物を持ち運んだりする必要がある。

そのため、今日は早めに寝ることにした。

深夜

「……………？誰だい？」

私室のドアが開き、誰かが入ってくるのを感じたので言いながら目を開けると、俺の布団に誰かが入ってきた。

そのため、急な変化に戸惑いながら身構えていると寝間着姿の結女だった。

「ふふっ、抜け駆けしちやいました」

「おいおい、変なことをすると美哉に殴られるぞ？」

「大丈夫ですよ、添い寝するだけですから」

そういう彼女が、急に入ってきたことに対して考えを巡らせると1つのことに行き当たった。

「……………もしや、結のことかい？」

「はい、神座島で彼女達を助けた縁えにしがここで繋がりました」

「そうだな、助けた甲斐があったというものさ」

No. 08の結女は、縁のセキレイと呼ばれていて鶺鴒せいら基幹と葦牙あしがを併せ持つので俺と婚いだと言っても、粘膜接触によって実際に婚ぐことはできない。

セキレイと葦牙の基幹は、凹凸おうとつのようなもので彼女はそれが両方ともあるために完全体の個体として完結してしまっている。

そのため、俺と婚ぐことができないのでやや寂しそうにこうやって来ることがある。

そんな時は手を握ったり、抱きしめながら彼女と触れあっているのだが大概の場合は、途中で他のセキレイが入ってくる。

「やあやあ、暇にしていそうだったから遊びについて結女、何してるのや」

「道人さんに抱きしめてもらっています」

「ずるいなあ、2人とも。最初に婚いだ私と一緒に寝ないなんて」

鴉羽がそう言いながら、既に俺達が入って満員な布団の中に無理矢理入り込んできた。

「ちよ、ちよつときついかな」

「大丈夫大丈夫、このぐらいならなんともないさ」

「そうですよ、道人さん。このぐらい、気にしないで下さい」  
「気にする、めっちゃするよ」

俺達はそう言いつつ、迫ってくる眠気に勝てずに眠りについたのだった。

ついでに、こう言った出来事はよくあることです。

翌日

寝苦しく感じた俺は、目が覚めると状況は深夜よりも悪化していた。

何故なら、深夜は結女と鴉羽だけだったのだが目が覚めたら6人に増えていた。

全く、夜這いはよろしくないと言われているのにこの有様である。いつか、鍵でもつけようかと思ったが彼女達の腕力に勝てる鍵は存在していないし、松に至っては抜け道を通ってくるだろうから無意味だ。

いつものことか、とため息を吐きながら時計を見ると6時半で起きるのには丁度よかった。

そのため、彼女達の拘束を解きながら這い出て立ち上がると、顔を洗いに洗面台まで行くと先客がいた。

「おはようございます」

「おう、おはよう。早いんだな、起きるの」

「今日、バイトがあるので」

「なるほどね」

俺と皆人でそう言っていると、美哉がやって来てこう言った。

「朝食ができましたので、起こしに行ってください」

「あつ、はーい」

「分かりましたー」

美哉にそう言われて、俺達はそれぞれのセキレイを起こしに行くと彼女達は既に起きていた。

「道人、起きたんだったら私達を起こしてもよかつたんじゃないか？」

「そうですよ、いくら何でも酷すぎます」

「いなくて寂しかったわあん」

「全く、君はつれないな」

「あやや、朝に悪戯しようとして失敗しました」

「勝手に入ってきたのによく言うぜ」

そんなやり取りがあつてから、彼女達はそれぞれの部屋に戻つていったので俺は布団を片づけてから居間に向かった。

そして、朝食を摂りながら皆で今日の予定を組み立てていった。

健人は出雲荘の管理をするため、そう簡単には出れないとのことだ。鴉羽と結女で皆人達の荷物を運んでもらい、秋津は美哉の買い物の手伝いをして松はいつものように自室に籠もり、俺は仕事のためにM・B・Iに足を運ぶ。

風花は、その道中での護衛だな。

如何せん、セキレイに深く関わつていてシングルナンバーを多数、婚がせている俺は敵対する奴らにとっては格好の的だ。

セキレイは、個体によつて強弱はあるとしても単体では十分に強いのだが、葦牙はあくまでも人間なのでそこまで強くない。

セキレイ同士での戦いで、その余波を受けて死亡するなんてことになつたら葦牙と婚いだセキレイは機能停止になつてしまうため、複数のセキレイを持つているのなら可能な範囲で護衛してもらつた方が  
良い。

何故なら、勝敗は別にしてセキレイ同士の戦いからある程度の距離を、とれるぐらいには時間稼ぎができる。

そういつた事情もあつて、セキレイ計画に深く関わつている俺は徒歩で移動する時はなるべく、セキレイの誰かと行動している。

## 第4話 南陣営との邂逅

「幼女の幻影が見えた？」

「うん、セキレイ計画を知っている道人さんなら何か、知っているかと思つて聞いたんだけど」

「…………お前、ついに変態の道を歩み始めたか」

「ち、違うよー変な眼差しで見ないで！」

出雲荘に来た皆人から相談がある、と言われて話を聞いてみると出雲荘に来てから幼女の幻影を見始めたと言つたため、受験のストレスでそういう道に入り始めたのかと思つた。

まあ、彼の反応からそう言つたことは無縁の様だったので幼女の特徴を聞き出すと、俺は皆人をつれて1人のセキレイの元へと向かつた。

「——という訳で、松の力を借りたい」

「…………みつたんみつたん」

「なんだい、松」

「松は変態さんの手伝いはしたくないのです」

「ちよつ！だから違いますって！」

俺と皆人で、松に話を聞きに行くと彼女は最初にそう言つたので、皆人は俺の発言と同じ反応を示したのだが見ての通り、皆人はヘタレな上に女性に弱いのでこう反応が面白い。

しかし、いつまでも弄っていると話が進まないので進むように促すと、松は自分のパソコン操作して該当すると思われるセキレイを画面に出してこう言つた。

「みなたんが見たい幼女はこの子じゃないですか？」

「！そうです。この子です！」

皆人がそう言うのと、俺達はため息をついて『やっぱり、変態じゃないか』と、異口同音で言うのと彼は猛烈に否定した。

皆人の話によって、画面上に映し出されたセキレイはNo. 108の草野だつた。

そのため、俺達はあからさまに弄っている訳だがその直後、美哉から朝食の準備が出来たとの知らせが来たので一先ずは話し合いを中断した。

そして、朝食が終わったら結や俺のセキレイ達、鈿女や千穂を交えた作戦会議となったのだが鈿女達は偶然、今日は休みだったので楽しそうと言うことで参加することになった。

まあ、流石に全員がパソコンで手狭な松の部屋に入れないため、皆人と結、俺と結女、千穂と鈿女が入ってその他のメンバーは通信機を搭載したアヒルちゃんを介して聞くことになった。

セキレイである草野がいるのは、異常繁殖した植物園なので作戦の内容は以下の通りだ。

まず、草野と会うチーム。

ここには、草野が反応しているであろう皆人とそのセキレイである結、結の支援メンバーである結女の3人で植物園へと潜入してもらう。

次に、植物園への道を封鎖しているM・B・I職員の排除と出入り口を確保するチーム。

出入り口を確保するに当たって、一対多の戦闘が予想されるので広範囲に攻撃ができる鴉羽と秋津が担当することになった。鴉羽はともかく、秋津は冷静の状況判断ができるしね。

最後に、出入り口に近寄ってくるセキレイを排除するチーム。

ここに俺と焰、風花とが入って想定外の状況に対処する遊撃隊の役目を果たすのだが松は、パソコンから広範囲を警戒してもらうことになる。

元々、松は戦闘を行うよりもパソコンや衛星などにハッキングをして情報収集するセキレイなので、肉体的な強さは普通の女性よりも少し頑丈な程度である。

そのため、基本的に戦闘には出ずに携帯などの端末で通信を行う程度である。

そう言うことで、話がまとまるとその直後にその場にいた葦牙の携帯のメールが来た。



それを見てみると、御中社長からのメールでこう書いてあった。  
『植物園あそびにとつても可愛いセキレイがいますよー。早い者勝ち!?!羽化させられるのはあなたかも!!』  
それを見て俺が思ったのは、「後であいつを5〜6発、ぶん殴っておこう」と言うもので皆人は「セキレイをもの扱いするなんて…」と呟いていたし、千穂はメール内容を見て「サイテー」と言っていた。  
そのため、俺達は昼過ぎに決行する予定を早めて午前中からにした。

それと、様子見を決めていた鉦女達も今回の件はさすがに見過ごせないと言うことで、鉦女は皆人達と共に行動して千穂は俺達の近くにいるもらうことにした。

何しろ、草野を求めて他の葦牙達が集まってくる可能性が高い上に、その下にいるセキレイが強ければ千穂の安全を守れないと言うことでこうなった。

そして、俺達は午前中にけりをつけるために行動を開始した。

#### 植物園 潜入口近くの屋上

皆人は結や結女、鉦女と共に鴉羽達が突破口を開いた植物園の入り口から入っていったので、鴉羽と秋津は入り口前で待機してもらって俺達はその様子を見れる建物の屋外に陣取った。

予定通りに進めば、1時間もしないうちに皆人は草野を見つけ出して植物園から出てくるだろう。

予想外のことが起こっても、入り口は鴉羽達が守っている上に皆人と一緒にいるのは懲罰部隊の2代目筆頭の結女なのでそう簡単にはやられないだろうしな。

そんな訳で、俺達はのんびりと待ちながら気軽に話し合っていた。  
「研究者は、研究結果を待つのが基本だからこう言うのに慣れてるけど皆はどうだい?」

「僕もガーディアンの仕事をしているから問題ない」

「私も道人クンがいるから大丈夫かな」

『ごつちもちよつかいを出したセキレイがいれば戦っていいって言われているから問題ないさ』

『私も……大丈夫……』

『みつたん達は楽かもしれないけど、松はPCを弄っているから大変なのですよ』

『そこは感謝しているさ』

そんなことを、言い合っていると皆人から報告があった。

『道人さん、例の少女を発見しました。これから接触します』

『了解した。松、皆人達の無線をオフにしてくれ』

『あいあ〜い、任せて下さい』

松がそう言うと、イヤホン越しに無線が切れる音がしたのでしばらくの間、皆人達の無線を聞けるのは松だけになった。

今回の作戦を、滞りなく進めるに当たって松が各自に対して1つずつヘッドセットが配られた。

これは、松が一元的に無線を扱ってその情報を元に俺が指示を出す形にしたからだ。

そのため、予想外なことが起これば状況報告などをして俺も柔軟に指示を出せるし、メンバーも状況も把握しやすくなる。

その結果、皆人達の無線が切れた後に早速、社長のメールにつられた葦牙が出てきた。

『おや？あれは陸奥じゃないか。それにあの黒塗りの車は一体？』

『陸奥ちゃんは元気そうね〜』

『あれが初代懲罰部隊のメンバー』

『双眼鏡があるから分かるんですが、ここからだとな誰か誰だか分かりませんね』

俺達がそう言い合っていると、鴉羽達のヘッドセット越しに御子上達の声が聞こえてきた。

『おや？陸奥じゃないか。久し振りだねえ、最後に会ったのは第一次神座島侵攻後だったね』

私は、対等に戦える敵を待っている。

この欲求は生まれ持った性なのか、自意識を持った時からずっとある欲求だ。

最初に、実戦に出たのは第一次神座島侵攻の時に上陸してきた敵兵を殺戮した時だった。

その時は、初めてと言うことで気分も高揚したが第二次、第三次と回数を重ねていくとその高揚感も薄れていって面白みがなくなっていくた。

そんな私を、研究者達は戦闘狂だの何だのと言っていたが、その中でも特にこれと言って偏見を持たずに接してくれた研究者がいた。

そいつは、本来だったら小学校に行っているはずの年齢だったはずだが才能に恵まれたため、親に連れられてこの島に来たらしい。

そのため、子供らしい考え方で接しているのだろうと考えて特に気にしなかったがしばらく、彼と会話をしていると私が戦闘狂だと分かってしまった。彼の名前は、武田道人。

最初は、ただの子供としてみていたけどその体の中には確固たる意思を持つ少年は、セキレイ計画で怪我をしながらも気が付けば大人になった。

そんな彼は、今でも子供が夢を見るかのように研究を行っている姿と身を挺して、大切なものを守ろうとする精神力に惹かれて気が付けば婚いでいた。

彼が発案した今回の作戦で、出入り口の警護を任された訳だがそれを全うしている間に懐かしい顔が、目の前に停まった高級車から出てきたではないか。

「おや？陸奥じゃないか。久し振りだねえ、最後に会ったのは第一次神座島侵攻後だったね」

「っ！鴉羽か。行方知らずだったらお前がまさか、こんな所でいるとはな。しかも、以前に比べて腕が格段に上がっていると見ると羽化をしたようだな」

「まあね、生活の方でも楽しくやっているよ」

「お前の口から戦闘以外で楽しいと聞くとはな………変わったんだな」

「そうかもしれないねえ」

私達がそんなことを話し合っていると、高級車の窓が開いて如何にもお坊ちやまといった少年が顔を出してき手こう言ってきた。

「ねえ、陸奥？あのお姉さん、僕のタイプなんだけど？」

「……諦めろ、彼女は既に羽化している」

「だったらその後ろのセキレイは？廃棄ナンバーらしいんだけど」

「どうなんだ？鴉羽」

「彼女もダメだねえ。心に決めた葦牙が既にいるよ」

私がそう言うとお坊ちやまは物を欲しがる子供のように駄々をこねた。

「だったら、数で畳み掛ければボク達の陣営に引き込めるんじゃない？」

「……と、彼は言っているんだがどうだ？お前の葦牙が了承すればこっちに来ないか？」

「うーん、どうだろうねえ？彼はあまり、そう言ったのは好きじゃないから」

私はそう言いつつ、道人がいる建物の屋上に目をやった。

## 第5話 緑の少女

『だったら、数で畳み掛ければボク達の陣営に引き込めるんじゃない？』

『……と、彼は言っているんだがどうだ？お前の葦牙が了承すればこっちに来ないか？』

『うーん、どうだろうねえ？彼はあまり、そう言ったのは好きじゃないから』

鴉羽がそう言うのと、こっちを見てきたので俺はすぐに首を横に振った。

あんな小僧の下で懲罰部隊の活動もしないといけないとか、どんなドMプレイだよ。

いやらしい展開にはならないが、少なくとも秋津に関してはあいつの物になるだろう。

そうならば、秋津は涙を流すだろうからそんなことは到底できないし、わがまま小僧の下で働くとどんな命令を受けるか分からない。

その分、御中社長の方が交渉の余地が残っているからまだ良いんだが、あいつの場合はそう言った交渉がしにくいから困る。

そのため、俺は彼の傘下に入らない旨をヘッドセット越しに伝えながら首を横に振ったのだ。

『残念だけど、うちの葦牙はあんたみたいな坊ちゃんの下に付く気はないとのことさ』

『なんで？』

『よせ、御子上。ここは引くぞ』  
そこまで言っていないとは言え、鴉羽がそう言うのと御子上が突っかかってきたのを陸奥が制した。

その際、陸奥もこっちを見てきたので誰が彼女の葦牙をやっているのかが分かったのだろう。

初代懲罰部隊の中でも一番、接点がなかったと言ってもあくまで美哉達と比べての話なので、彼とはそれなりに交流はあった。

そのため、陸奥としても俺と関わって面倒なことになるよりは撤

退した方が得策だ、と判断したようだ。

しかし、当の本人は彼の意図する所に気が付かないまま、鴉羽に突っかかっている。

『なんでき。3対2なら有利に勝てるだろ』

『残念だが遠くで見ているセキレイがいる。しかも、そのセキレイはシングルナンバーで2羽もいるから話にならん。とっとと引くぞ』

『こんな奴、私1人で充分ですわ！シングルナンバーだからってあなたに命令される筋合いはなくなつてよ！』

『そうよ！陸奥は下がつて！』

『オイ馬鹿ヤメロ』

陸奥は、鴉羽のヤバさをよく知っているから制止しようとするが彼のセキレイは、陸奥の制止を無視して車から飛び出してからこう言った。

『No. 43の夜見ですわ。そのすました顔をズタズタにしてあげますわ』

『No. 38の蜜羽よ。あんたなんて速攻で倒してあげるんだから』

『No. 04の鴉羽。そこまで言うんだ、少しぐらいは楽しませてくれよ』

そんな彼女達の意気込みを感じて、ゾクゾクした鴉羽がそう言ったので俺は既視感を覚えた。

「見える、見えるぞ。御子上の方のセキレイが数秒後に血の海に沈んでいるのを」

「鴉羽ちゃんは結構、強いからね〜」

『侵攻時みたいになりますよねえ』

「それだけ、強いんですか？」

俺や風花、松は神座島侵攻の時を思い出してそう言うのと千穂は不思議そうに、聞いてきたので俺から説明する。

「鴉羽はセキレイの中でも上位にランクインするほどの強ささ。鉦女でも彼女に勝てないだろうな」

「そんなに強いんですか」

「正直、彼女が俺のセキレイになつてくれなかつたらどうなつていた

ことやら」

俺がそう言うと、千穂は啞然とした顔になった。

何故なら、セキレイ計画に深く関わっている俺が鴉羽の強さを思い出したかのように軽く身震いしたからだ。

そのことから、鴉羽がどれだけ強さなのかが分かるという物だ。

そして、そんな会話をしている内に鴉羽が一瞬のうちに決着を決めて、夜見と蜜羽は自分の血で地面を濡らして倒れていた。

その様子を見て、秋津はぞくりと背中が寒くなったように息を吐いた。

あそこでもし、自分が鴉羽と敵対していたらすぐにやられていたと考えたようなので、後でちゃんとあやして置くことを決めた。そういう配置にしたのは俺なんだし。

そんな様子を見た御子上は、陸奥を引き連れてさっさと車を出して逃走していった。

『こちら、鴉羽。戦闘は終了した』

「了解した、変化があるまで待機せよ」

『鴉羽、了解』

「……………秋津」

『なに？』

「鴉羽とペアを組ませて済まなかった。後でちゃんと愚痴を聞くからな」

『……………その時にお菓子もちょうだい』

「わかったわかった」

俺がそう言うと、鴉羽や風花が嫉妬して焰も「うれしくなくななくな……………」と呟いていた。

そんなことを言い合っていると、松からの通信で皆人達が無事に草野を発見して救出したことを伝えてきたので、俺達は植物園の入り口で落ち合った。

それと、皆人達を待っている間にM・B・Iのヘリが来て機能停止したセキレイを回収して、痕跡も可能な限りなくしていったので皆人に戦闘があつたことを悟られずに帰ることが出来た。

## 深夜

あその後、出雲荘に帰ると誘拐だと勘違いした美哉が居合いの練習で使う日本刀を出して、出雲荘から犯罪者を出す訳にはいかないと言ってきたので俺が釈明した。

彼女は長年、セキレイ計画から手を引いていたので最後の方のセキレイはあまり詳しく知らないとのことだった。

一応、松から説明してもらっていたので軽い冗談ではあったが皆人には、十分な恐怖を与えることができた。

その一方で、久し振りの戦闘で興奮してしまった鴉羽の体の疼きをなくすために、俺達は深夜の町並みを歩いてラブホに到着した。

「こんな場所に来たからには徹底的にやろう」

「ふふっ、君は私のことをよく知ってるんだねえ」

「そりゃ、伊達に君の葦牙をやつてないからね」

俺らがそう言うと、俺のセキレイが先回りして来ていたので呆気に取られつつも彼女達と共に入って行って、7人で夜明けまでやりまくったよ。

すると、彼女達は猛獣のように俺を求めてきたので夜が明ける頃には疲れ果てたさ。

そんなこんなで終わった後、翌朝には俺達が出雲荘に戻ると庭に面している廊下で草野が皆人と婚いでいた。

そうすると、草野の背中から6本の翼のような光が現れてそれを祝福するかのようになり、草木が生い茂ったのでこの場面だけを見たら、口リコン容疑で逮捕されてもおかしくはない。

「よお、ロリコン葦牙」

「ロリコンって……」

「まあ、作戦を立案した俺も一枚噛んでるからとやかく言わないけどさ。ちゃんと責任、持ってやれよ？それと草野ちゃん、羽化おめでとっ」



「お兄ちゃん、ありがとう。それと、クーはクーで良いよ？」

「オケオケ、これからもよろしくね。クーちゃん」

彼女が無邪気な笑顔でそう言ったので、俺も笑顔を作って親指を立ててそう返した。

そのため、皆人をからかいつつも朝食を摂るために台所に向かった。

## 第6話 それぞれのセキレイ

クーちゃんこと、草野を救出して皆人に婚がせた後は比較的、平和的だった。

南陣営である御子上が、やられたセキレイの逆襲のために出雲荘に攻撃を仕掛けてくるなんてことはなかったし、俺が移動している間に強襲してくることもなかった。

そんな中、健人の知人で美哉からクズの人と言われていている葦牙がやって来た。

「いよーっす、飯を食いに来たぜー」

「また、食事をたかりに来たんですか？クズの人」

「相変わらず、定期収入を得ずにたかりに来て美哉に棘を刺される瀬尾であった」

「オイてめえ、人の悪口を堂々と言うとは良い度胸だなあ？」

飯をたかりに来た柄の悪い青年は、瀬尾と言って光と響の葦牙をしながら請負業うけおいをしている。

と言っても、収入は安定していないので光達もアルバイトをしている上に、M・B・Iの上限額がないとされているマネーカードを1000万も引き出した時点で差し押さえられるほどのクズさである。

本人曰く、一般人が知り得ない情報を得るために使いまくったらしいので、正真正銘のクズかと聞かれても答えるのに困るのだが。

さらに、健人やM・B・Iを離反した当初の美哉は家事が全く出来なかったので、美哉に家事を教え込んだのが意外にも彼なのだから義理には厚いようだ。

しかし、普段の行動からはクズと言われても仕方ない行動ばかりなので、俺や美哉達の間では弄るネタになっている。

ていうか、M・B・Iのマネーカードがあるなら別の企業に行っても大丈夫じゃん。

瀬尾と同じ金額まででも、合計で6000万も引き出せるから当面は大丈夫だし、俺個人でも世界に役立つ特許をいくつか持っているんだからそれを敷金にしてもよかった。

そのため、懲罰部隊の依頼は断っておけばよかったなあと思いつつ、瀬尾と話していると皆人がやってきた。

「あれ？瀬尾さんじゃないですか。どうしたんですか？」

「おーう、青年。元気にしていたか？」

皆人は、バイトで建設業の仕事から帰ってきたので時間的に昼食を取るようになった。

瀬尾はどうせ、追い出しても裏口から入ってくるだろうからとつとと食わせて帰らせた方がいい。その方が楽だしね。

そうして、昼食をしようとした時に一悶着があった。

くーちゃんが、瀬尾のことをガラが悪くて口調も荒いお兄さんだと思つて、瀬尾と一緒に食べたがらなかった。

そのため、瀬尾が軽く脅そうとしたら漬物石が飛んできて彼の頭に直撃した。

「ダメですよ？こんな小さい子をいじめては」

「そうだよ、瀬尾。そんなことは流石の僕でも許容できないよ」

「ああはい、すみません。オレが悪かったつて」

「あなたは昔から変わりませんよね♡」

「だからこそ、弄り甲斐があるんだけどさ」

「あんたらも変わんねーよな」

俺は、彼女をセキレイだと知っているから数キロの重さがある漬物石を水平に飛ばす美哉を、腹を抱えて笑いをこらえているが皆人とくーちゃんは互いに抱き合つて顔面蒼白になりながら震えていた。

そんな健人と美哉は、笑いながら般若の雰囲気を出していて瀬尾は頭から血をダラダラと出しているの、この場面だけを見たら軽い修羅場なのだが買物ついでに、皆人と帰ってきた結や結女はいつもと変わらない雰囲気だった。

そんなこんなで、昼食を摂り終わると玄関から女性の声があった。

「あの一ー、すみませーん」

「おん？この声は……」

「俺のツレが迎えに来たようだな」

その声に、俺が反応すると瀬尾がそう言つて立ち上がったので一緒

に、俺や皆人が玄関に向かうとそこには見知った顔があった。

「げげ、道人が一緒かよ」

「光く。この後、絶対にM・B・Iに報告が入って私達が捕まっちゃうんだよ」

「オメエらはそんな目で俺を見ていたんだな。軽くシヨックだぜ」

「あ、あのー！」

俺と光、響コンビがそう言い合っていると皆人が瀬尾に対してくーちゃんの件で、情報を流してくれたことに感謝を伝えた。

どうやら、建設工事で偶然にも一緒になった時にタレコミという形で、瀬尾から情報をもらってその後に俺に相談をしに来たという訳だ。

そのため、皆人は瀬尾から名刺をもらうのと同時に光達は結達が買ってきた米袋を2つ、もらってその場はお開きになった。

「やあー！とうー！」

「まだまだ、力が入りすぎていますよー！」

瀬尾クズの人か帰ってから数日後、結は結女に特訓を受けている最中だった。

どうやら、同じタイプのセキレイとして成長した2人はそう多くはいないタイプのセキレイなので、師弟関係の様に育った。

他のセキレイで、原作やアニメで出てきたのはNo. 86の葛城ぐらいだが彼女の場合、足技を使う格闘術だから別系統だろうなあ。

そう思いつつ、結女による結の特訓を見ていると玄関の方から女性の声がした。

「あのー、すみませーん」

「はい、何でしょう」

丁度、美哉が玄関を掃除していたようで彼女が対応したがその声は俺にとって、懐かしい声であるので玄関に行ってみるとそこには皆人の妹のユカリとNo. 107の椎菜がいた。

「あれ？ユカリは新東女子大学に入学するから良いとして、何で椎菜がいるんだ？」

「やつほー、道人兄さん。この子はさつき拾——」

「道人さん、ゆかりさんにセキレイ計画を教えて良いですか!？」

俺が彼女達に聞くと、ユカリはやや困った顔で言い訳しようとして椎菜がそう言ってきたので、俺とユカリはそれぞれの考えで驚いた。

ユカリは、ただの弱気な美少年が変なことを言い始めたと思いい、俺は彼がこんなに積極的だったつけと考えるほどに切羽詰まった顔でそう言ってきたからだ。

そのため、美哉に皆人を呼んでくるように頼んで2人を出雲荘に招いた。

「へー。じゃあ、お兄ちゃんもそのセキレイ計画に参加しているんだ」「そういうユカリも、椎菜と婚いだらセキレイ計画に参加することになるよ?。」

「と言っても、椎菜の方がユカリに反応しているんだから仕方ないだろう?。」

皆人達、佐橋家のメンバーとは俺が小さい頃からの付き合いだったので知り合いとして、互いのことを知っていたので事情を説明しやすかった。

と言っても、俺達は健人以外が葦牙でそれぞれのセキレイを持っていく程度しか、情報共有をしていないのでここでも美哉と健人はただの大家さんと言う認識だ。

俺達が情報共有している間、椎菜はくーちゃんの安全が確認できたことでホッとしているし、くーちゃんもくーちゃんに椎菜と出会えたことで喜んでる。

そんな雰囲気、その場にいたメンバーはほっこりしつつも話が進んでいって、あつという間に時間が過ぎていった。

その中で聞いたのは、椎菜は南陣営に狙われて逃げ惑っている最中に偶然にもユカリと遭遇して、その瞬間にゆかりが自身の葦牙だと分かっていたらしい。

そして、セキレイ計画の中で自分の利益のためにセキレイを扱う輩もいるから、気をつけるように伝えるとユカリは椎菜の様子からしっ

かりとした表情でこう言ってきた。

「そんな時はその葦牙をぶん殴って逃げるから！」

「ははっ、佐橋家の女性は頼もしいな」

「全くよ！お兄ちゃんもヘタレじゃなかったら帝東大に速攻で入れたのにね〜」

「ユ、ユカリ〜」

その口調や態度は、佐橋家の娘と言う気質を感じ取るには充分だった。

どうやら、皆人の家では女性が中心として生活していたようだったし、皆人の父親は御中広人なのでそう簡単には出会えない。

そんなこともあって、父親が誰なのかはこの時点では知らない上に知ったとしても父親として、認識できるかというのも疑問だ。

そんな訳で、ユカリと椎菜は自分達の下宿に戻っていくと騒がしかった出雲荘は元の雰囲気の戻り、気が付けば既に夕方になっていた。

そのため、夕食と食べた俺達はそれぞれの部屋に戻ってのんびりと過ごすのだった。

## 第7話 南陣営との決裂

『新東帝都の諸君！私はM・B・Iの御中広人である』

そう言って映し出されていたのは、いつものように悪ふざけをしているような顔の社長がいた。

草野を婚がせた後、翌日には盛大にぶん殴ったはずなんだがそれでも懲りていない様子だった。

そんな彼は、テレビ画面の中でこう宣言したのだ。

『諸君らに宣言しよう！帝都は我がM・B・Iが占拠した。新たな神代しんたいはここに開かれた!!』

そんな茶番が行われている最中、俺がいたのは本社で新しい研究を始めている最中で暇つぶしに一緒に来ていた鴉羽と共に彼の演説を聴くことになった。

「あんの野郎、ついにやりやがったか」

「これで第一段階は終了して、第二段階に突入したと言うことかい？」  
「そうだな。羽化していないセキレイは、今日の朝の時点で残り10羽を切っていた。そうなれば、この帝都は戦場と化すだろう」

鶴鴿計画は、全部で三段階に分かれていて第一段階は帝都に鶴鴿を解き放つことが目的であるため、一定数のセキレイが婚ぐと第一段階が終了して第二段階に移行する。

第二段階では、残ったセキレイを求めて帝都が戦場となるのだが原作だと、この段階でN.O.09の月海とN.O.06の焰が皆人に婚ぐはずだったが焰に関しては俺と婚いでいる。

その上、N.O.02の松とも婚いでいるので月海が皆人に反応するかが疑問である。

最悪の場合、戦力拡大も含めて俺と強制的に婚がせても良いんだが無理矢理、そう言うことをするのは苦手なんだよなあ。

なんて言うか、俺の中で無理に婚ぐのは如何なものかと言う主義があつて否定的なんだよなあ。

そのため、可能ならば皆人に婚がせるがそれが無理だったら嫌々ではあるが、俺に婚いでもらうことにした。

どうせ、皆人に反応しなかったら他の葦牙のところに行つて、俺達と戦うことになるんだし。

そう思いつつ、今日の研究する分を終わらせて出雲荘に帰ると夕食後に松に呼ばれて、彼女の部屋に行つてみると皆人もいた。

どうやら、原作通りに皆人に反応したんだろうなあと思いつつ、話半分で聞いてみた。

「みつたんみつたん、みなたんはどうやら2回連続でセキレイの夢を見たらしいのです」

「ほう？2回連続とは珍しい」

「ええ、そこで松はPCで調べてみると意外なことが分かったんです」「意外なこと？それはなんだい？」

松は俺を手招きして、メインで使っているパソコンを見るように伝えると、そこには2羽のセキレイが映っていた。

そこには、N.O. 09の月海とN.O. 86の葛城がいてどうやらこの2人が今回、皆人と婚ぐセキレイということになるのかと思つて、松に聞いてみると予想通りの答えが返ってきた。

「そうなのですよ。元々、みなたんのセキレイって結たんしかまともにも戦えないので不安に感じていました。そのため、この2人がみなたんのパーティーに入ってくれることはとても大きいことなのですよ」

「確かにな、N.O. 09の月海は考え方に難があるが腐つてもシングルランバーなんだし」

俺達はそう言いつつ、月海達をどうやって探すかと言うことに考えを巡らせていると、鴉羽が松の部屋に入ってきた。1人の少女を連れて。

「さつき、風花とお酒を飲み縁側でくつろいでいるとこの子がやって来てね。どうやら、追われていたようだから追っ手を吹き飛ばしてもらったよ」

「おお、そいつは助かる。それで君はN.O. 86の葛城だな？」

「……………(コクリ)」

俺がそう言うと、葛城は頷いたので事情を聴くとどうやら東陣営か



ら逃げて来たらしい。

さらに深く聞くと、無理やり婚がれようとしたので必死に逃げているうちにここまで来たとのことだった。

そして、葛城は皆人と会うと自分の葦牙だと分かったようなので出会った勢いで婚いだのだが、皆人は急展開でかなり恥ずかしがっていなかなかやりたがらないけど、結と似たような状況だったらしいのでやってもらった。

その結果、皆人のセキレイは合計で3羽になったので作戦会議では以下の通りに決まった。

まず、月海と婚ぐチーム。

ここには、皆人が入るのは前提として彼を護衛するのは結にくーちゃん、そして新たに彼のセキレイとなった葛城だ。

この4人で、動くことになるがあまり警戒させると面倒事に巻き込まれる可能性があるから、結と葛城は一定の距離を取りつつもすぐに駆けつけられる位置にいてもらった。

次に、松のハツキングによつて集まって来た葦牙達の牽制するチーム。

これは、第二段階ということで血眼になって探している葦牙達をうまく誘導して、月海と戦闘をさせてこっちの索敵に引っかけやすくするためだ。

月海は、大の葦牙嫌いで知られているのでその性格からそう簡単には婚ごうとしないからだ。

そのため、その性格を利用して敢えて彼女を戦闘で消耗させてから、頃合いを見計らって婚がせようというものだ。

正直、これは博打的な要素があつて東陣営はともかく、南陣営が参加するかどうかにかかっている。

上手くいけば、三つ巴の状態に持つてこれるが下手すると東陣営と全面戦争になる可能性があるので、ここで消耗して潰れてもらっても困る。

それに、南陣営は鴉羽によつて2羽のセキレイを失っているのに乗ってこない可能性があるが、シングルナンバーの強さを知っている

から釣られてくる可能性が高い。

そうなれば、三つ巴の状態から月海をゲットできる可能性が9割以上だと見ている。

こう言った状況では、何が起こるかが分からないので一先ずは三つ巴の状況を作り上げてから、皆人が月海と婚げる状況に持つていつて牽制するのが良い。

そうしないと、残り1割の可能性に全てを持って行かれるからであり、原作を知っている俺からすると変に弄り倒されて未知の未来線にされると予測できなくて困る。

それだけ、シングルナンバーの強さを知っているのだが月海に暴走させられて、原作の鈿女が不本意な機能停止させられるような出来事が起こるかもしれない。

もしも、それが俺のセキレイならかなりのショックを受けて引き籠もるかもしれないから、そう言った出来事はなるべく避けたい。

そんな訳で、他の陣営を巻き込んで月海を皆人に婚がせよう作戦を開始するのだった。

数日後、松が南と東の両陣営のアカウントにハッキングをして偽のメールを送信すると、両方から捜索隊が編制されて月海の捜索が開始された。

事実上、最後のシングルナンバーである月海は貴重な戦力として重宝するだろうし、なんとしても手に入れたいのは確かである。

そのため、両方からの食らいつきは尋常ではなかったので予想通りに戦闘が始まった。

そのため、現場に皆人と彼のセキレイである3羽と結女と秋津が向かい、焰と風花が退路の確保へと向かった。

そんな中、俺と鴉羽は不測の事態に備えて現場近くの道を歩いていると、前方から1つの集団がやって来た。

『みったん、東陣営の葦牙がやって来ています』

「こちらでも確認しているから接触してきたら対応する。葦牙、アウト」

松の通信に、俺がそう言ってその集団とすれ違おうとした時にリーダー格に声を掛けられた。

「失礼、M・B・Iの天才的研究者である武田道人さんですね？」

「……………そうだと言ったらどうする？」

「私は氷我ひが泉いずみと申します。この鵺鴿計画に関して、疑問に思う所があります。まして賛同者を集めているんですよ」

リーダー格の青年が、自己紹介をすると鵺鴿計画についての考えを俺に話した。

彼曰く、セキレイというイレギュラーが突如としてやって来て葦牙にさせられて、強制的に命がけのゲームに参加させられる。

どこぞやのVRMMORPGのようなデスゲームによって、人生を台無しにさせられた葦牙も多数いるようなのでM・B・Iを共に倒さないかという話を持ちかけられた。

氷我が持つと言っている冰山会病院と、その系列会社の組織力があればM・B・Iを倒せるだけの資金は提供しようという物だった。

しかし、そんな話を聞いて鴉羽がこう啖呵を切った。

「生憎だけど、うちの大将は鵺鴿計画を楽しんでいる節があるよ。だからそつちがこつちの下に付くって言うんだったら考えておくけど？」

「貴様ア！無礼なことを言うな！」

「無礼だから何だってんだい？それともここでやるかい？」

「貴様！」

その啖呵に氷我のセキレイが、怒るように反応したので威嚇するかの様に笑って持っていた刀を鞘から少しだけ、出して俺を守るように前に出た。

しかし、セキレイ同士の戦いになる前に氷我がそのセキレイを制した。

「織刃おりは、下がりなさい」

「ですが！」

「織刃、言うことの聞けないセキレイは要らないよ」

その言葉に、カチンときたがそれを表情に出さずに俺も鴉羽を下げ

る。

「鴉羽、どうやら今は戦う気はないようだ。だから下がってくれ」

「はいはい、分かっていますよ」

「うちのセキレイが失礼した。彼女にはよく言っておくよ」

「いえ、所詮はセキレイの戯れ言ですので気にしていません。それで今回の件、考えで頂けないでしょうか？」

「すまんが断らせてもらおうよ」

「…………理由を聞かせても良いでしょうか？」

氷我の質問に、俺が即答すると彼は眉をひそめてそう聞いてきたので俺はこう答えた。

「単純にあんたとは話も目的も目標も合わない。セキレイの発言を所詮と片付けたら、意に沿わないセキレイを切り捨てるような発言も嫌いだ。これで充分だろうか？」

「……………そうですか、わかりました。ですが気が変わったのならこちらにご連絡ください」

彼はそう言つて、名刺を渡してきて去つて行つたがあそこまで胡散臭い話をする奴とは初めて会つたな。

しかも、原作では鈿女が千穂を人質に取られたのも領ける。

あそこまで、姑息に自分の利益を得ようとする輩は好きになれそうになれない。まあ、既得権益ジジイ共のルールに雁字搦めにされている立場を考慮すれば、彼の言い分も分からんでもないけどな。

そう思いつつ、俺は鴉羽に話しかけた。

「しっかし、御子上の時もそうだったが鴉羽があそこまで啖呵を切るのには珍しいな」

「ふふっ、誰かさんの性格が乗り移つたんじゃないかな？」

彼女がそう言いつつ、俺の手を握つたので俺も握り返すと松からの通信が入った。

『みつたんみつたん、みなたんが月海と婚ぎましたよ』

「はいよ……………じゃあ、彼らとも合流するか」

「そうだね」

俺らはそう言いつつ、皆人や結女達がいる場所に向かった。

## 第8話 羽化

「ねえ〜マスター…………ねえってばあ〜…………早く起きてよお〜」  
「ぐぬぬ…………後、5分……………」

秋津が、俺を起こしに来たが昨日は夜遅くまで研究していたんだ。だからとても眠い。

そんなに、ゆっさゆっさしながら起こそうとしても無駄だ。眠気には勝てない。

「いくら寝落ちしても研究室で寝ると、風邪引くよ〜?」

「何を…言っている…………?…ここは出雲荘だろ…………?…」

そんな秋津のツツコミに、俺はそう言いながら目をこすりながら開けてみるとM・B・I本社にある俺の研究室だった。

どうやら、研究過程で寝落ちしてしまっただけらしい。

そして、パソコンには研究成果をまとめたレポートが未保存で置かれていたので、パソコンが壊れたら一からやり直しになる羽目だった。

そのため、レポートを保存しながら時計を見ると朝の10時だったので完全に寝過ごしたようだ。

「どうやら完全に寝落ちだな。秋津、なんか持ってきてるか?」

「一応、ご飯と着替え、それに歯磨きセットを持ってきている」

「オケオケ、着替えるから部屋から出てくれるか?」

「イヤ」

俺がそう言うと、秋津が首を横に振りながらそう言ってきたので理由を聞いてみた。

すると最近、俺と接する機会が少なかったので可能な範囲で一緒にいたいという望みだったし、何よりも彼女の愚痴を聞くという約束がまだだった。

そのため、まずは秋津が見ている中で着替えてから歯磨きをして遅めの朝食を摂ることにした。

「うん、このご飯はうまいな。誰が作ったんだ?」

「……………私」

「秋津が？そうか、ありがとな。美味しいご飯を作ってくれて」  
「いい、マスターの笑顔が見れるから」

秋津ちゃん、マジ天使と思えるぐらいの微笑みだったのでほっこりしていると急に、彼女がモジモジし始めたので俺は聞いてみた。

「あ、そのなんだ。手洗いだったらドアを右に行けば……………」

「違うの。なんだか、胸がドキドキしてマスターと一緒にになりたいの」  
「……………お前」

顔を真っ赤にして、涙目になった秋津の予想外の発言に俺は戸惑っている。廃棄ナンバーを示す額の鳥のマークが光り始め、一定の時間で綺麗になくなってしまった。

恐らく、鴉羽達とんやかんやで一緒にいたことや俺が小さい頃から彼女と顔を合わせていることが、彼女の中でのコンプレックスを解消して廃棄ナンバーから羽化が可能なシングルナンバーへと変化したのだろう。

彼女は、調整に失敗したのは自分のせいで失敗したら捨てられると思っ込んでいた。

しかし、調整中でも顔を合わせていた俺や他のセキレイ達と生活しているうちに、その思い込みは解れていって自分のダメな所あったり、失敗しても捨てられないと気付いたと思う。

そのため、彼女の鵲鳩基幹が俺に反応して体が火照り始めたのだろうと考えていると、秋津はおずおずと俺に近づいてきてこう言った。

「まず、ター……………秋津と、婚いでくれる？」

「勿論。偶に喧嘩もしちゃうだろうけど、それでも一緒にいてくれるかな？」

「ん、マスターと一緒にがいい」

俺達は、そう言い合ってから互いの顔を近づけて1つになった。

その瞬間、彼女の背中から雪をイメージした羽が光り出して羽化が成功したらしい。

そして、彼女の首の下に鵲鳩紋が浮かび上がると満面の笑みを浮かべたので、これで秋津は俺のセキレイとなった。

「……………ん、マスター」

「なんだい?」

「幾久しく」

「おう。こつちこそ、よろしくな」

俺達は、そう言い合うと互いに笑いあってから仕事をすぐに終わらせて出雲荘に帰った。

「ええー!? 今まで婚いでなかったの!」

「そう言えば、鵲鳩紋を確認してなかったです」

「互い、長く生活していたのに婚いでいなかったのには少なからず、疑問に思っていたぞ」

「そう言えば、廃棄ナンバーは婚げないと聞いたことがある」

「あーちゃん、くないだの?」

俺達が、婚いだことを報告すると皆人と結達が驚いていたが、逆に鴉羽達からはやつとかといった感じで話しかけてきた。

「ようやく、婚いだんだねえ」

「ええ、やつとですな」

「なんだかんだで1番、手間の掛かるセキレイでしたな」

「それだけ、可愛く思えるものよん」

「また、ライバルが増えた。うれしくなくな……」

「すまんすまん、俺もそうだが彼女との距離がなかなか縮まらなかつたんでね」

第一段階以前から、彼女達と付き合っている中で第二段階で婚いだ秋津がシングルナンバーの中でも1番、遅くなった訳だがこれによって全員が祝詞を使える状態になった。

祝詞と言うには、セキレイに1人1人が持っているセキレイ専用の必殺技みたいなもので焰だったら炎だし、風花だったら風、松だったらハツキング、と言うようなものである。

これを行うには、葦牙と婚いだセキレイがキスをすることによって発動できる。

秋津の場合、氷を使ってその場の任意の範囲を強制的に凍らせることができるようになるので、かなり心強くなったと言えます。

それに、秋津は調整に失敗して羽化できないと言われていたのに俺とできるようになったから、彼女を含めた皆で彼女にあったわだかまを取り除いた結果だと思う。

そんな訳で、秋津の羽化を祝って夕食はパーティになった。

数日後

「んで、なーんで俺のところに来るのかねえ」

「ははは、すみません」

「……………」

「……………（ふるふる）」

秋津の羽化後、第二段階が開始してからしばらくして葦牙にとって帝都が封鎖されていく中で、皆人が偶然にも知り合った同士の浪人生とそのセキレイを連れてきた。

彼らの名前は鷗しぎハルカとNo.95の久能だった。

鷗は皆人と同じく、帝東大を受験して2浪中の浪人生で久能は原作でも出てきたように、大声しか使えない最弱のセキレイだ。

第二段階以降、セキレイ同士の戦いが激化する中で偶然にも皆人が以前、借りていたアパートに鷗が住んでいたことによつて意気投合して皆人に脱走計画を話したらしい。

そのため、多くのセキレイを抱えて信頼できる葦牙である俺の元へ来たとのことだった。

なんて言うか、段々と皆人がトラブルメーカーに見えてきたような気がするが、原作では結が覚醒するきっかけとなっていた以上はそういうイベントなんだろうなと考えることにした。

という訳で、皆人と鷗に改めて現状を説明する。

「まず、予備知識として今の帝都がどうなっているか、分かる奴はいる？」

俺がそう言うと、皆人や鷗と彼らのセキレイは首を横に振つたので帝都の地図を取り出して、太めのマーカーで線を引いてこう言った。



「現在、帝都はマーカーで引いたラインを元に4つのエリアに分かれている。葦牙の中で、暗黙の了解みたいに分かれているのは東西南北のエリアでそれぞれに1人の葦牙が縄張りを張っている」

「てことは、出雲荘がある北のエリアにもいるってことですか？」

「そうなるな」

皆人の疑問に答えつつ、俺は話を進めていく。

第二段階が始まってから、M・B・Iはセキレイ達が脱走するのを警戒して警備を強化しているのが、懲罰部隊からの情報で分かっている。

まあ、植物園にいたような常設部隊程度だったらセキレイの力でもなんでもなるんだが、問題なのが懲罰部隊に参加しているセキレイ達だ。

原作では、鴉羽と共に紅翼と灰翅のトリオで構成されていたがこの世界では、紅翼と灰翅のコンビの他に習志野と来瀬くるせが壱ノ宮のセキレイになった。

そのため、4人組のカルテットになってしまったのでマトモに戦えば脱走どころか、逆に機能停止にさせられる。

俺がそのことを伝えると、結はかなりやる気を出したみたいだ。

そのため、俺達は詳細な計画を立てていった。

## 第9話 脱走計画 前編

「珍しいわね、お酒を飲まないあなたが私と一緒に飲むなんて」  
「そりゃ、美人な姉ちゃんと一緒に飲めるんだったら飲むさ」

風花の質問に、俺が答えるが今の時間は脱走前日の深夜だ。

さつきまで、駆け落ち作戦の宴と称したものが風花が主催と俺の出費で行われていた。

ここで、皆と会ったのは何かの縁と言うことでどんちゃん騒ぎをしていたのだが、10時が過ぎれば眠たくもなる上に明日が決行と言うことで日付が変わることにはお開きとなった。

そんな中、風花は寂しそうに缶ビールを片手に飲んでいたのでお酒をあまり飲まなかった俺が、彼女の話し相手になつていたので

「だけど、あの葦牙クン。ちゃんと脱出できるかしら」

「久能をつれて、か？懲罰部隊のメンバーを見たら無理だねえ」

「ふうん、それなのに脱出計画を立てたの？彼女達に嫌われるかもしれないのにい？」

「別に紅翼達に好かれようとして入った訳じゃないしねえ」

俺はそう言いつつ、缶ビールを仰ぐがあまり残ってはいなかったので気晴らしにはならなかった。

そんな俺に対して、風花はビールを少し飲んでから俺とキスをして口移しをしてきた。

「どうやら、お姉さんの目はごまかせないらしい。」

「とても不安がるあなたを見ている面白いけど、格好いいあなたの方が良いわ」

「そうだな。計画実行時に、懲罰部隊と鉢合わせになったら鉄橋で戦闘になるだろう。そうなれば、今の結達だけでは役不足だろう」

「それでもあなたは計画を進めた。理由があるなら聞かせて欲しいわ」

「理由は単純で、自分達の限界というものを知ってもらいたかったのさ」

俺はそう言って、結達と出会ってからのことを思い出すとセキレイ

に関してのイベントでは、俺達が必ず関わっていた。

そのため、皆人達は俺達と行動すれば大丈夫だという安心感の中で、無防備にも鵺鴿計画を進んでいってしまう。

そうなれば、彼ら自身の壁にぶつかった時に彼らの力で乗り越えることができなくなってしまう可能性が、非常に高いのでこちら辺でボダイブローを入れてもいいのではないかと思う。

そういうことから、脱出計画で中心的に働くのが皆人達で俺達はそのサポートに務める方針だ。

原作では、鉄橋を渡る最中に紅翼と戦った結の覚醒するきっかけとなった訳だが、この世界では彼女に渡した結女の鵺鴿基幹がないので今のままでは結が機能停止してしまう。

そうなれば皆人は慟哭するだろうし、その影響で彼の性格が歪む可能性もある。

そうなる前に、懲罰部隊の主力とぶつかることになっても結達の戦いに介入する必要がある。

元々、行動範囲が増えれば良いなと思って入ったから問題はないんだけどね。

翌日

「よし、作戦開始だ！」

「はいー！」

まず、脱走計画の第一段階は駅の検問を突破して線路を使って鉄橋に向かって走り出す。

それと同時に、鉄道に使われる変電所を攻撃して電車の動きを止めつつ、本社への連絡をさせないようにする。

そして、第二段階では荒霸川あらかがわという帝都の内側と外側を分けている川を、越えるために内外を繋いでいる鉄橋を渡りきる。

計画自体は、非常にシンプルで分かりやすいものではあるが懲罰部隊による妨害は必至だろう。

となれば、ある程度の戦闘力がありながら過剰戦力にならない程度

のセキレイである焰と風花、そして結女を従えてこの作戦に参加した。

彼女達ならば、相手の強さや鉄橋の耐久力を考えながら戦えるのだが鴉羽の場合、リミッターはあってないようなものなので懲罰部隊の主力を殲滅してしまう。

現在、鵺鴿計画はまだ中盤戦なのでここ倒れられても困るし、秋津に関して婚いだことがこの作戦で公になるのは避けたい。こう言うのは、可能な範囲で隠しておきたいし。

そんな訳で、第一段階では草野で検問をしていたM・B・Iの常設部隊の足止めをしたらうと、ホームに行つてそこにいた奴らの動きもガムテープで動きを止める。

それと同時に、お金に釣られた瀬尾に頼んで光達で変電所をストツプさせてから、レールが通っている場所に降りて走っていった。

#### 出雲荘

「あれ？君は行かなかつたんだ」

「……………ふん」

一方、出雲荘に残つた鴉羽は帰つてきくーちゃんと一緒に屋根に上るとそこには、作戦に参加しなかつた月海がいたのでそう言うとな彼女はそっぽを向いた。

そんな様子を、隣から見ていたくーちゃんがむくれながらこう言つた。

「月ちゃん、つまじやないも」

「な……っ!？」

その言葉に、月海は驚いたがくーちゃんは話を続ける。

「お兄ちゃんの一生懸命な願いをお手伝いできないのは妻じやないもん」

「……………」

「くーも最後までお手伝いしたかつたんだもん。でもくー、結ちゃんみたく、早く走れないんだもん。月ちゃんはくーよりも速く走れるの

に何にもしてないも」

「……………」

「だから月ちゃん、妻じゃないもんっ。そんなの妻じゃないもーっ」

「!？」

そう言われて、月海はかなりのショックを受けていたがこう反論した。

「し、しかしだな。草野？隣にいる鴉羽も一緒に行っていないのじゃが？」

「鴉すいちゃんはここを守っているも」

「何？」

「ここがないと皆が悲しむもん。だから鴉ちゃんは白衣のお兄ちゃん  
のお願いでいるんだも。じゃないと白衣のお兄ちゃんもくーのお兄  
ちゃんも悲しむんだもん。だからいいんだも」

「ははっ、そうか……………妻じゃない、か」

くーちゃんの鋭い指摘に、月海が呆然としながらも立ち上がって屋  
根から地面に向かって頭から落ちた。

普通だったら、それだけで大惨事になるのだが彼女達はセキレイで  
ある。

体の頑丈さで言うなら、成人女性なら出雲荘の屋根程度の高さであ  
れば問題ない。

そのため、セキレイや葦牙の考え方に囚われていた自分をぶん殴る  
代わりに一旦、地面に落ちてから立ち上がってこう言った。

「妾は皆人の正妻ぞ。契りも交わさずに未亡人にされては困る！吾は  
征くぞ、草野!!」

「あ、だったらそろそろ懲罰部隊と戦いになりそうだから早めに行っ  
た方がよいよ。さつきから、不安な気持ち伝わってくるから」

「あい分かった！」

月海がそう言うと、彼女の思い人を胸に馳せて勢いよく飛び出して  
いった様子を、見ていた松は鴉羽にこう言った。

「いいんですか？彼女に任せて」

「心配ないさ。道人は先天的に、物事を見極める才能があるから彼が決めた人選に文句を言うつもりはないよ」

「クフクフクフ、セキレイとして妻として信用しているんですね」

「紛いなりにも彼と最初に婚いだからね」

「最初ではないとは言え、松も同じなのですよ」

松と会話をした鴉羽は、くーちゃんと一緒に屋根から降りたものの待ち焦がれる恋人のように、道人がいる方角に顔を向けた。

道人 side

「はあ……はあ……」

「よし。このまま、順調に鉄橋を渡っていけば後数分で境界を通り抜けるぞ」

「結構、駅から離れましたよね？」

「ああ、ここまで来れば残る心配は……っ！」

俺が言い終える前に、帝都との境界付近に4つの人影が見えたので悪い予感が当たった気がした。

作戦を決行したのが夜の11時、日付が変わる1時間前に行動を開始したのでM・B・Iの部隊は戻っているだろうからこんな時間にこんな場所にいるとすれば懲罰部隊しかいない。

そのため、互いの顔が認識できる距離まで走ると紅翼が獲物を見つけたような顔で、俺にこう言ってきた。

「夏朗の言った通りだ。例え、どんなに役職で縛ってもお前だけは行動を縛れないって」

「褒め言葉としては嬉しいね。だからそこを通してくれないか？」

「それはお断りよ。懲罰部隊の理念を忘れたの？」

「ルール違反するセキレイを機能停止にしてもいいんだろ？全く、この場に限って言えばひでえルールだよ」

「そう言うこと。だから——死ね」

俺が文句を言いつつ、背中に背負っていた棒の1本を取り出すと紅

翼はそう言って、俺に向かって走り出した。

## 第10話 脱走計画 中編

ガン、という音と共に両腕にかなりの衝撃が加わったので直前の踏ん張りが、意味を成さなかったように俺の体は後ろに吹き飛ばされた。

そして、吹き飛んだ俺を受け止めてくれたのは結女だった。

「へえ、あんたらも逃がす方に票を入れたんだ」

「はい！この数日前に会ったのも何かの縁！だからそれを大事にします」

「だったら同業者であろうとも許しはしないよ！」

結女と紅翼が、そう言い合って互いにぶつかり合う傍らで皆人は自分のそばに立っている道人を見て、眉をひそめながらこう聞いてきた。

「僕達を騙していたんですか？」

「……分かつちまったらしいから隠さねえが、俺達も懲罰部隊のメンバーだ。とは言え、あくまで主力は彼女達であって俺達はそのサポートさ。今回は懲罰部隊としてではなく、フリーのセキレイとその葦牙として動いている」

「え？てことは、あんたらも懲罰部隊？」

「一応は、な」

俺がそう言うと、鷓と久能は俺達から距離を取る行動を取ったが焰や風花は特に関心がない、という感じの態度なので皆人はさらに聞いてきた。

「……僕達を罠にはめようとしたんですか？」

「それだったらもっという作戦を考えるさ。東陣営に行って彼らにフルボッコにしてみらうとかな」

「だったら何故！」

「単純に、ただの葦牙と懲罰部隊のメンバーの両方から鷓鴣計画を見てみたかった。この計画がどんな風に結末を迎えるのかをね」

「……………」

「鷓鴣計画に深く関わっている俺が葦牙として活動するとどうなる



か。それを見てみたかっただけさ。君らが信じるか、信じないかは別としてね」

俺がそう言っている間に、焰と風花も懲罰部隊のセキレイ達と戦い始めたので残る1羽が俺達の前に立った。

「No. 74の習志野や。よろしゅうな」

「No. 88の結です！懲罰部隊の人とは1回、戦いたかったんです！」

「む、結ちゃん」

結は、結女による特訓の成果で技術を習得しつつあるが習志野はよく分からないんだよなあ。

彼女はバリアを張れるんだが、それ以外の能力は天でダメだった記憶があるんだけど懲罰部隊に入って、どんな訓練を行ったのかが分からないので彼女の実力は未知数だ。

可能性としては、低い方だが紅翼が特訓をつけて格闘術を習得していれば、結にとってはかなりの強敵になり得る。

そのため、俺は結に対してこう言った。

「結？習志野はバリアを張れるからそこんところは注意なく」

「はい！ありがとうございます！」

「あららら、初っ端からネタばらしかいな。まあ、ええけど！」

習志野は、そう言いつつも結に急接近してパンチを繰り出したので俺は驚いたが、結は彼女の動きですぐに分かったようだ。

そのため、結は習志野と打ち合う形になったが互角に戦っている状態にまで持っていている。

その様子を見つつ、他のセキレイ達の戦いを見てみると俺のセキレイに対して、懲罰部隊は悪くない戦いをしている。

結女と紅翼は互いに拳でぶつかり合っているし、焰と来瀬は互いの射程が違うので両者ともに譲らない戦いをしている。

その一方で、灰翅は完全に風花に弄ばれているようで竜巻の中を人が飛んでいる状態だ。

その様子を見つつ、俺は皆人にこう言った。

「現状、俺がこの計画を立てていなかったら君らのセキレイは一瞬で

機能停止にさせた上で、君らを尋問するために他の場所に連れて行くだろう。そうなれば、月海や草野も機能停止にされている可能性が高かった」

「……だから君に感謝しろと？」

「別にそうじゃない。実は昨日の夕暮れにこの鉄橋を見に来た時には既に彼女達に発見されていたという訳だ」

「なっ……じゃあー！」

「そう、既に昨日の時点で彼女達にマークされていたんだ」

事前の作戦計画で葦牙が複数人、戦闘もせず集まること自体が稀なのでM・B・Iも自ずとその集まりに参加していたメンバーをマークして聞き耳を立てている。

そしてメールや電話、SNSなどの監視を行って決行日などが分かったら決行する場所に、懲罰部隊を配置して待ち伏せする。

少人数で、大人数を相手取ることも考えられるので個々の戦闘力は高く調整されているので、現にバリアしか張れていなかった相手に対して結はかなり苦戦している様子を見ながら、俺はこう括った。

「鶺鴒計画が始まった当初は、本当にバリアしか出せなかった少女があんなにまで戦えるのが懲罰部隊の強さだ。そして、もしも結の相手が習志野ではなくて紅翼だったら一撃で機能停止になっていたかな」

「それだけ、脱出は困難だと言う訳ですか」

「ああ、見つければ速攻で機能停止。見つからないようにするにしてもM・B・Iの監視下をくぐり抜けるのも困難」

「……………」

「それらを考えれば、君が簡単な気持ちでシギ君達を連れてきたのをM・B・Iに尽きだした時点で、葦牙は本社に連行されてセキレイ達は神座島に連れていかれるね」

「……なんとか、ならないんですか？」

「1番、手っ取り早いのは鶺鴒計画自体をとっと終わらせるだけだね。それ以外だとなれば俺は何もしないし、何もできない」

俺がそう言うと、皆人は悔しそうに手を握ったがそれ以上のことは

しないで、結達の戦いを見て叫んだ。

「結ちゃん！負けなで！」

「っ！はい！」

皆人の発言に、結は元気よく返事をして戦いに勢いが増して行く様子を見て、よくまあ平気な顔で戦えるものだと思う。

紅翼の攻撃を、なんとか防いだのだがその衝撃はかなり強くて、両手首がなんか痛い。

多分、骨にヒビが入ったと思うが今はそんな弱音は吐かないのは俺のセキレイもいる前では、かつこよくありたいからだ。

そんな訳で、痛みを隠しながら戦闘を見守っていると最初に動いたのは結のところだった。

「この勝負、私の勝ちです！」

「そう、みたいやね。あたしの負けや」

結が元気そうに言った反面、習志野は仰向けになって倒れていてそういう言い切った後に気を失ったため、どうやら機能停止になったようである。

そして、それを見ていた紅翼が結女との戦闘中にも関わらずに結に向かって走り出して、緊張の糸が解けた結に対して怒りの拳をぶつけた。

いきなりの攻撃だったので、結は回避することができずに紅翼の拳をもろに食らって数メートル後ろの鉄橋に吹き飛んだ後、その衝撃で混乱しているようだった。

そんな彼女に、紅翼は追い打ちをかけるためにさらに急接近して結のお腹に拳を入れる。

すると、結を中心にクレーターができたのだがそれで俺はようやく理解が追いついた。

恐らく、仕事とは言っても仲間をやられた以上はその仕返しをしないと、気が済まない性分なのだろう。

敵に回せばかなり、厄介な性格ではあるがそれよりも厄介なのはこのままでは結が機能停止すると言うことだ。

セキレイは、うなじの近くにある鵲鳩紋に指を当てながら祝詞を唱

えると自動的に、機能停止するのだがもう1つのやり方としては一定以上にダメージを与えることだ。

これは、今から鴉羽が夜見や蜜羽を攻撃して倒したのと同じようなことが、結の身にも起きると言うことだ。

そうならないように、努力はしてきたのだが何が起きるのかが分からないのが現実だ。

だとすれば、俺ができることとしては身を挺して彼女を守ることなのだが、紅翼がああ状態では逆に俺やられることになる。

そのため、俺は結女に目配らせをするのと同時に彼女が動き出して紅翼を止めようとした瞬間、女性の声が聞こえてきた。

「水祝ー」

## 第11話 脱走計画 後編

「水祝ー！」

その声と共に、紅翼にはそれなりの量の水がぶっかけられたので足を止めて声のした方に、顔を向けるとそこには作戦に参加しなかった月海がいた。

彼女は確か、自分になりたいセキレイとは相反すると言って参加しなかったのだが、鴉羽やくーちゃんになんか言われたんだな。かなり、やる気が入っているようだし。

やっと本命か、と俺が一安心していると紅翼は額に青筋を立ててこう言った。

「へー、ここにいる皆はそういう奴らなんだね……絶対に許さないんだから」

「…………アカン」

そんな彼女の様子を見て、やらかしたという顔で俺がそう呟いたのが彼女の癩に障ったのか、何も言わずに急接近してきた。

「ヤッベ……！」

「落ちろー！」

紅翼の速さに結女や遊んでいた風花が対応できず、俺そばまでやって来てから心臓を狙う形で構えたので棒で防ぐよりも本能的に腕で防御の構えを取ってしまった、そこに彼女の拳が勢いよく当たった。

そして、その強さによって上腕の骨からボキボキというイヤな音がするのと同時に、強烈な痛みが体中に走って俺は吹き飛ばされた。

「あつ、がああああああああー！」

「道人さん（クン）ー！」

「ああああああ……ふんー！」

その出来事に、俺のセキレイ達に余裕がなくなって俺を守るようにやって来た結女と、灰翅を川に投げ落とした風花がそれまでの遊ぶような表情から戦闘をする表情になった。

一方、殴られた俺は口の中に隠していた鎮痛剤の薬剤の粒をかみ砕いて痛みを和らげる。

と言っても、俺の右腕は変な方向に曲がっているので一時的な痛み止めでしかないとため、後でM・B・Iが管理している病院に行って治療しないとイケない。

他に怪我は、吹き飛ばされた衝撃で肋骨が何本かにひびが入った程度なのだが、傍目からするとかなりの重傷だ。

そのため、俺は鈍く痛む体を起こしてこう言った。

「ふうー、2人とも？ここで倒してもいいけど作戦第一でな？」

「……………わかりました」

「道人くんがそう言うんだったら仕方ないけど、今回だけだからね？」  
「その前に全滅させてやるよ！」

結女と風花がそう言ったが、紅翼は怒りのスイッチが入って完全に鬼神と化していた。

多分、仲間がやられた上に俺が気の抜けたことを言ったから激怒したのだろう。そうなれば交渉の余地はないだろうし、俺は怪我を負ったので遊んでもいられなくなった。

そのため、怒れる鬼神<sup>紅翼</sup>を風花が自分が操る風で吹き飛ばしてから川に落とすのと同時に、結女は焰と戦っている来瀬を突き飛ばしてから彼女の脚を掴んで川にぶん投げた。

それを見て、皆人達は啞然としていたが俺は知ってたと言うぐらいに見た光景だ。

言わば、懲罰部隊を経験した彼女達からすると今の懲罰部隊を構成しているメンバーが、どういうものなのかを見ておきたかったのだろう。

結をノックアウトさせるほど、強いセキレイを本気を出さないと戦うなんて手抜き作業もいい所だが結女達からするとその程度だと言うことだ。

そんな訳で、戦闘があつという間に終わって焰も何かを言いたそうだったがそんなことよりも、俺の右腕の方が重要らしい。

彼女達は、心配そうに俺に近づいて来た。

「道人さん、大丈夫……………ではなさそうですね」

「右腕が変な方向に向いているわ、早めに病院に行った方が良さそう

ね」

「すまない、彼女と戯れすぎた」

「気にすることはねえが後で鴉羽に怒られるなあ」

俺が笑いながらそう言うと、鷗と久能がやって来て心配そうに言ってきた。

「あんだ、大丈夫なのか？」

「大丈夫かと聞かれれば大丈夫じゃないねえ。現に右腕の感覚がないし、痛みも痛み止めで抑えているだけだしねえ」

「うう、ごめんなさい。私にもっと力があればよかったです……」

「だったら早めに鉄橋を渡りきってくれた方が良いな。常設部隊がいつ来てもおかしくないから」

俺がそう言うと、鷗達は本来の目的である帝都脱出のことを思い出して慌てたが、俺が重傷な上に結も紅翼の攻撃を食らって気を失ったままだ。

このまま、鉄橋まで護衛するにしても結には起きてもらいたいのだが一向に起きる気配がない。

とは言え、肝心の鵠紋は消えてないようなので大丈夫だとしてもこのまま、上手く脱出できるかが疑問だ。

そこで考えたのは、風花の操る風で対岸まで吹き飛ばしてもらうというもの。

こうすれば、彼らが無事に自由の空へと解き放つことができる上に俺達もすぐに戻れる。

そんな訳で、俺達と鷗達はここでお別れをすることになった。

「佐橋、ありがとな」

「うん、嶋君も久能ちゃんも頑張つて！」

「必ず会いましょう。次はもつと強くなります」

「結ちゃんは眠ってますけどまた、会った時は宴会をしましょう」

鷗達は、佐橋達とそう言い合うと俺を向いてこう言った。

「手伝ってくれてありがとうございます。じやなかつたら久能と脱出できませんでした」

「俺はただ単純に計画を立てて実行したまでさ。だからちゃんと幸せにしてやれよ〜?」

「ええ、絶対にそうします」

「オケオケ。風花、頼むよ」

「任せて〜、道人クン」

俺がそう言うと、風花はキスをしてきて祝詞を唱えた。

「——我が誓約の風、葦牙が暗雲 吹き払わん。花嵐」

風花がそう言うと、鶇と久能は宙に浮かんで対岸まで一気に飛んでいった。

その直後、対岸から「ビエエエ〜」と言う大きな声がしてきたので俺達が一頻り、笑ってからその場を後にした。

じゃないとM・B・Iが来だろうし、吹き飛ばした懲罰部隊が戻ってくるかもしれないからだ。

そのため、俺は結女に背負ってもらうことにして結は焰と皆人の護衛をしていた葛城が、彼女の両腕を自分の肩に回してから立たせる形にして皆人に合わせるように走っていった。

「全く…急に病院に来たと思ったら怪我を治せ、と言ってきたからどういう事かと思えばセキレイの攻撃をもろに受けただど!?セキレイが好きなのは分かるが怪我する必要はないだろ!」

「いや、ホントサーセン」

「私がいなかったらどうするつもりだったんだ!?!」

「俺の研究室にある薬品を片っ端から持ってきて一気飲み……」

「中には毒薬もあるだろ!冗談も大概にしろ!!」

俺達が病院に来た時には、既に日付は変わっていて起きている人はかなり少なくなっていた。

病院もそうで、主要な医師は既に帰宅していて対応できるのは、緊急搬送で運ばれてくる患者の応対だけだったため、偶然にも本社にいた鶴鶴計画主任の高美に来てもらって説教を食らっている。

彼女の元で、検査が開始して数分前に結果が出たのだが容体はかなりヤバかったようだ。



怪我は、右上腕の骨が粉碎骨折に手首の骨と肋骨の数本にひび、しかももう少し打ち所が悪かったら命に関わる怪我になっていたとのこと。

転生時に、頑丈な肉体を得ていたからこそその怪我であって元々の肉体では絶えきれなかった、と容易に予想できる。

そのため、しばらくは病院で安静にする必要があるがM・B・Iの新薬（未認可）で1週間もあれば、完治できるほどに骨がくっつくそうだ。

その開発に、俺も参加していたが実際に実験体になるのはやや緊張する。

しかし、新薬の性能に関してはネズミなどで実験済みなので後は病院のベッドで寝ているだけだ。

そう思いつつ、疲れがどっと出たのでそれに任せて寝ることにした。

## 第12話 鵺鴿計画の当初

「……………」

「……………」

「……………なあ」

「なんだい？道人」

「オーラが妙に怖いんですけど」

「気のせいじゃないかな。私は決して怒ってないしね」

絶対に嘘だ、とは言えないほどに鴉羽は怒っていた。

顔は笑っているのに、目が笑っていない上に彼女の背後からどす黒いオーラが、物凄い量で出ているからとても怖い。

完全にやらかしたなあ、と思っていると包帯とギブスで固定されている右腕が冷たくなってきたので、そっちに顔を向けると秋津が無表情で氷を生成していた。

「秋津さん、冷たいんだけど」

「……………」

「何も言わずに凍らせるのはやめてくれるかな？」

「……………大丈夫、マスターの右腕がなくなっても私が代わりに食べさせるから」

「やめてー！研究できなくなるからやめてー！！」

拗ねられて殴られるのはともかく、利き腕である右腕が凍って壊死すると研究がしにくくなるから本気でやめて欲しい。

それに、彼女は俺が怪我したのがセキレイとの直接の戦闘によってなのでそのことで怒っている。

そのため、本気で壊死させようとしている秋津に頼み込んでいると鴉羽がこう言ってきた。

「……………道人」

「な、なんだい？鴉羽」

「1回、イってみようか」

「あの世じゃないよね!?!そっだよね!!」

俺がそう言って、騒いでいると女性の看護師から注意されたので秋

津は水を消して静かにしていると、彼女達はこう言ってきた。

「全く、私達がどれだけ心配したのかを知っているのかね？」

「すっごく心配した。怖かった。マスターが消えるんじゃないかって」

「すまんなあ、2人とも」

秋津はしょんぼりとした表情になり、鴉羽は心配そうにそう言ってきたので彼女が人を心配するのは珍しいなあと思いつつ、面会が終了する時間まで世間話をした。

それによると、結も一旦はこの病院に搬送されて集中検査と治療をして怪我を治したらしい。

まあ、セキレイは人間よりも頑丈にできているようなので問題はないうのだがそれでも、彼女は紅翼の攻撃によって機能停止の一步手前まで言っていたらしい。

最後の攻撃を、俺が肩代わりできたのなら悪くはない代償だろう。そんなことを言ったら、鴉羽達から怒られるがね。

そんな訳でそれから1週間、病院生活をした後に出雲荘に戻ったら松と呼ばれた。

「全く、鴉羽達が言ったようにみったんは運がよかったです。月海たんが注意を引いて、結女たん達が一瞬で片してくれたからあの程度で済んだんです」

「スマンスマン、あれは完全に俺の慢心だったぜ」  
「全くですよ」

そんなことを言い合いつつ、松の部屋に行くとき先客として皆人と結、くーちゃんに月海、千穂と鉦女がいた。

そのため、松になんで彼らがいるんだと聞くと懲罰部隊との戦闘で殆ど、何もできなかつたことから鶴鴿計画に興味を持ったらしい。

特に、俺が紅翼の攻撃で負傷しても弱音を吐かずに淡々と指示を出していたことから、松が知っていることを全て知りたいとのことだった。

千穂達も、前々から気になっていたが俺達に直接聞くのを躊躇っていたらしいので、今回の件でちゃんと聞こうとしている。

折角なので、それらの疑問に答える形で松に説明してもらうことにした。彼女は、何だかんだで説明が上手だからな。

今から20年ほど前、日本海側に突如として地質学的にはあり得ない形で島が隆起して出現した。

そして、その島に上陸した男女2人の学生によって発見された船の遺跡に108つの生命体が、存在していたことによってこの鵜鴿計画が始まったとされる。

その内、男の方は後のM・B・I社長になる御中広人であり、生まれ持ったカリスマ性と遺跡にあったオーバーテクノロジーが組み合わせられたことであらゆる方面で業界トップに踊り出た。

一方、108体の生命体<sup>セキレイ</sup>は1体が成体としてとして完成していて8体は胎児の状態で眠りにつき、残る99体は受精卵の状態で見えなかった。

これらは、現代社会に適応できるように調整されたが受精卵の状態です。で干渉するのと、できあがっている状態で干渉するのでは大きく違う。

絵で例えるなら、白紙の状態です。1から書き上げるのと模様として線が書かれているのとで、仕上がりが大きく違うように能力を管理して安定させた10番台以降の方が、本来の力を発揮できるとのこと。

と言っても、あくまで調整者に拠るところも大きいのだが。

そんな訳で、順調に思えた鵜鴿計画——— 当時はS計画と呼ばれていた——— は権力者達の共闘によって、表向きには国籍不明の軍隊が神座島に侵攻によって翻弄されようとしていた。

御中が作った新興企業は、本来なら数十年の歳月をかけて拡大していくはずなのだがたった数年で業界トップになれば怪しむのは当然だし、当時は軍隊も持っていなかったたので権力者達は簡単にM・B・Iの技術を奪取できると考えていた。

しかし、その目論見は外れて国籍不明の軍隊を装った多国籍軍は、S計画守護のために設立された懲罰部隊によって全滅。

その損害は戦車28台、歩兵戦闘車15台、ヘリコプター12機、輸

送艦2隻に護衛艦1隻というもので、失った人命は数千人単位である。

特に、N.O. 01である美哉は刀から発生したソニックブームで軍艦を沈めるほどに強かった。

無論、他に調整が終了していたN.O. 02とN.O. 05までのセキレイも十分に強く、それぞれの力で多国籍軍を蹂躪を行っていた。

その結果、S計画は鵺鴿計画となって計画を大きく変えることになったのだが、その中で俺も計画に参加していたので皆人達から驚かされた。

「ええー!!第一次神座島侵攻からいたの!?!」

「みったんは当時から天才的な知識で調整してくれましたからねえ」

「ああ、途中で今回のような大怪我もしたからセキレイに怪我はつきものだと思っているよ」

「へえー、じゃあ今回の入院も想定内?」

「ああ、想定外だったのは入院日数ぐらいだったな」

「はうう、話が壮大すぎるよお」

そんなことを言い合っていると、なんで懲罰部隊に参加したのかという話になって松を始めとする俺のセキレイの話になった。

元々、松や風花、鴉羽は俺に鵺鴿基幹が反応したためだし、焰も似たような同じように反応して紆余局施設しながらも彼女と婚いだ。

秋津は、廃棄ナンバーだったが俺達と長くいるために羽化したのだが、結女だけは未だに羽化ができていない。

本当は、彼女とも婚いで一緒に行きたかったんだが彼女自身が特殊すぎて仕方なかった。

そして、そんな話の後は第三段階の話になった。

現状、特徴のあるセキレイはそれぞれの葦牙と婚いでいるので第二段階はほぼ、残ったセキレイはどこに婚がせるのかという消化試合みたいになっているので、今は英気を養うためにゆっくりと過ごすことになった。

何故なら、第三段階では葦牙とセキレイの絆が試されるチーム戦なので、第二段階のように複数のセキレイを同時に出すことはできな

い。

原作では、1人の葦牙にセキレイは3羽までと決まっていたがこの世界の第三段階は分からない。

少なくとも、人数制限はあるはずなので今の内に出るチーム決めておく必要がある。

さて、誰を出すかなあと思いながら皆人達の疑問は松によって消化されていき、夕食になる頃にお開きとなった。

## 第13話 第三段階

それは突然のことだった。

松の部屋から、アラームが鳴るのと同時にM・B・I本社の上空にはセクレイのマークが浮かび上がっていて、微かにだがサイレンも鳴っているように聞こえる。

脱出計画からしばらくして、俺の傷も癒えて結も特に異常がなかったようなので、月海と共に結女や美哉の特訓に勤しんでいた。

そんなある日、第三段階の開始を告げる合図がなったので松の部屋に行くと、社長の御中広人大きく映った画面になっているのでリアルタイムで配信されていることが分かる。

そして、そんな彼はこう言い始めた。

『諸君、第三段階の始まりだ。会場は帝都湾、M・B・I所有の廃プラント島』

その後は、軽い昔話をしてから1回戦目のルール説明をした。

それによると、会場である廃プラント島のどこかにある神器と呼ばれる八角錐状の水晶を、探し出すというものだった。

その会場に、連れて行けるセクレイは3羽までで参加者はクズの人である瀬尾に西の真田、南の御子上だった。

セクレイは瀬尾で2羽、真田で3羽、御子上で3羽だったので合計で8羽になるのだが、その中に陸奥の姿はなかった。

どうやら、御子上はシングルナンバーである陸奥は強すぎると判断したようで、他のセクレイを連れてきたようだった。

そして、メンバーが集まったので試合が開始すると瀬尾と真田で殴り合いを始めた。

どうやら、キャラが少し被っているのが気に入らなかったようだがそれで、殴り合う必要はあるのだろうかと疑問に思ってしまったのは仕方ないと思う。

それに、皆人と千穂は呆然としながら中継された画面を見ていて、松も驚いていたが実際に起きているのだから俺も想定外だった。

とは言え、葦牙もおかしかったらセクレイも似たような奴が集まる

ようで真田のセキレイは、真剣勝負でも遊びと勘違いしている節がある。

そのため、軽い三つ巴状態の中で恐らく真田のセキレイが神器を発見したようだが、戦いの衝撃で手を滑らせて神器を落としたけど、すぐ近くまで来ていた御子上によつてキャッチされた上にNo. 39のワイヤーで受け止められた。

その結果、第1回戦は御子上の勝者になったのだがその結果を受けて、殴り合っていた瀬尾と真田は互いにシンパシーを受けたらしいが、手を握り合おうとして光と響によつて雷に打たれていた。

『…とまあ、諸君。大団円のところで、申し訳ないが引き続き、第2回戦を始めさせてもらおうか』

そんな感じで、第1回戦が終了すると社長は笑みを浮かべながら次の試合に向けての会場と、ルール説明をした。

どうやら、第1回戦で殴り合いが発生するのは彼も想定外だったようなので、ルール変更は行わずに会場を東エリアにあるM・B・Iドームとした。

そして、それに参加する葦牙とセキレイは俺達の中にはいなかった。

参加資格を得たことを伝えるのは、携帯に電話するというもので彼らに掛かってきたので参加する必要があるらしいので、肩から力が抜けた感じがした。

そのため、のんびりとした夕食を摂れるので2回戦を観戦しながら夕食の準備に入った。

「さて、千穂や皆人はともかく、俺達が2回戦でも呼ばれなかった理由を松は知っているんだらう？」

「勿論ですとも。そのために、M・B・Iを敵に回す形で神器を盗んできたんですから」

「ったあく、うちのエロ眼鏡は……」

「まあ、そのおかげでシードが掛かっているんですからいいじゃないですか」



皆人が部屋を出た後、松はそう言いながら屋根裏に上って埃まみれになりながら神器を俺に投げ渡した。

神器というのは、8つあって全てを揃えると「全てのセキレイを強制停止させることができる」どころか「セキレイの血を引く不特定多数の人類大虐殺」が可能になる兵器みたいなものだ。

これは古代、日本列島に落ちてきた船が日本各地に着陸して荒御魂アラミダマという球を、1万分の1以上という確率で生まれた葦牙に渡したのが始まりだとされている。

それによつて、古代の人々はセキレイと共にその球を巡って戦うことになったが決着が付かないまま、葦牙と共に埋められたがM・B・Iによつて発掘された。

そして、それを「褒美」という形で葦牙に渡す考えは俺からすれば納得できない部分はあるが、色んな手段を使って入手したい葦牙からすると喉から手が出るほどに欲しいものだろう。

なぜなら、そいつの血縁の奴らを皆殺しにできるかもしれないのだから。

そんな訳で、鵜飼計画の始めの方から参加している俺に美哉や健人から説明を受けてから、夕食を取っていると第三段階の第2回戦は終了したようで勝者は知らない葦牙だった。

とは言え、2回戦までに俺や皆人が参加しなかったと言うことは3回戦目には、呼び出されることになるだろう。

理由は、鷗と久能に脱出を手助けしたことによつてM・B・Iにマークされているだろうし、俺も皆人と一緒に参加する羽目になるだろう。

紛いなりにも、M・B・Iが設けたかは知らないルールを違反しているんだし。

そんな訳で第2回戦は何事もなく、終了するかと思われたがその直後に事件が起きた。

どうやら、神器を持っていないことに焦った氷我が複数のセキレイに命令を出して、2回戦で勝った葦牙から神器を不正入手したのだ。

そのことは、皆人達が試合終了したのに浮かれている最中に起きた

ため、俺や鴉羽達の間で黙っていることにした。

変な正義感から、勝手に動かれても困るしと思いつながら夜は更けていくのだった。

2回戦が終了してから1週間が経ち、開始された当初の緊張感とは無縁な生活を送っていると本社からの帰り道に、ある葦牙とセキレイに遭遇した。

最初に知らせてきたのは松で、それを聞いた鴉羽が進行方向とは逆である後ろを振り向いて物陰から俺達を見ていた奴らに声を掛ける。

「か弱い女性をつけ回すとは良い度胸じゃないか！」

「か弱い？」

「うーん、鴉羽の場合は嬉々として殴りそうなんだが」

「2人がどう思っているのかは分かったよ」

出雲荘からの移動する際、護衛するセキレイが最低でも1羽つくことになったので、今日は鴉羽と秋津が一緒になった。

そのため、鴉羽がか弱い女性と言ったことに俺と秋津が頭を捻らせていると物陰から、2人組の男女が出てきたので葦牙とセキレイだと言うことが分かる装備をしている。

そんな2人組のうち、葦牙だと思われる男が俺達にこう言ってきた。

「なあ、あんた……鉄橋がある場所で鷓の脱出に参加した北の葦牙だよな？」

「北の葦牙かは分からんが、脱出計画に参加したのは確かだな」

「そんなあんただから言うんだが今、俺達を含めて複数の葦牙とセキレイとで帝都を脱出する計画がある。これに手伝ってくれないかな？なんならこの計画に乗っちゃってもいいからさ」

「……………」

脱出計画、しかも赤の他人が立てた計画に乗って良いものかと考えたがそもそも、神器の1つは俺達が持っているので脱出する意味がない。

脱出自体は、鴉羽達の力を使えば簡単にできるがする意味がない以

上はする必要はないなあ、と思って鴉羽達を見ると彼女達も首を横に振ったのでそいつの話を合わせる。

「鷗と言ったが、彼と知り合いなのかい？」

「俺達、こう見えても第二段階じゃ、雑魚のような連中をかなりやってたんだぜ？そう言う時にあいつらと会ったんだがあいつが連れてたセキレイがめっちゃ弱かったじゃん？」

「……………」

「もう笑っちゃってさ、やる気もなくなったんで見逃したんだけど上手いことやったよな。さっさと逃げちまうなんてよ」

「……………」

「こないだ、とうとう第三段階が始まったじゃん？したらあぶねー遊びも「鴉羽、やれ」「はいよ」……………え？」

男の演説は、聞くに堪えなかったので鴉羽にそう支持すると彼女は一瞬でそいつのセキレイを、機能停止に追い込むほどに切り刻んだ。

切り刻むと言っても、あくまで機能停止する程度なのでバラバラの死体ではないがそれなりの出血をしていたので、M・B・Iに連絡を入れて俺はそいつにこう言った。

「正直、てめーの話は聞くに堪えんから残りの話は本社で聞く。なに、殺しはしない。体に聞くまでだ」

「な、なんで……………」

「知らなかったのかい？俺達も懲罰部隊だよ」

「だったらなんで脱出計画に荷担したんだよ！」

「さあ？てめーの頭で考えろ」

俺がそう言うと、M・B・Iの車両が来て職員がセキレイの容体を確認してから、そいつとは別々の車両に乗せて行ったのでこれで少しは脱出計画の阻止に繋がったかな。

俺はそう思いつつ、鴉羽に話しかける。

「大丈夫かい？鴉羽」

「ああ、問題ない。寧ろ、いつになったら攻撃指示が出るのかでうずうずしていたよ」

「そか、なら帰るぞ。出雲荘に」

「はらよ」

「……うん」

彼女達がそう言ったのを確認してから、俺達は出雲荘に足を向けて歩き始めた。

## 第14話 肅正

「あつ、そっちも接触されたんだね」

「うん、さすがに鳴くん達を馬鹿にして笑う人とは手伝えないからね」  
「当然じゃ！No. 95は結果的に認めただけで戦いから逃げ出すよ  
うな輩は吾は好かん！」

「散々、好き勝手やっておいて？ヤバくなったら逃げ出すなんてお  
ねーさん、そーゆーの好きじゃないわあ」

「まあ、M・B・Iがすぐにやって来たぐらいですからただ漏れです  
よね」

「そうだね。道人をこれ以上、危険な目に遭わせたくないし」

「まあ、断つて正解ですよ。そんな大層な計画を無防備に話したりす  
るのはウカツとしか言えないです」

皆人の判断は正しかったし、月海や風花の意見ももつともで実際に  
M・B・Iの監視も強化されているので俺達が手出ししなかつたと  
しても、M・B・Iからの召集でいかないといけなかつただろう。

そうなれば、結局は機能停止になるんだから今の内に計画を知って  
おいた方が良い。

まあ、皆人は俺達が懲罰部隊として脱出を行おうとしたセキレイを  
機能停止させた行為を、複雑な顔にしていたがこれも仕事の1つとし  
て受け取ってもらうしかない。

世の中というものは、理想論だけでは回ってなくてコインの裏表の  
ように何事にも、血みどろな話というのがつきものだ。神座島侵攻の  
時もあり。

そんなことを話し合っていると、松のパソコンからアラームが鳴つ  
て俺と皆人の携帯が鳴り始めたため、携帯を見てみると御中広人から  
のコールだった。

それを確認した俺達は、携帯に出てみると彼は意味深な笑みを浮か  
べながらこう言った。

『———やあ葦牙の諸君、待たせたね。今から第三回戦を開始するよ。  
参加チームは4組で1人の葦牙に付き、セキレイは3羽まで。ルール

は現場に着いてからのお楽しみだ』

御中社長がそう言うのと、携帯の通話は切れたので少しして皆人は結達から、俺は鴉羽達から一緒に行くことを迫られたのでかなりドン引きすることになる。

「勿論、私を連れて行くよね?」

「違う。道人が連れて行くのは私。だから鴉羽は今回もお留守番」

「なっ!? ずるいぞ、秋津! 道人が連れて行くのは私だ!」

「お姉さんも一緒に行きたいな」

「道人さんなら私を選んでくれますよね?」

「待て待て、こう言うのはちゃんと場所が分かってからだな……」

「そう言いつつも既に決めている道人だった。クフクフクフ」

鴉羽がそう言いながら俺の胸ぐらを掴み、秋津が俺の右腕に絡みついたら焰が負けじと左腕を取り、風花が面白そうにそう言って結女が期待の眼差しで俺を見てきた。

そのため、俺がタイムをかけると松がそう言ってきたので軽く修羅場になったがその直後、携帯に会場の場所がメールで転送されてきたので確認すると意外な場所だと分かった。

『ようこそ! 葦牙諸君、第三回戦会場へ。葦牙はセキレイキミ達と共に戦って戦って戦わなければならない。舞台は此処、帝都中央ジャンクション!!』

スピーカー越しに、社長がそう言うのと同時に俺達も現場入りした。

ここは帝都の中でも、高速道路が密集している場所で上を見上げれば立体交差している高速道路が見えるが、俺達の周りには煙幕が張られていて視界は20〜30メートルぐらいとあまりよくない。

今回、この試合に連れてきたのは次の3人。

「じゃあ、頑張っていこう」

「ん、羽化してからの初めての実戦……頑張る」

「ああ、今度はちゃんと守るよ」

鴉羽に秋津、焰の3人でこの試合に臨むんだが社長からの連絡で脱

走しそうな葦牙が、そろそろ行動に移しそうだと言うことでその準備も兼ねて連れてきてくれと言っていた。

そのため、戦闘を行えない松は別としてもつながりを求める結女や気まぐれながらも、繊細な風花には出雲荘で待機してもらった。

じゃないと、これから起きることは堪えきれないだろうしな。

そして、俺達が会場の中心であろう位置で待機していると今回の試合の参加者が集まってきた。

まずは氷我。東陣営の筆頭であり、鶺鴒計画に疑問を持つ人物だ。いずれは、何かをやらかすと瀬尾は考えているようだが今は様子見と行こう。ここで、何かをしても意味はないしな。

次に壺ノ宮。M・B・Iの狗して、個性的なメンバーをまとめ上げているが1羽分の欠員は埋めれなかったようなので3羽のまままだ。

彼自身は、優男であるのだが何だかんだで最後まで生き残る雰囲気を感じる。セキレイの方がしっかりしているしね。

そして、俺と皆人。ここに至るまで、欠員らしい欠員も出さずによく来れたものだと感じるが懲罰部隊のメンバーからは憎まれている。仲間割れのような状態だが元々、どっちつかずの葦牙とそれに従うセキレイなのでそんな奴らを憎む方がお門違いな訳だ。

そのため、懲罰部隊のメンバーからの視線をスルーしながら東陣営からの勧誘を皆人が断る様子を見ると、ジャンクシオン全体から社長の声が聞こえてきた。

『フハハハハ！どうやら役者が揃ったようだ！』

とは言え、あまりの大音量だったので思わず耳を手で塞いでしまったが社長の演説は続く。

『ただいまより、第三回戦を開始する!!今回のルールもきわめてシンプルだ。参加者達は闘って闘って生き残ったチームが3つ目の神器を手にする事ができる!そう——』

これはあれだな、第三回戦と銘打った——

『——これはバトルロイヤルだ!!』

——肅正だな。

一方、その様子を見ながら松はパソコンを動かしながらしてやられた顔になった。

「…やらかしてくれるです社長。脱出を手伝ったみなたん——計画に対して不穏な動きの『東』——他の葦牙による脱走計画——そして懲罰部隊。これは第三回戦と銘打った肅正ですよ…!」

分かってしまった以上、どうにかしたいのは山々ではあるが現時点ではどうしようもないので道人達がなんとかするしかないが生憎、結女は出雲荘に残している。

道人頼りにするのは、セキレイとしてはおこがましいが手の撃ちようがない以上は見守るしかない。

そう思いつつ、画面越しに道人を見た。

「……さて、俺達のやることは1つだ」

「皆人達を生かしつつ、この戦いに生き残る」

「しかも、前回のような待っているだけの戦いはイヤ」

「となれば、私達がやるべきことはプランAと言うことだね」

俺達がそう言い合うと、社長が試合開始のゴングを鳴らす。

『さあ諸君、殺し合いを始めたまえ!!』



## 第15話 もう1つの粛正

「……秋津、大丈夫かい？」

「問題ない。前々から打ち合わせていたから」

「皆人も無事？」

「ええ、助かりました。まさか、ここまでやるなんて」

ここは、帝都の高速道路ジャンクションなのだが作戦冒頭で結が場を混乱させるために、祝詞を使って熊拳を使ったのでスモークとは別の煙で視界がさらに悪くなった。

とは言え、これで立体的に伸びていた高速道路が崩壊すると同時に安全な場所に逃げれたが、これをした理由は数の上で互角だが脱出計画の時のように今の結では紅翼の相手にはならない。

着実に、力をつけているとしても元々の素質が違うので実力の差がなかなか縮まらない。

原作での結は、主人公補正ならぬヒロイン補正によって互角に戦えるようになっただけで、それがなければ脱出時に機能停止になっていたはずだ。

そのため、今回は俺のセキレイ達が陽動として動いてもらって結達は、ヒット&アウエーで行動してもらっている。

こうすれば、不用意な戦闘によつて機能停止にされる危険性が減るというものだ。

そんな俺達は今、秋津に周囲の警戒を任せて俺と皆人で一緒にいることで、自由に動けるセキレイを5羽にして対応している。そうすることで、相手側は混乱するだろうしな。

「この程度か、つまらん」

私はそう言うと、刀に付いた血を振り払ってそれまで戦っていた相手に踵を返して歩き出した。

ジャンクションを崩壊させた後、私達はバラバラに行動しているが白煙の中で遭遇したのは懲罰部隊の……えーっと、なんだけ？ 確か、

来瀬という少女だったかな。

懲罰部隊に、所属していて壱ノ宮と婚いだセキレイからの評価が軒並み下がっていて赤点どころか、マイナスにまで振り切れているので有無を言わずに攻撃してきた。

壱ノ宮のセキレイとはなるべく、戦闘を避けるようにと言われていたので話し合いに持っただけでいいとしても聞く耳を持たなかったの、やむなく機能停止させることにした。

そうすると、道人はいい顔をしないんだがやられるよりかはマシだと思っただけで移動を再開した。

「我が誓約の炎 葦牙が業、燃やし付くさん!!」

私はそう言いつつ、迷子になっていたセキレイの鵲鴿紋に触れながら祝詞を唱えた。

彼女は、皆人のセキレイでもなければ懲罰部隊にいたメンバーでもないので恐らく、氷我のところのセキレイだろう。

本来であれば、戦いによつて倒すべきなのだろうけど道人が考えた作戦は短期決戦を目的に、組み立てているのでこうするしかない。

それだけ、懲罰部隊の実力が高いと示しているのだが皆は無事だろうか。

私がそう思っていると、月海がやって来てこう言った。

「焰！無事か？」

「こつちは問題ない。まずは1羽目だね」

「ああ」

「さすがに視界が悪くてよく見えませんねー」

「スモークを焚いているせいで視界不良。その上、瓦礫の山にした時の塵も混じっているから余計に見にくいから注意して」

「わかっていますよ、葛城さん」

私は、結さんと共に移動している最中だ。

第三回戦では、懲罰部隊も参加していると言うことで道人さんが即興でこの方法を、考えてくれましたが前回の久能さんが脱出する時には皆人さんを守ることで精一杯だった。

それだけ、懲罰部隊のセキレイは強くて結さんでも紅翼というセキレイには反撃できなかった。

奇襲という形で、攻撃されたにしても多少の反撃ができてもおかしくないのにそれができなかったとすれば、今の私にとってすればマトモに戦っても勝ち目はないだろう。

とすれば、可能な範囲で機能停止にならないで他の皆さんがいる場所まで連れて行くのが得策。

結さんにも、そう伝えたのですが彼女は樂觀視して軽快に動き回っているので、私は普段よりも意識しながら周囲を警戒していった。

一定の時間が過ぎると、それぞれの場所で戦闘が始まったよう周囲を軽快しながら移動すると懲罰部隊の壱ノ宮と接触した。

「あららら、見つかったちゃった」

「全く、災難だねえ。同業者なのに戦う羽目になるとか」

「仕方ないでしょう？脱出計画を立てたのはそちらなんだから」

「……言い返せねえや」

俺と壱ノ宮で、冗談を言い合っていると複数のセキレイが空から降ってきた。

ものの比喩ではなく、実際に降ってきたのだからかなり白熱した戦いになっていたのが推測できるが、その中に俺のセキレイ達もいた。

「2人とも、大丈夫かい？」

「問題ないよー」

「私もだ」

鴉羽達の状態を確認した後、着地に失敗した紅翼を追って皆人のセキレイもやって来たので氷我のセキレイを含めて、三つ巴の戦いになるうとした時に俺と壱ノ宮の携帯の電話が掛かってきた。

そのため、俺と壱ノ宮が携帯を取って電話に応じると社長からの命

令で第三回戦を、途中退場して脱走計画を立てようとした奴らの始末を頼まれた。

まあ、社長命令でもあるので皆人には悪いが後は彼らでなんとかしてもらおうしかない。

幸いにも、紅翼達も一緒に行くことになっているので問題はないだろう。

問題があるとすれば、鴉羽が懲罰部隊の1人を機能停止させてしまったことぐらいなので汚れ仕事なら仕方ないから引き受けよう。

そう思つて、迎えにきたM・B・Iのへりに移動することになった。

原作でも、懲罰部隊のメンバーは途中退場して皆人達が氷我の捨て駒的セキレイを、機能停止させたので問題ないだろう。あるとすれば、紅翼と灰翅が俺達を物凄く睨んでいたぐらいだ。

そんな訳で、へりで現場に向かってみると壮観だった。

何故なら、20羽近くのセキレイが葦牙を引き連れて脱走を企てようとしているのだから。

そのため、俺はへりに乗りながら鴉羽達に指示を出した。

「手段は問わないからセキレイは必ず機能停止にして！葦牙はM・B・Iに任せるから動けなくする程度でお願いね！」

「わかったよ」

「……了解」

「……………仕事だから仕方ないとは言え、つらいな」

鴉羽達は、それぞれの想いを乗せてへりから飛び降りた。

鴉羽は楽しそうに、秋津は残念そうに、焰は悲しそうにしながらも帝都のエリア外に出ようとした奴らの足止めに専念することになる。

それだけ、数が多いからつべこべ言っている暇がないのだが鴉羽からすれば、格好の的でしかないのですから数分間、鴉羽達による脱走組の虐殺じみた行為が繰り広げられた。

「結局、夜明けになっちまったな」

「大丈夫かい？道人」

「大丈夫な訳がないだろう？あれだけ、一方的すぎると悪夢になって出てきそうだ」

「それで鎮静剤を持ってきていたのね」

「汚れ仕事とは言え、今回は来るものがあつたね」

「道人、私にもくれないか？今日は眠れそうにない」

「オケオケ、後で渡すよ」

俺達はそう言いつつ、徒歩で移動していたが今回の大量脱走では合計で18羽のセキレイを、機能停止にさせたので鴉羽を除いて気分的に落ち込んでいた。

帰り道の途中、皆人が神器の1つを入手したメールが俺の元に届いたがそう簡単には浮かれる気分にはなれないぐらいに精神的に来るものがある。

そのため、帰った後は皆人に睨まれながらも俺達は鎮静剤を飲んでから、部屋に戻って眠ることにした。

## 第16話 第四回戦直前

「みつたん、大丈夫ですか？」

「……松か、大丈夫じゃないと言ったら慰めてくれるのかい？」

「そういう訳じゃないですよ。計画に嫌気が差したとかはないですか？」

「そのことか……」

出雲荘の廊下を歩いている途中で、松が心配そうに聞いてきたので俺は少し間を置いて手すりに腰掛けながらこう言った。

「……覚悟していたさ。ただ、それが少し足りていなかった。だから反省こそすれ、後悔はしていないよ。現時点ではね」

「……そうですか、ならいいんですよ。このまま、みつたんが鶺鴒計画の抜けてしまったら計画は成り立ちませんから」

「そうだな。だけど松、1つの頼まれごとをしてもらっていいか？」

「なんでですか？」

「手を握ってくれ。じゃないと正気を保てそうにない」

「はいはい」

俺がそう言うと、松はしょうがないという顔をして差し出した俺の手を満足するまで握ってくれた。

こんな時に、一緒にいてくれる存在がいると随分と救われることもある。

そんな感じで、肅清を行ったことでへこんでいた俺の感情は松とのつながりで元に戻る頃に、俺の携帯に電話が掛かってきた。

電話の相手は、珍しく皆人の妹であるユカリなのでなんの用事だろうと思っ出てみた。

「おうおう、珍しい客が電話してきたな」

『おーっす、お兄い。元気にしてた？』

「こっちは皆、元気だがどうしたん？病気になったとかか？」

『あははー、その時はお世話になるんだけどさ。お兄ちゃん、どうしてるっ。』

「相変わらず、呑気にしているが本気でどうした？誰かのもめ事に巻

き込まれたかい？」

『お兄ちゃんが近くにいなければはなしてあげる』

「彼はバイトで出掛けているよ。後、30分ぐらいで帰ってくるかな」  
俺がそう言うと、ユカリは事情を説明してくれた。

どうやら、第二段階が始まってしばらくした時に氷我に強襲されて無理矢理、婚姻させられそうになったらしい。

そのため、しばらくの間は建物に囚われていたがぼやを発生させて火災報知器を鳴らすのと同時に、ガラスに椅子を投げつけて割ってそこから脱出したらしい。

彼女曰く、50階から飛び降りたそうなので本来なら電話してくることはできないのだが、椎葉に助けられてなんとか電話をかけてきたらしい。

全く、皆人は何してんだかと思っているとゆかりからの依頼を受けたのだがその内容は、氷我達にひと泡吹かせてくれないかと言うものなのだ。

しかし、今の俺達にそれをしてどうなるのかというものを伝えると彼女は、『お兄いの利益になるようなことを伝えればいいんだね?』と言われて電話が切れた。

どうやら、本気で程度は問わずに復讐して欲しいらしいのだが現状ではどうしようもないので、無理に動く必要はないとの判断を松と打ち合わせした。

「……………本当だったんだ」

「全く、社長が考えた計画だけあって笑い話になりやしねえよ」

しばらくして、皆人が帰ってきたのでユカリが誘拐されたことを伝えると彼の方にも、彼女からの電話が来たようなので少し落ち込んでいた。

今回の鵓鴿計画は、人間の欲望をむき出しにする計画でもあってある意味では混沌としていた。

ある者は愛するセキレイと共に脱出を試みて、ある者は現状の不満を爆発させるために、ある者は自分の目的のために。

セキレイの戦いに、人間の理念を乗せているので醜いように見えるがそれもまた、世の中の理なのだろうと思う。

例え、この世界でチートナ能力を得たとしても世界のルールやらなんやらに勝てるほど、俺は強かでも何でもないからそれらを変えるつもりはない。

まあ、ルールを無視して色々やっている社長や原題技術を凌駕している存在もいるし、俺も知識をかなり持っているから変えているが根本的なものまでは変えられない。

今回の件も、氷我が社長に対して鵓鴿計画の内容を色々聞き出したいが故に、ユカリを攫ったようなものだからな。

自分の目的のためなら、手段を問わないのは社長も氷我も同じということか。

そう思いつつ、皆人と話し合いながらいつかは氷我に一泡吹かせたいと一緒に考え始めた。

何故なら、彼はセキレイの戦いに人間の欲望や都合を乗せたからであつてその分、社長はセキレイを飛び立たせた後は無干渉を貫いているからこつちの方がまだ良い。

そのため、俺はどうやったら鵓鴿計画を早く終わらせるかを考えながら日々を過ごしていると、休日のある日になって爆音を響かせたバイクがやってきた。

この日は、出雲荘に住んでいる住人全員で掃除をしているので玄関の前に来たら、月海がバイクに乗っている人に対して大量の水をぶっかけたのだ。

流星は、歩く蛇口なだけあつてそいつは全身がびしょ濡れになつたのでこう叫んだ。

「そうかよ…これが『北』のゴアイサツかよ…。この真田西、売られた喧嘩を買い逃したことはねえ！タイマンだ!!」

「ヒツ、ヒイイイ〜〜!!?」

「おお、タイマンって言葉を使う人を初めて見た」

その叫びに、皆人は中継された映像を思い出して恐怖を感じたのに対して俺は、何事かと思つて出てきて感心したようにそう言った。



その後、美哉が出てきたので喧嘩は取りやめてお詫びにタオルを渡して上がってもらった。

そして、居間に来てもらうとお茶とを差し出してから寛いでもらったが、西の真田といわれている存在が護衛のセキレイを連れずにここに来るとは珍しい。

寧ろ、何かしらの裏があるんじゃないかと思つて松達は様子を見ていたが、事情を聞くために皆人が彼に尋ねると彼は不思議そうに返した。

「ああ？なんだよ、アイツから聞いてねーのかよ」

「アイツ…？」

「あのヤロー、約束の時間は守らねーわ、北の『大家』は1000歳の年増の般若で最恐だのぶっこきやがって、こんなキレーな奥さんがンなおつかねーもんのワケねーじゃんかよ」

「さあどうぞ」

「いやア、すんません♡♡」

美哉を、そこまで知っている奴は御中社長や健人、俺なのだがもう1人いるんだ。

皆人も、そいつに心当たりがあるようで何かを言いかけた瞬間に玄関から声がした。

「いよーっす。美哉ちゃん、メシ食わせてっ（ゴツ）」

その声がした瞬間、美哉は台所から漬け物石を持ってきてそいつにぶん投げた。

そして、美哉は少し怒りながらこう言った。

「香さくん、誰が年増の般若なのかしら〜？」

「年増!?言つてねえ、それは流石に言つてねえ!1000年以上生きているババアかもつて口を滑らせただけで…」

「尚悪いです!（ゴツ）」

「ギャー!」

瀬尾が醜い言い訳をすると、漬け物石がまた飛んで彼の悲鳴が周りに響く中、結は明後日の感想を述べるのと同時に真田はこう言った。

「強ええー!惚れたぜ…!」

「へえ？」

「どうやら、彼は強い女性に憧れるようだが美哉の場合は健人<sup>ダンナ</sup>一筋なので叶わぬ恋になるな。」

しかし、出雲荘に住んでいる俺や千穂達は別にしても5人の葦牙がこの時期に集まると言えば、御中社長の遊び心で送られたメールについてでその内容は以下の通りだ。

『葦牙諸君！第四回戦をやっちゃうよ！今回はなんと自由参加だ。しかし、葦牙諸君全員の参加を求めるものでもある。何故ならば神器はあと4つ、それは諸君がセキレイと久しく在る可能性の残りの数に等しい』

『繰り返すが、今回の参加はあくまで自由だ。強制はしない。我こそはと思う者だけ、このメールの受信より10日後、帝都湾M・B・Iターミナルへ小鳥と共に集いたまえ』

『私は其処で待っている。御中広人』

## 第17話 それぞれの思い

「場所と時間以外、具体的な事は何も書かれてねえ。謎かけのようなメール…オイ、道人」

「なんだい？クズの人」

「……てめー、後で覚えとけよ？　ンで、御中からメールか何か送られてこなかったか？」

「仮にも懲罰部隊だからねえ、このメールとは別のメールが来ている」  
第三段階、四回戦目の会場は船が止まる港であるのと同時に詳しい状況が分からない以上、何も手を打てないが俺は今回の会場を知っている。

この世界に来て早二十数年、元の世界で知ったセキレイの内容は細かい部分は忘れてしまったがそれでも大まかな内容は覚えているのだ。

第四回戦の会場は、船に乗っての最終戦だから乗船しなかったら懲罰部隊に粛正される。

全く、ケツに火をつけてぶっ叩くのが好きな人だとは思うがこうでもしないとノリの悪い人は乗らないだろうし、乗ったとしても神器が確保できるかは分からない。

結局、どんな手段を講じても最終的に神器を持っていたら試験の合格だと言うんだから、普通の葦牙にはつらいものがある。

そのため、俺は個人的に送られてきたメールを皆人や瀬尾達に見せた。

『道人くん、今回の試合でつれない葦牙の始末を頼む。何、全員をこっちに回せとは言わない。最低でも1羽は参加させてくれ』

第四回戦のメールとは裏腹に、俺に言い渡されたのはまたしても粛正についてだったので皆人達は、共闘を組んで俺も参加しようとした時に千穂とウズメがやって来た。

そのため、千穂達は瀬尾達に挨拶してから第四回戦の強制参加に對抗する意味で、共闘する俺達のチームに加わる事になった。

こうすれば、少なくとも敵は減るので神器を入手の有無に関わら

ず、第四回戦終了まではなんとかなるだろう。

しかし、問題はその後だ。

神器を持っていない葦牙がいたら、セキレイの方は強制的に機能停止させるとの社長からの勅命が、電話を使ってやって来たので俺は速攻で断ったよ。

これは随分と先になるが、生き残った8組の葦牙達が集う時に神座島で戦う事になる時に想定外の事が起きて外部と連絡が取れなくなった際に、何が起きるかを考えてみたんだ。

生き残ったセキレイと葦牙、そして社長が孤島にいて何らかの理由で外部との連絡が不可能。

最終段階までに、生き残ったセキレイはそれほど多くない。

そうなれば、海外勢力の奴らは本社をめぐって強襲を仕掛けるだろう。その上、神座島にも強襲してくるかもしれないから可能な範囲で生き残らせる必要がある。

そのため、鴉羽には四回戦の試合中は出雲荘で待機してもらって神器を、奪いに来た奴らの足止めをお願いした。

だって、東陣営が怪しい動きをしまくっているからどうしても気になったから、第四回戦が始まる前に俺が動ける範囲で対策を講じていった。

#### 第四回戦 洋上の船の上

「んで、ハッキングを受けたんだな？」

『ごめんなさいです、みったんにも手伝ってもらったのに』

「やられたもんは仕方ねえ、復旧にどのぐらい掛かる？」

『後数分はかかります』

「了解した、こちらも適度に戦いながら移動する」

俺はそう言うと、松との通信を切って皆人達に事情を話す。

「ええ〜！じゃあ、ここから支援なしで行動するんですか!？」

「大方、東だとは思いますが現状ではここを突破しないといけないんだ」

俺達が、そう言い合っている間も神器狙いで声を掛けられた葦牙達

の包囲網が狭まっている。

本来であれば、『No. 108が機能停止した』という偽情報を流すはずだったのだが、肝心の松のパソコンはハッキングによってシステムエラーに持っていかれたため、結女に指示を出して俺も背中を手に持って戦闘態勢に入る。

元々、俺のセキレイは単独でも戦闘力がかなり高い個体がメインになっているので、一対多の戦闘でも苦労しない。

しかも俺自身、セキレイ対策である程度の棒術を習っていたので数人の人間相手ならそれなりに戦える方だ。

ましてや、相手はごく普通の一般人であるので飛び道具がなければ大丈夫だ。

そのため、結女が戦い始めると俺も葦牙相手に戦おうとして1人の女性が出てきた。

「下がってくださいい！」

「っ！君はー！」

「え…っ！」

「戦ノ舞・咲姫サクヒメ」

その女性がそう言うと、持っていた薙刀から斬撃が飛んで皆人達に集まっていた葦牙やセキレイが吹き飛んだ。

そんな彼女は、俺にとっても忘れられない思い出として懐かしそうに話しかけた。

「No. 87の鹿火だな？懐かしい上に凜々しくなったな」

「お久し振りです、道人さん。積もる話は多々ありますが今は戦いに専念させてください」

「はいよ、存分に戦ってきな」

俺がそう言うと、鹿火と呼ばれた巫女服姿の女性が薙刀を振るって結女と共闘を始めた。

一方、事情を知らない皆人は震えながらも状況について行けてなかったが、鹿火の葦牙である青年が近づいてきて俺達に話しかけてきた。

「あなたが北の葦牙兼懲罰部隊の武田サン、ですよね？」

「あんたが鹿火と婚いだ葦牙だな？」

「ええ、始めまして。鹿火の葦牙をやってる大角です」おおすみ

大角と名乗った彼曰く、鹿火、第二次神座島侵攻の時に拉致されようとして俺や鴉羽達に守られたセキレイなので、その恩返しをしたくて今まで技術を高めていたらしい。

そして、彼と出会う前にN.O. 06であるのと同時にガーディアンとしての仕事をしていた焰にも、救われたらしいのでそのお礼を言う前に俺に何か起きたら困る、という事で救ってくれたようだ。

そんな事を言ってくれている間に、結女と鹿火はその場を制圧したようなので鹿火は結女に対してお辞儀をしながらあの時のお礼を言っている。

その様子を見て、大角は鹿火が強くなった理由を伝えてくれた。

「第二次神座島で救われたあの日、結と共に結女さんに誓ったそうです。大好きな人を見つけて羽化したら、私達は誰よりも強くなると。そして、どちらかが『最後の1羽』になったら——」

『翼の折れたセキレイ達を再び、自由の空へ解放放つ、と』

その理由を言う時に、鹿火も一緒に行つたのだがその姿はまるで結や結女と瓜二つだった。

『やくらくれくたくすく!!』

一方、出雲荘ではシステムダウンしたことによって松は大慌てで復旧に当たっていた。

それによつて、M・B・Iの監視衛星やS B Lの支援ができない上に、周囲に設置した監視カメラも使えなくなっている。

そのため、道人や皆人に付いていかなかったセキレイ以外が出雲荘の防衛に当たることになる。

そのメンバーは、道人のセキレイで鴉羽を始めとして風花、焰、秋津で皆人のセキレイは結に月海、葛城で結女とくーちゃんそれぞれ葦牙に付いていき、松はシステムの復旧のために手が出せない。

縁側には、美哉の他に健人が座つて寛いでいるのだがその間には無

造作に神器が2つ、置いてあるので無造作すぎるかもしてない。

しかし、それほどに信用していることも窺い知れるので彼女達は気合い充分だ。

そんな中、結から1つの提案があった。

「鵺鴿表明をしませんか？」

鵺鴿表明とは、鵺鴿計画の中で最後の1羽になった時に何をしたいかを皆の前で言うものだ。

自分がやりたいことを伝えるだけならともかく、最後の1羽になると言うことはそれ以外のセキレイである仲間さえも超えて葦牙と一緒にになることである。

そのため、皆が戸惑って結に事実を告げると結もそのことに気が付いて少し緊張したが、それでも自分のやりたいことを皆の前で発表した。

それに釣られて、その他のセキレイも自分の鵺鴿表明をはっきりと言った。

鴉羽や風花、焰は道人とずっと一緒にいる生活を望み、松はあらゆる実験を道人にしたいと伝え、月海や葛城は皆人と一緒に、そして結は皆と一緒にいることだ。

そんなことを言い合っていると、ついに東陣営のセキレイ達の姿が見えたので結達も戦闘態勢に入っていた。

## 第18話 第四回戦の裏で

「ふんー！」

「ぐっ！」

皆人が第四回戦で2つ目の神器を手にしていく頃、出雲荘では神器を巡って「北」と「東」が対立して戦っていた。

攻める方は東陣営のセキレイ達で、守る方は北陣営と懲罰部隊のセキレイ達だ。

現状では北陣営だけではなく、懲罰部隊や比礼ヒレのセキレイまでいるので攻撃を仕掛けたのはいいとしても圧倒的に不利な状況だった。

ナンバーが、10番台以降のセキレイを複数いるとしても懲罰部隊に席を置いて、神座島侵攻を経験したセキレイのほぼ全員がいる以上は奪取することはほぼ不可能と言える。

ましてや、そのセキレイ達を機能停止にすることは不可能で、逆に東陣営のセキレイが殲滅されそうになっていた。

そんな中、氷我達が乗っている車に衝突した車があった。

出雲荘が都心から離れていると言っても、乗用車がすれ違って走れるぐらいの道幅はあるはずなのに、氷我達の車にぶつかったとなれば故意にぶつけたことになる。

そのため、柿崎という眼鏡をした氷我の秘書兼友人が車から降りて車の後ろを見ると、もう一台の黒塗りである車が自分達の車に軽く衝突していた。

柿崎達が啞然とする中で、その車から降りてきた人物にさらに驚くことになる。

「あれえー？こんな所に車が止まっていたんだー。気付かなかつたよねー、長谷川ー」

「はい、坊ちやま」

「そーだよねー、こんなところに葦牙の車が止まってるわけないよねー」

長谷川というのは、御子上のじいやをしている人物で御子上隼人はこう言いながら車から降りた。



「あんだ達、大人は自分の狭い視野でゲームをひつかき回すから嫌いなんだ」

そう言うと、氷我も苛立ちそうな表情をしながら出てきたので御子上は畳み掛けるように言葉を続ける。

「セキレイも葦牙も規格外だというのに、自分達の決めた狭い世界のルールにムリヤリあてはめようとするんだよね！」

「……何を言っている？」

「『東の氷我』サン、あんだの考えてることぐらいお見通しだつてコト！」

北と東によるセキレイの戦いの中、東の葦牙に南の葦牙が文句を言いに来た形ではあるがそれと同時に御子上は氷我の境遇も理解している。

氷我がトップのグループ企業は、古い体質の特徴である血縁者達ジジイ共の古くさい考えでガチガチの傾いた会社を建て直せないでいた。

しかも、鶺鴒計画自体もそいつらに強制的に参加させられているのでセキレイは、ライバル会社を知る道具程度にしか見ていないのと。

そのことから、他者を利用する程度にしか見えていないがそれはあくまでも、狭い世界で生かされてそれが全部だと思いついてるからだ。

御子上にとって、セキレイというのはそう言った世界観から解き放ってくれた存在であり、自由な世界を飛び回る仲間として見ている。その反面、ややモノ扱いしている部分もあるのだが。

それはともかく

大胆な氷我達の行動に対して、止めに入った御子上の理由はそれだけではなくて最大の理由は陸奥からの助言だった。

それは、北の般若であるN.O. 01美哉の存在で隠居した彼女が動けばすぐそばにいて、戦闘狂であるN.O. 04の鴉羽がそれに釣られて大暴れする。

そうなつたら、帝都の多くは更地と化すので流石にM. B. Iも動かざるを得ないので、鶺鴒計画自体が崩壊すると御子上は予測したた

め、彼としては不本意な終わり方はしたくないのが本音である。

そして、その上で氷我に尋ねた。

「———でさあ。1つ疑問なんだけど、どうして北なの?」  
「……………」

「神器だけが目的なんだつたら僕んどこ来てもいい筈じゃん。第四回戦に参加したって手に入ったかもしれない訳だし、もしかして第三回戦の事とか根に持つてる?」

「……………」

「それとも、〃懲罰部隊補佐〃兼〃北の葦牙〃に守ってもらっている葦牙を妬んでのコトかなあ?」

「なんだと?」

〃懲罰部隊補佐〃兼〃北の葦牙〃とは、北エリアにおいて圧倒的な力を持つ複数のセキレイと婚いで共に生活しながら、M・B・Iの狗として主力をサポートする形で活動している道人を指す。

しかも、主力の懲罰部隊ほどに過激ではないので第二段階まで道人達がどう動くのかを、注視していた葦牙はかなり存在していた。

そして、その下で何ら不自由を感じずに生活できた御中社長の実子である皆人を、氷我は妬んでいるのではないかと感じていた。

似たような生い立ちを持っているはずが、皆人の方はのほほんとして浪しているのに対して氷我の方は身内に足を引っ張られまくっているからだ。

そのため、御子上は氷我の行動に一定の理解を示しつつもこう言い放つ。

「もう1つ上からものを見てみなよ、御中社長のように。僕らは葦牙なんだからさ!」

その瞬間、氷我と婚いだセキレイのうちの1羽が結の「熊の手」と言う技によつて、撃破されたのを合図に氷我は状況を確認するとさっきの攻撃でやられたのを含めて合計で5羽をやられていた。

氷我は、婚いで今までに生き残った全てのセキレイを投入したにも関わらず、完全に弄ばれていたことに気が付いた。

もしも、この場に道人がいて彼のセキレイに号令を出したら氷我に

とって、最悪のパターンになる事は一目瞭然だった。

そのため、彼はつまらない“人間”としてここでリタイアするか、“葦牙”としてさらに遊び尽くすかの二択を迫られている事になった。

一方、道人達も状況が変化して3つ目の神器を瀬尾達が見つけた。しかも、結女達が戦闘を行っている最中にくーちゃんが落とした2つ目の神器を鹿火が拾い、残る1つは真田が見つけている。

それによつて、第四回戦は終了したのだがそれと同時に始まったカウントダウンによつて、葦牙に配られていたカードから強力な何かが発生した。

それによつて、神器を第四回戦やそれ以前に入手した葦牙以外の奴らが急に倒れ始めた。

恐らく、神器に関する事なんだろうけど説明がない以上はなんとも言えない。

そうこうしている内に、エネルギーの影響を受けなかった葦牙とセキレイである千穂達とユカリ達も来たので体調を聞いてみると特に問題ないらしい。

と言うより、ユカリ達は他のセキレイ達との戦いでカードを壊したようなので難を逃れたようだ。

そして、この状況から俺はある仮説を集まった面々に伝えた。

「このままだとまずいな。神器は全て、それぞれの葦牙の元に渡った以上はM・B・Iも黙っちゃいないだろうから懲罰部隊を差し向けてくるだろう」

「だな、そうなれば余ったセキレイは機能停止になるだろーから佐橋の妹と千穂ちゃんには、どうにかしてもらわねーと……………」

俺の仮説に、同調するように瀬尾が言ったので船を歩き回っていた彼に聞いてみた。

「…………なあ、瀬尾」

「あん？」

「救命ボートはあったか？」

「無論だ。船が沈んで葦牙が全滅したら話になんねーからな」

その質問に、平然と言いのけたので俺は頷きながらこう言った。

「じゃあ、問題ないね」

「そりゃあ、どういう——」

「おおっと、それを言わせるかい？ ルールに従わねえ瀬尾さんよ」

「チツ………という訳だ。オメーらはとつと行っちゃいな」

俺がそう言うと、瀬尾が舌打ちをしてからユカリや千穂にそう言ったので、頭をかしげる千穂を連れてユカリ達は行ってしまった。

元々、ユカリと椎菜はくーちゃんの安否を確かめに第四回戦に参加しただけだし、千穂達もあわよくば神器を入手できると思っただけで参加しただけだ。

そして、残っていた神器はユカリや千穂に行かなかった以上は、鶴鴿計画に参加する理由はなくなつたので計画から抜けることになる意思を俺達に伝えた。

そのため、船が着岸する前にユカリ達は救命ボートで船から脱出して行ったのを確認してから、俺達も船を下りる準備をして着岸するのを待った。

因みに、第四回戦が始まる直前にユカリから東陣営が葦牙を集めていた、という情報を受け取っていたので対応がしやすかった。

これが以前、ユカリが言っていた『お兄いの利益になるようなことを伝えればいいんだね?』ということの真相だった。

## 第19話 鵲鳩表明 前編

第四回戦の決着が付いてから数日後、第三段階も終了して一先ずは平穏が戻って東陣営との戦闘で損傷した箇所を修復しているのだが、今の状況は明らかに日常からかけ離れた非日常だった。

理由は、帝都にあるM・B・I本社の上空に嵩天そのものが現れたせいだ。

嵩天というのは、セキレイ達の出身地であるのと同時に葦牙とセキレイ達の魂の裁定をする者でもあるN.O. 00が生まれた場所でもある。

N.O. 00は現在、N.O. 01である美哉が担っているために御中社長達が発見した当時から、成人として彼らの前に姿を現していた。

そして今、それまで隠していた嵩天が人前に姿を現した事によつて美哉はN.O. 00として、行動に移さないといけなくなった。

そのため、最終局面に抜けて結女達が何かをやるうとしていた。

「じゃんけんぽん！あいこでしょ！あいこでしょ！」

「…ん、勝っちゃった」

「ふむ、この順番って…」

「奇遇ですね、羽化した順の逆です」

「……？何してんだい？」

俺がそう言っていると、彼女達は顔を赤らめて色々と言っていたが秋津が近づいて来てこう言ってきた。

「マスター、ちよつといい？」

「よくわからんが、大丈夫だな」

俺がそう言っていると、秋津と一緒に縁側に座って彼女の話聞く。

「マスター、最初に会ったときのことを覚えてる？」

「それって神座島の時？それとも公園でばったり会った時？」

「……公園で」

「ああ、よく覚えてるよ」

「あの時、私はあなたの事をよく知るまでに自分はダメなセキレイだから調整を失敗したんだと思ひ込んでいた」

「……………」

「けど違った。失敗したのは偶然で私の責任じゃなかった。だから私は決めた」

「……………」

「私を縛っていた氷を溶かしてくれたあなたを、私の氷で守りたい」

「……………そうか。ありがとうな、秋津」

「……………」

俺がそう言うと、彼女は顔を赤らめてその場から立ち去った。

彼女が言いたいのは、今まで縛っていたわだかまりを解いてくれた俺のために、自分の持てる能力を出し切って嵩天まで導きたいという事だろう。

そんな彼女が、一番大きく変化したのは表情が豊かになった事だ。

今までは、感情を表に出さないように無表情でいる濃つが多かったが、最近ではぎこちなくではあるが笑うようになったり、顔を赤らめるようになった。

そんな彼女の後ろ姿を見ると、今度は焔が話しかけてきた。

「おお、なんだ？秋津と言い、今日は何かのイベントでもあるんかい？」

「そう言うわけじゃないよ。ただ、君と話したいことがあったから」

「話したいこと？」

「うん」

俺がそう聞くと、焔は少しずつ話してくれた。

「道人、私のことをどう思ってる？」

「どうって…好きだよ？」

「!？」

「女性としても好きだが、頼りがいのある格好いい女性といった感じでもあるかね」

「あ、ああ……………そう言うね」

俺がそう言うと、焔の動きがぎこちなくなっただので俺から話を振る。

「そう言えば、第四回戦の時に焔に礼が言いたいって言う人と出会っ

てな」

「え……私に？」

「No. 87の鹿火、薙刀を持った女性なんだが第一段階の時に助けてもらったのにすごく感謝していた」

「……」

「そいつらは第四回戦が終わるときさっさと撤収したらしいから引き合わせられなかったが、No. 06の葦牙だからと助けてくれたよ。だから、君のやって来たことは無駄じゃなかったんだ」

「……そっか、そう言うのってなんか、嬉しいね」

「ああ……」

「ところで道人」

「んん？」

「そう言い合って、俺が空を見上げると焔が自分の心情を語ってくれた。

「君は私と婚いでくれた後も、ガーディアンとしての仕事を認めてくれて続けた結果、色んな人を見てきたから分かったんだけどさ」

「うん」

「人って本質的に他人の痛み鈍感なんだよね。肉体の痛み、心の痛み。自分が傷つけば大騒ぎするクセに、他人のことになると解つているようで解つていない」

「……」

「本当は解ろうともしていない……そういうものだと思っている」

「……」

「だけど君は違った。不安定な私のことを諦めずに最後まで付き合ってくれたし、婚いだ時もこんな私を受け入れてくれた」

「かなり大変だったけどねー、ハハ」

「……そんな私を受け入れてくれたあなただから私は私という存在を赦していける。だから道人、私はあなたの篝火になりたい」

「……焔？」

「彼女は、俺の隣で座っていたがそう言いきると立ち上がってその場を去ってしまった。」

焰はガーディアンの仕事において、帝都という暗闇を飛ぶ小鳥たちの篝火になりたいと言って「篝」というもう1つの名前を持った。

俺はそれを承認したし、鴉羽達も彼女が仕事においてはその呼んでいた。

彼女がそう言ったと言うことは、恐らくは――。

「つて、ぬあああああ〜〜〜と!」

俺はそこまで考えて、風によって屋根にまで吹き飛ばされた。

こんなことができるのは、セキレイの中でも1人ぐらいしか思いつかない。

俺が屋根に着地した後、後ろから腕を回されてこう言われた。

「ソフ♡ だーれだ♡」

「全く…さっきの風と言い、この色っぽい声は風花さんだな?」

「ふふ、あーたり♡」

彼女は、笑いながらそう言ったので俺も釣られて笑っているところなことを聞いてきた。

「ねえ道人クン、道人クンは私のこと、好き?」

「勿論ですねえ、俺と婚いでくれたあなたのこと好きですよ」

「じゃあ、皆の中では何番目?」

「……答えに困りますねえ。順位なんて決められません」

「……………そう」

俺がそう言うと、風花にはいつもの余裕はないようで少し寂しそうだったので、俺から彼女に聞いてみることにする。

「……もしかして、嵩天のことで不安になっています?」

「勿論よ、あんなものが現れたら誰だっておかしくなるわ」

「ですよねえ……俺も少し緊張していますよ」

「……………」

「しかし、鶺鴒計画の当初から参加して皆の姿をこの目に写した時から俺が望むものはもう決まっていたんだ」

「望むもの? 何何? なーに? おねーさんにも教えてー」

俺がそう言うと、風花は俺が望むものを聞いてきたが俺は後ろ振り向くとある行動に出る。



それは――。

「……（チユツ）」

「え？」

「それを言えるのは計画が終わってから、ですかね」

それは、風花の頬にキスをしたことだ。

予想外のことに、風花は頭が真っ白になっていたが我に返ると頬を膨らませて、怒った表情で俺に言ってきた。

「むー！おねーさんをからかって面白いの!？」

「スマンスマン。だけど、俺の望むもののためにやれることをやるつもりだ」

俺がそう言うと、彼女は驚いた表情になってから優しい顔で俺とキスをした。

風花は、昔から俺が男らしく行動できるかを見続けている。

その行動は、肉体的にたくましいとかではなくて自分の考えで行動できるかが、彼女が惚れる基準になっているから俺は俺なりの行動をしてきた。

それは例え、葦牙として泥水を啜っても前進し続けることも考えているので、つらい状況になって弱いところを見せても進み続けた。その結果が、俺達が置かれている今の状況であると確信している。

これらのやり取りを、風花と気が済むまでやってから俺達は地上に降りた。

## 第20話 鵺鴿表明 後編

「ようするに、セキレイの告白大会なのですよ」

「なる、秋津達が来る前にやっていたジャンケンはそう言うことだったんだね」

セキレイの告白大会である鵺鴿表明は、セキレイにとつての意思表示であるという意味で神聖な儀式でもあるのだがセキレイと言えども個性豊かなのでそれぞれがやりたいことを伝えるのだ。

秋津と焰は俺のことを守ったり、道しるべになりたがっていた上に風花は心ゆくまで夜の営みをする事だった。

一方の松は、以下の鵺鴿表明をした。

「実験! みつたんでただれた実験を心ゆくまでしてみたい、とゆるこれにつきますですな。クフクフクフクフ」

「相変わらず、そう言ったことは一貫しているよな」

「ま、松は今後も変わりなく松らしくみつたんを好きでいる——と、そんだけのお話ですよ」

松が、いつもの笑い声と共に言ってきたので俺も慣れた感じでそう言った。

こいつは、俺と初めて会って鵺鴿基幹が反応した時からずっと一貫して、このことを言い続けているのだ。

そのため、長くいる俺としても「うん、知ってた」という表情になると松は話を進める。

「しかし、松はみつたんの軍師ですゆえ、今はアレが気になって仕方ないですよ」

「嵩天、だよな?」

「はいです」

嵩天とは、一組の葦牙とセキレイが最終的な目的地としている場所であるのと同時に、最終決戦の場所でもある。

あそこには、No. 00が昇ってきたセキレイ達を選定する場所であるので必然的に、No. 01である美哉があそこに立って待つことになるだろう。

健人は、そのことに対して猛反対するだろうが計画に長らく参加しなかった代償で、M・B・Iどころか美哉に対しても有効なカードを切れないと思う。

とは言え、生き残った葦牙達の誰かがあそこに行って勝利を掴んだらセキレイの命運や葦牙、そして全人類の命運が決まることになる。そうするには、まだ人数が多いので嵩天に行けるセキレイと葦牙をふるい分ける意味で、神座島で生き残った葦牙達がしのぎを削ることになる。

そのため、神座島の動向に関して注視しつつもそこに行つた時に、どうするかを松と一緒に考えていった。

「ん？おお、今度は鴉羽かい？」

「ああ、ジャンケンで決まっちゃってしまつてねえ」

一旦、鴉羽と結女の鵺鴿表明を聞くために出雲荘内を歩いていると皆人の部屋で、くーちゃんが皆人に鵺鴿表明をしていてほんわかしていると鴉羽がやって来てそう言ってきた。

どうやら、最後に言えないのが残念そうだったがそれでも、鵺鴿表明をしてくれる鴉羽の行動がありがたかった。

俺が出会った当初は、彼女は本当に戦闘狂で婚ぐ時もただ単純に、パワーアップしたくてやったような感じを受けた。

しかし、今ではそんな彼女が鵺鴿表明でむくれ面になる方が当たり前になつている。

原作から大きく変わったなと思いつつ、彼女の表明を聞くために俺の部屋へと場所を移した。

「ふう、こうやって二人きりで話し合うのも久し振りな気がするよ」

「だなあ、ここ最近には鵺鴿計画で忙しかつたし」

俺がそう言うと、鴉羽はいつものように微笑んでいる表情から真剣な顔になつて俺に聞いてきた。

「道人はさ、鵺鴿計画が終わつたらどうしたい？」

「計画が終わつたら？……うーん、そうだなあ………参つた、色々やりたいことがあるからそう簡単には決められない」

「ふふっ、そう言うところは昔から変わらないよね」  
「うるせーよ」

そう。昔から、その時に熱中していることが終わった後に次はどうするのかが決まらない、という癖がある。

もはや、習慣と言っても過言ではなくてその度にしばらく考えてから、次のことを決めてやるのが俺と鴉羽達の間で当たり前になっていた。

とは言え、いくつかは取っ掛かりやすいのですぐにやることはできるだろう。

「私はさ、戦うことが第一だった。それだけに生きるんだと思っていったんだ」

「ああ、そうだったな」

「だけど道人に出会って、色んな奴と話して仲間になったりしてその考え方が大きく変わった」

「……………」

「道人……私は今、君を守るセキレイとして刀を振りたい。こんな私を受け入れてくれた君にこそ」

俺が彼女の目を見ると、決意に満ちた目をしていたので俺は微笑んでこう言った。

「いいよ、君が思うように刀を振るって欲しい。そのための葦牙とセキレイなんだから」

「……………」

「そして、俺を選んでくれてありがとう。君がいたからこそ、ここまでやってこれたよ」

「ふふっ、君は昔と変わらずにそう言ってくれると思ったよ」

鴉羽がそう言って、顔を近づけてきたので俺も近づけると互いにキスをしてこう言い合った。

「幾久しく」

「こちらこそよろしくね」

さて、何だかんだで婚いでいるセキレイからの鵲鳩表明は受け付け

たのだが、問題なのは婚げないセキレイである結女についてだ。  
できることなら、縁のセキレイという肩書きはそのままに婚げるようにしたい。

既に、何通りかのプランは考えているのだが今は重要な時期なので、そう簡単に開始することができない。

計画が一段落して、帝都が安定したらプランを実行しようと思うけど今は、そんな彼女を裏庭で待っている状態だ。

どうやら、結と特訓していたようなので普段から着ている服装に着直しているとのこと。

そして、彼女が裏庭にやって来た。

「着直しは終わったかい？」

「はい！結さんは十分に強くなりました！」

「うん、鶺鴒表明。君で最後だ」

「あっ！ちよつと待つてください！少し緊張しちゃってますので」

彼女がそう言うと、深呼吸してから鶺鴒表明をした。

「道人さん！私はあなたに初めて会った時から大好きです！こんな私でも受け入れてくれました。羽ばたくことを知らない雛達を守ってくれました。計画の中でもセキレイのことを考えて行動してくれました」

「……」

「皆が婚いだ後も道人さんは私にも優しくしてくれて、そんな道人さんと一緒にいるのが嬉しくて私、ずーつとあなたに恋をしています。だからもう一度、言います！」

「幾久しく」

「これが私の鶺鴒表明です！」

……何でだろうな。自分の境遇を見返して、ひねくれてもおかしくないのに何でここまで真っ直ぐに俺を見つめて明るく言えるんだろうな。

それは多分、自分の役割をしっかりと分かったからここまで真っ直

ぐにやれるんだろう。

それに対して、俺はどうだ。

転生する時にチートな能力を得て、この世界にやって来てからずっと研究に情熱を注いできた。

鵜飼計画だって、自分の能力を發揮するための計画でしかなかったのに今では、彼女達がいなくて寂しくて仕方ない。

これは多分、研究よりも彼女達のが好きになったからだろう。

だから、俺は真っ直ぐに見つめてくる彼女を見てこう言った。

「結女、結達を攫いに来た奴らを追い払ってくれなかったら今こうしてここにはいなかった」

「……」

「皆と本気で笑ったり、泣いたりしながらも多くの人達と出会うこともなかった」

「……」

「だからありがとう、結女。俺のそばにいてくれて。本当にありがとう」

俺がそう言ったので、結女はうつとりとした表情で俺を見つめてきたが人の気配を感じて縁側を見ると鴉羽達から嫉妬の眼差しを受けていた。

そのため、俺は結女の手を握って鴉羽達に近づきながらこう言った。

「俺はな、結女。君や鴉羽達とずっと一緒にいたいんだ。だから最終段階、必ず勝とう！」

「……っ！はいー！」

## 第21話 神座島

『皆さん、ご覧下さい！帝都湾に突然、出現したこの島は全長約2 km程の大きさがあり、現在、実質的に帝都の実権を握っているM・B・Iの発表ではこの島は、同社所有の島だと言うことで……』

「ほげええ、神座島をここまで持つてきたのか!？」

「そうなりますね、1週間ほど前にレーダーから消えたと思っただらこういうことだったですか」

「と言うと、島が自力でここまで来たの!？」

「M・B・Iのビックリテクノロジーの賜物ですな」

第四回戦から一定の日数が経ったある日、日本海からあつた神座島が帝都湾に現れたのだ。

そのため、俺と皆人、そして松とで三者三様に驚いている間にも、アウンサーが実況を続けていると状況が変化したらしく、取材陣が慌てていると画面が変わった。

『M・B・Iは湾岸に施設群を展開し……あつ、我々取材陣にも今、退去命令が——（プツツ）』

『……諸君、今この展開を以て私は古い世界に終わりを告げよう』  
それまで、島を映していたテレビから御中社長の顔がアップで映し出された後、カメラが引いて社長の上半身を移す形に落ち着いた。

『これより、地上に神代しんだいが甦たる。新しい上の世が。M・B・Iの全てはこの時のためにあり、ゲームマスターたの役目もここで終わる』

『神座島。これより、この島で繰り広げられるのは神代に至る最後の闘い。可憐な戦記はこの始まりの場所で収束する。主役達、死地へと向かう心の準備はできたかね?』

『さあ！お迎えだ』

社長がそう言うのと、出雲荘周辺から騒音が聞こえてきて入り口に行ってみるとM・B・Iの装甲車が、兵員を連れてやって来た。

そして、空にはいくつものヘリコプターが見えたので逃がすつもりはないだろうから、俺達は素直に行くしかない。

一方、健人や美哉も何かを決意した表情になっていた。

そして、ヘリコプターで神座島に到着すると他の葦牙とセキレイ達も来ているようだった。

「ここが神座島……」

「つたく、久し振りに来たけど相変わらず殺風景だな」

「そう言えば道人さんって以前、ここで働いていましたもんね」

「よう、佐橋に道人」

俺と皆人で、話し合っていると瀬尾がやって来て声を掛けてきた。

「クツソ：第一回戦よか悪質な拉致り方で連れてきやがってよ。空から道路から四方八方囲まれて逃げらんねっつ」

「逃げる気満々だったのかよ、俺もだけど」

「あはは……」

瀬尾の愚痴に、俺がツツコミを入れると皆人は引きつった笑顔になったが、異変は着実に俺達を蝕んでいた。

「痛ッ……」

「どうしたんですか？」

「佐橋、なんか頭つつーか、体重くね？」

「……？ 風邪でもひいた……とか……？」

「いや、そんなんじゃないよ……なんかこうタチの悪イ……」

瀬尾がそう言っている間に、他の葦牙達も集まってきていて俺達に最初に声を掛けてきたのは真田だった。

「おめーがそんなデリケートなタマかよ、瀬尾」

「真田さん！」

「おひさー」

「オレなんか、生まれてこのかたカゼなんかひいたコトないぜ！」

「へー、バカは風邪ひかないって言うもんね！」

「御子上か……」

「ンだこのガキアア！」

「フン、全く騒々しいな」

とまあ、個性的な葦牙が残っている中で皆人は明らかに氷我を敵視しているが、そんな中でも彼らと比べて比較的マトモな奴が現れた。



「あ、いたいた。武田さんに佐橋さーん」

「おーっす、元気そうで何より」

「あ！No. 87の…」

「大角です。大角折彦」

とは言え、葦牙がマトモでもセキレイ同士がそうであるとか限らないのが世の常で、結と鹿火が対面するとそれぞれの葦牙の背中に隠れてしまった。

事情を聞くと、出発した後で顔を合わせる時は戦う時だと決めているらしい。

そのため、月海が呆れていると懲罰部隊の主力メンバーがやって来たのでより一層、騒がしくなってくるとM・B・Iの私設軍がヘリコプターに乗って引き上げていくのが見える。

多分、決着が付くまでここから出られないのだろうが、その前に皆の体調に異変が現れた。

「!? 瀬尾さん！」

「クツソ、カゼなんてもんじゃねえ。やべーぞ、こりや」

「…！あ…れ？なに？体が」

「ったく、以前はこんなのはなかったぞ？」

瀬尾が、頭を抱えて跪くと皆人も両手を地面についたのと同時に、俺もよろめいて鴉羽に支えてもらった。

彼女達が驚く中で、他の葦牙達も急に足取りが悪くなったのでその場は軽く混乱し始めた。

それを待っていたかのように、社長がスピーカーをかいしてこう言ってきた。

『説明しよう！この『神座島』は永きにわたり、神器とセキレイの近くにあったために神器の『特性』を帯びている』

「神器の…特性…？」

『セキレイの鵺鴿基幹や神器のは発動するためのルールがあるがここにはそれが無い。つまり、この島は常にエネルギーが開放されている状態にあるのだ。鵺鴿基幹を持つセキレイや、逆に普通の人間であればなんでも無いのだが――』

普通の人間？てことは葦牙基幹を持つ奴らはもしかして……。

『——セキレイに通じる属性を持ち、しかも鶺鴒基幹を持たない者……すなわち“葦牙”には毒性に近いエネルギーだ。つまり、“葦牙”はこの島にいるだけで命を削られ、いずれは……』

「えつちよつ社長!?!なに言ってるの？バツカじゃないの!?!え、ヤダ、夏朗！夏朗!!いやー……ッ!!」

『落ち着きたまえ、紅翼君。無論、そうならない様にする方法はある』  
社長の説明で、紅翼は混乱して壱ノ宮の体を揺するが説明の続きがあるようなので、この場にいる皆が食い入るように聞いていると彼はこう宣言した。

『生き残る鍵は“神器”、みんな忘れずに持ってきたかな？さあここから最終段階、ステージⅠを開始しよう!』

「道人!」

「道人さん!」

「ははっ、そう言うことかよ。ったく、本気で笑えねえ」

社長からの説明を聞いて、俺は持ってきた神器の番号を確認する。神器には、8の数字が書かれていて上空に浮かび上がった数字のところはまだ、持って行かないとダメらしい。

説明している間にも、毒性のエネルギーが俺達の体を蝕んでいく。今の段階ではまだ息苦しいだけではなく、体に上手く力が入らないので歩くだけでも一苦労だ。

原作では、皆人が神器を3と8の神器を持っていて島の端と端を行かないといけなかったが、この世界では俺という存在がいるので問題ない。

そのため、葦牙達はそれぞれのセキレイに手伝ってもらいながら M・B・Ⅰに、指定された場所に行くことにした。

「よし、行くか!」

「はい!」

「道人さん、後で会いましょう」

「皆人、ミスったら幽霊としてお前を祟ってやるぜ」

「ははは…」

「コツチも行くわ。生きてたらまた会おうぜ」

「ああ、また後で」

それぞれの葦牙は、言いたいことが多々あるだろうが早くしないと全滅するため、忌々しげにしながらも島の中央部からそれぞれの場所に向かった。

## 第22話 鴉羽 VS 鹿火

『5！4！3！2！1！』

カウンタダウンが始まる前に、神器を所定の場所に差し終えた俺達はカウンタダウンが終了すると同時に、息苦しさがなくなったので全ての神器が収められたことになる。

そのため、とつと皆人達と合流しようとした瞬間、俺達の周りにあつた機材が動き出して社長からのアナウンスが流れた。

『申し訳ないが：たった今、君達はそこから出られなくなつた。ステージIIの始まりだ!!』

「痛っ……！」

「光の壁か？」

「そうみたいだ」

そのアナウンスと共に、機材から上空に向けて光が発射されたので焔が触つてみると、その光から弾かれるように手を引いた。

一列に並んでいるところから察するに、差し詰め光の壁のように見えるのだがそんな状況を社長が説明してくれた。

『ルールは簡単だ。この光の壁で区切られた“ゲージ檻”にはそれぞれに葦牙が2人ずつ。同じ檻ゲージにいるもう1人の葦牙がまずは諸君と

“闘う相手”だ』

『ちなみに私は気が長い方ではないのでね。制限時間タイムリミットは1時間。1時間以内に決着の付かない檻ゲージは葦牙、セキレイ共に全員が機能停止となるのでそのつもりで』

『では、私はこれにて。諸君らの健闘を祈る』

「……ここまでが社長の計画という訳か」

「全く、社長は意地悪だね」

「私、負けるつもりはありません！」

「ですが現状において、相手がどういうセキレイなのかが分からないと……っ！」

松がそう言いかけて、光の壁で仕切られたフィールドに目をやると既に、相手の葦牙とセキレイがこっちに來ていた。

そして、セキレイの方はやる気満々のようだ。

「鴉羽様！」

「なんだ、最初の相手はキミか」

「……」

「ええつと確か、No. 87。……ああ、そうだった。2回目の“神座島侵攻”の時に、人間に攫われかけて道人に迷惑をかけた間抜け」

「……っ！鴉羽、言葉を選びなさい！」

鴉羽は、鹿火のことを思い出して憎しみの表情を浮かべながらそう言った。

何故なら、彼女が小さい頃に起こった第二次神座島侵攻が起こった当時、船の外に新設されたセキレイの調整施設にいたのが俺を始めとする数名の研究者と2羽のセキレイの幼体。

その時には、初代懲罰部隊は相次ぐ離反によって解散していて2代目懲罰部隊は、別の用事で神座島を離れていたので侵攻を許してしまった。

そのため、懲罰部隊が帰ってくるまで籠城していたのだが研究者達が次々に射殺され、入り口を突破された俺も侵攻してきた奴らに肩を撃たれたのだから。

幸いにも、俺が殺される前に結女と鴉羽が帰ってきたので死なずに済んだが、それでも俺が怪我したことに本気で怒っていた。

そして、その原因が鹿火と結にあるのだから言い訳できないのだが、そんな彼女を庇うように結女が鴉羽にそう言った。

「だけどゆるーちゃん？彼女は、当時の道人に恐怖という物を教えてしまった。だから万死に値すると思うんだけど？」

「ですが……！」

「結女、鴉羽の言葉にも一理ある」

「道人さん……」

「だけど鹿火、お前はあの時のようにひ弱な幼生ではないのだろう？」  
代えがたい事実、結女は反論するが俺はそれに待ったをかけて鹿火に聞いた。

すると、彼女はそれを合図に薙刀を構えて鴉羽に接近した後、彼女

にその刃を突き立ててこう宣言を行った。

「はい！私は私の運命キズナと出会えたのです。よって今の私に迷いは無く、ここにあるのはあなたの闇を砕かんが為ッ」

「……」

「——それを伝えたかったです！刃の心念、貫かせて戴きます！」  
「…面白い、では遊んでもらうとするかね。前菜ぐらいにはなっておくれよ？」

鴉羽が、俺に目配らせしてきたので俺が頷くと彼女は自分が持っていた刀を鞘から抜いた瞬間、鹿火が見計らったように技を繰り出す。

「戦ノ舞 咲姫サクヒメ!!」

鹿火がそう言うと、斬撃がソニックブームとして飛び出したので鴉羽が軽くないなすとその直後、鹿火が薙刀を槍のように持って突進してきたので鴉羽は寸での所で防御した。

鹿火の表情は、余裕そのもので彼女が飛び上がると次の技を繰り出す。

「兵ノ舞 百華ひゃっか!!」

薙刀の強さは、日本刀の柄の部分が長くなったような武器のため、そのリーチを生かした戦い方ができると言うことだ。

槍のように突くこともできるし、リーチを生かして相手のアウトレンジから撫で切りにすることもできる。

そして何より、鴉羽が防御の構えを取ったにも関わらずに彼女の頬が軽く切れて血が静かに肌を伝う。

そんな様子を見て、俺は鹿火の成長を嬉しく思う。

侵攻時には、何もできない幼女でしか無かった彼女が鴉羽と闘っているのだから。

鹿火は、次から次へと攻撃を繰り出して鴉羽がそれに付き合うという光景は、あの時には想像できなかった光景だから可能な限り、続いて欲しいと願ったが鹿火の葦牙である大角がこう言った。

「鹿火、祝詞だ！一緒に戦おう！」

「…はい！」

その返事を聞いて、鴉羽も俺を見てこう言った。

「……だってさ、道人。ここは受けて立つべきだよな？」

「勿論。俺達も一緒に戦おう」

俺もそう言っていると、鴉羽は嬉しそうに笑ってキスをした。

後ろから、5羽の嫉妬のオーラが来ていたが鴉羽はあまり気にしていないようである。

そして、鴉羽と鹿火はそれぞれの祝詞を宣言した。

「我が誓約の刃、葦牙が怨敵 塵殺せん！」

「我が誓約の舞、葦牙が厄 薙ぎ払わん！」

互いにそう言っていると、鴉羽の背中から骨が組み合わさったような羽が光り出して、鹿火からは布のような羽が光り出した。

そして、鴉羽と鹿火はそれぞれの必殺技を唱えて攻撃を繰り出す。

「セキレイカグラ 鶴鶴神楽・ひよく 比翼ノ舞！！」

「メイ 冥ノ太刀 くおん 久怨」

そして、それぞれの技がぶつかり合って拮抗した。

その衝撃波は、かなりのものだが少ししてから鴉羽の技が鹿火の技を押しに行き、ついには鹿火の技を押し切った。

しかし、その衝撃波までは防ぎ切れなかったようで最初に付いた傷とは反対側の頬にも傷が付いた。

それを見届けた鹿火は、満足したように仰向けに倒れていった。

「鹿火……！鹿火！！」

自分のセキレイが負けた、という事実を知った大角は急いで鹿火の元に駆け寄って彼女を抱きしめると、鹿火は嬉しそうに何かを呟いて意識を失った。

その様子を見て、俺は鹿火が負けたという事実を受け入れて目をつぶると鴉羽を歓迎した。

「よくやった。思うところはあるだろうが、十二分にやってくれたよ」

「……その割には悔しそうだけど？」

「癩に障ったらスマン。何だかんだ言って、思い入れがあるもんでね」  
「別に気にしないよ。研究者として携わってきたのだから当たり前だしね」

そんなやり取りをする間、結女達は微妙な顔だったがすぐに社長か

らのアナウンスが入った。

『諸君！注目！ちゅうもーく！！早々に1人目の脱落者だ！』

その宣言と共に、敗れた鹿火達が映し出されて次に俺の姿が映し出された。

『勝者は弊社研究員の武田道人！セキレイは同じく弊社所属の懲罰部隊補佐の6羽だ。その内の鴉羽君が見事な一騎打ちをしてくれたぞ！』

『これで残る葦牙は7人！さあ、皆もそろそろそれぞれの相手と遭遇しても良い頃じゃないのかね？』

その言葉と共にアナウンスが止まったため、鹿火と大角を乗せたヘリコプターが飛び立つのを確認してから俺はこう言った。

「さて、どうせ暇なんだからこの台座を弄って船を弄ろう」

「ですね、どこかが動けば急いで行か……ってみったん、今なんて言いました？」

「いや、ここで待機するのも面倒だから他の戦いに乱入できたら楽しそうじゃね？」

「乱入するのは頂けません、退屈のぎにはなりそうです。一先ず、アクションを起こしましょうか」

俺の発言に、松と結女はさつきまでのシリアスな雰囲気から意地悪を企む雰囲気になったので、焰と風花はため息を吐いた。



## 第23話 神座島侵攻

「……ん？」

「勝手に開きましたね」

「松はハッキングしている途中ですよ」

俺達は、神器の台座の近くにあった入り口っぽい丸い蓋を弄っていると、プロテクトや開こうとする力に抗っていた動力の力が消えてすぐに開いた。

すると、俺達を囲っていた光の壁にも変化が起きた。

「……道人、光の壁が消えた！」

「勝手に消えたわん」

「消えた、不思議」

急に消えた光の壁に、鴉羽達も驚いているが光の壁を発生させていたのは船の力であるので。船に何かしらのアクシデントが起こったに違いない。

今まで、神座島が守られてきたのは船の力であるのでその船の機能が喪失したら、これから起こることは神座島侵攻が始まるということだ。

となれば、その情報を1人でも多く共有させた方が良いので改めて指示を出した。

「船の機能が喪失した以上、船に入るよりも地上を走った方が早い！すぐに移動するよ！」

「はー！」

俺がそういうと、鴉羽が俺を担ぎ上げて移動を開始した。

正直、俺が走るよりもセキレイの方が早いので彼女達に乗って移動するのが、当たり前前になっているがだからって荷物のように担ぎ上げなくてもいいんじゃないかと思う。

とは言え、既に移動を開始しているのですぐには変えてくれないだろう。

そのため、ややみつともない格好で移動していると葦牙達が集まっている場所に来た。

「ん、おお皆人。無事だったか」

「道人さん！あの…！」

「すまん、こつちも負けられないんで」

皆人が何かを言いたそうにしていたが、俺はそう言うのと彼は押し黙って氷我の方を見た。

「どうやら、ステージⅡにおいて皆人が戦うことになっていたので彼は彼らしい。」

彼のそばには、倒れているセキレイがいて動かないところから察するに、機能停止になっているのだろう。

「そうこうしている内に、他の葦牙達も集まってきたので見回してみると、瀬尾がいないことに気が付いた。」

「なあ、皆人」

「なんです？」

「瀬尾達はどうした？」

「結ちゃん達が吹き飛ばしました。松さんの協力で」

「……松エ」

「ち、違いますよ！瀬尾たん達には場外ノックアウトになってもらっただけです！」

俺が冷やかしの目で見ると、松がそう弁解してきたのでとやかに突っ込むのはやめにしてバトルロイヤルと化した戦場を見つめる。

懲罰部隊の2羽は、氷我と皆人のセキレイに当たっている状態で真田のセキレイがいつもとは違うセキレイになっている。

「多分、隠し球だろうけどきつい性格をしているようで持て余し気味だったようだ。」

その3羽は、No. 14の千代、No. 17夕那、No. 20の二十重ハタエと言つて結女や秋津と戦っている。

鴉羽は、鹿火との戦いで何か思いふけているようで戦闘に参加しなかったが、それでも周囲を警戒してくれている。

「……うう、そう言えば、御子上の奴らがいないな」

「そう言えばそうですね、どこにいるんでしょう」

俺の言葉に、皆人が反応すると空気を着る音と共にヘリコプターが

やって来た。

悪いことは立て続けに起きる、とはよく言ったもので船のトラブルで光の壁が喪失した以上、島を守っていた物がなくなったからには敵対している組織からすると格好のチャンスと言えよう。

しかも、この状況から察するに御中社長は不在と見える。

何故なら、彼のカリスマ性でもそもこの状況を作らないからだ。そうなれば、これから起きることと言えば神座島がまたも始まる訳で、機能停止して放置されているセキレイは拉致されるだろう。

そのため、とつとこの状況をなんとかしないといけないので俺は、持ってきた衛星通信ができる小型の無線機を持ってきているのですぐに展開して本社と通信を開始した。

「本社、本社！こちら武田、状況を教えてくれ！」

『道人かい!?こつちも攻撃を受けていたが、ドロップアウト組や隠れて過ごしていたセキレイ達が応戦してくれてなんとかなっている!』

「了解した。社長はどうしているか、分かるか？」

『そつちに向かったところまでは分かるんだがそれからはなんとも……』

通信を開始すると、出てきたのは高美さんで社長のことを聞くとこの島に來ているらしい。

いつの間に来たんだ、という疑問は脇に置いても社長までもが不在なら状況は最悪だが、幸いにもM・B・I本社を強襲した部隊に生き残っていてこの島に來なかつたセキレイが、応戦してくれているのでまだマシと言えよう。

そこには鈿女や椎菜、久能が参加していて部隊は立ち往生している状況なので、当面の問題はこの島に來ている部隊だ。

遠目で見ると、ヘリコプターや軍艦が一定数の編成でやって來ているので、セキレイの技術を盗みに來たのだろうと松が予想した。

そのため、どう対処しようかという話になった時に神器が設置してあつた台座から、悔しそうにしている御子上と陸奥が出來てきた。

事情を聞くと、船のシステムをダウンさせたのは彼らしくてやむを得ない状況だったとは言え、ゲームが台無しにされたことに本気で

悔しそうだった。

そして、島の外に連絡がままならない状況下では謎の島でカリスマ的な社長が生死不明、という口実が生まれた以上は大金を払ってでも敵対する組織に襲わせているのが現状だ。

唯一の救いは、神座島侵攻を経験してきたメンバーの殆どが機能停止にならずに済んでいることなので、彼女達を中心に戦っていけばなんとかなるだろう。

そのため、葦牙同士のバトルは一時休戦で目の前の脅威を排除する為に敵味方関係なく、共同戦線を張って戦うことになる。

その最初の攻撃として、嵩天の能力を利用してヘリコプターを墜落させる。

風花がやつても良いのだが、効果を出すには範囲が広すぎるので使えるものはなんでも使う精神で嵩天のコントロールを一時的に奪って使うことにした。

その際、そう言えばエロメガネ松がN.O. 02で美哉に次ぐセキレイだったな、と言う認識の一致が葦牙と初代懲罰部隊の間で行われた。

その後、松の能力をフルに引き出すために祝詞を使った。

「我が誓約の智、葦牙が世界 能く識らん！——」

「……」

「——さあ!!コントロール松の調教を受けるのですよ♡ 嵩天たん!!」

そう言って、松がその島を指さすと何故か固まってしまった。

恐らく、脳内の情報処理のソースが嵩天のコントロールで一杯になってしまったと思われるので、俺は何も言わずに彼女の肩に触れると精神感応で会話をすることになった。

その結果、神座島上空を飛び回っているヘリコプターを意図的に墜落させるため、嵩天の力で払いのけようとしてビームが出た。

「……あ」

「何やってんだよ、松さん。出力が過剰すぎるだろ」

「ち、違いますよ。コントロールが難しいんです」

俺のツツコミに、松が慌てたが2回目では上手く風を巻き起こして大半のヘリコプターは落とせたが、その直後に嵩天のコントロールを

奪い返されたので通常の意識に戻った。

落ちたヘリコプターから、上手く脱出できていることを祈りながら次に洋上を航行している軍艦を行動不能にするため、月海の祝詞でなんとかしてもらった。

え？ M・B・Iの巡視船はどうしたかって？ I回限り、他の葦牙に婚いだセキレイとリンクができるという薬を開発済みなので、それを無痛注射器で松に注射してやってもらったよ。

何だかんだで、原作の知識とセキレイと長く接しているからできた薬だな。

その直後、壱ノ宮から社長が生きているという情報を拡散して欲しいという願いを聞いたので、氷我の耳についている機器と俺の無線機を通して情報の拡散を行った。

こうすることで、武力攻勢の裏にいる勢力も侵攻をやめざるを得なくするためだ。

その情報が、氷我の会社とM・B・I本社から出回った直後にアノウンスが流れた。

『この島の葦牙に告ぐ!!諸君らの仲間をI人確保した!サナダという男だ!!』

## 第24話 反撃の時

『諸君らの仲間を1人確保した！サナダと言う男だ』

『我々も手荒な真似はしたくない。それぞれのセキレイを連れて、大人しく投降すれば彼にも諸君らにも危害は加えない！』

『島の中央で10分待つ。諸君らの賢明な判断を望む！』

そのアナウンスを受けて、神器の台座から勢いよく飛び出した真田の小さい方のセキレイが泣き出したのでヤレヤレといった感じで俺は鴉羽達にこう言った。

「……投降しろとは何様のつもりだし、このまま黙っていてもつまらんから戦うとしようか。なあ、鴉羽」

「ふふつ、良いのかい？大暴れしちゃって」

「問題ない。大国と呼ばれている国々には俺から圧力をかけているし、終わった後での支援要請もしてしてある。しかも超大国の支援も確約してもらっているしね」

「政治についてはよく分からないけど君が満足しているなら問題ないね」

鴉羽は鞘から刀を抜くと、結女も物足りなそうにうずうずしている。

元々、研究者として色んな分野で特許を取得するほどの知識を持っている上に未公開の研究成果も、多くあるので国連で発言権が大きい国を中心に侵攻しないことを条件に取引をした。

そのため、侵攻してきた奴らの装備を見るとそれほど良いものではなさそうだったため、今の鴉羽達でもなんとかなるだろう。

しかも、侵攻してきた国々に対して大国が有利になるような情報まで渡してあるので、2つの返事で了承してくれたのだ。

断った場合、時の政権が暴露されたら困るような情報をあらゆる情報機関に売りさばく、と言ったので半分は脅すような形になったがセキレイが無事なら問題ない。

そんな俺達のやり取りに、他の葦牙達も戦う気分になっていると皆人がこう言った。

「——そうですね。侵略者の言う通り、俺達は葦牙とセキレイだ。だったら、俺達は俺達の理屈で動けばいいんじゃないのかな」

「結ちゃんがよく言っているんだけど、セキレイはみんな心のままに生きている”って”」

「彼女達は自由だ。その翼は何者にも縛ることは出来やしない。そして俺達は葦牙なんだ、”人”の理屈なんか関係ないでしょ」

「彼女達のように俺達も心のままに戦えば良い。ついでに侵略者達……いいえ、世界全部を巻き込んだじゃええばいいんです！」

「さあ、嵩天はあそこですよ!!」

皆人が指さす方向には、宙に浮かんでいる光の羽が映っている島がある。完全に社長みたいになっている。

そのため、それぞれの葦牙は違った反応を示した。

「……クツ…クツ…この島に来て私はどこか、おかしくなっちゃったようだ。社長の息子の言葉が正しく聞こえるとは。私も葦牙——と言うことか」

氷我がそう言うと、自分のセキレイ達に向かってこう言った。

「お前達、まだ行けるか？」

「はいっ」

「はい！マスター」

一方、壺ノ宮は皆人にこう言うってから自分のセキレイ達にも声を掛ける。

「血は争えないって言うんですかね。社長みたくでしたよ」

「へっ!？」

「紅翼、灰翅。暴れちゃって良いよ、存分にね」

そんな中、御子上は拗ねたように言いながら宣言した。

「はあ〜、もう!!なんかさあつ、一番マトモなことだった筈の僕がバカみたいじゃん!でも完全同意!!北に守られている葦牙はキライだけれどね!!」

そのため、俺は焰に対してこう言った。

「じゃあ、俺達も祝詞を使おう。焰、でかい篝火を焚くぞ？」

「の、祝詞?!ここでかい？」

「焰の炎を嵩天に昇る俺達の最終決戦を始める烽火のろしにするんだ。どうせなら、ど派手にやるのが粋というもんだろ？」

「……全く、君がやることの多くは無茶ぶりに近いものがあるよ？」

俺がそう言うと、焰はため息をつけてそう言ったので聞き返した。

「なんだ?できないのか?」

「いや、出来るよ。全てはキミの望みのままに」

焰がそう言うと、俺とキスして祝詞を唱えた。

「我が誓約の炎、葦牙が業 燃やし付くさん！」

「……焰はかなりでかい炎を出すつもりだから焼き鳥にならない内に中央部に向かうんだ！」

焰が、やろうとすることを察した俺は他の葦牙やセキレイに伝えると焰以外の全員が、その場を後にして俺自身も鴉羽の護衛の元で中央部へと向かう。

その直後に、巨大な炎が上がってそれが最終決戦のゴングとなった。

「ミセロー」

「ミセロー」

「いや〜〜」

「パンツミセロー」

「いやああ〜〜、どうして私ばかりがこんな目に〜〜」

「水祝！」

「激☆震」

乱闘と化した神座島に、上陸した兵士達は御子上や氷我の戦闘不能になったセキレイがいるのでこの戦いで、偶然にも攫われたりでもしたら交渉材料にされる可能性が高い。

そのため、No.107である椎菜と対の能力を付与されたくーちゃんの祝詞を使って、機能停止したセキレイ達を戦線復帰させようというもの。



椎葉は、あらゆるものを枯れさせる能力があるので対になったくーちゃんの能力は、あらゆるものを行かす能力があると推測した。

そのため、くーちゃんに急かされた皆人は相変わらざるのヘタレっぷりで戸惑っていたが、結局は祝詞を使うことになった。

「わがせいやくのいのち、あしかびがほし さざめかさん！みどりのほわほわー！」

その祝詞と共に、神座島に植物が生え始めてセキレイの肉体的損傷を回復させて復活させた。

そのため、敵に塩を送ったことになってこの場にいる全員が祝詞を唱えることになった。

「我が誓約の脚、葦牙が遺恨 しなり砕かん！」

「我が誓約の鋏、葦牙が禍根 断ち破らん！」

「我が誓約の鋼糸、葦牙が縛戒 旋斬せん！」

「我が誓約の霧、葦牙が敵兵 迷い匿さん！」

「我が誓約の銃、葦牙が的殺 打ち抜かん！」

「我が誓約の懐刀、葦牙が仇敵 討ち果たさん！」

「二我が誓約の「黒鎌」「黒双刀」「黒糸鋸」、葦牙ガ凶兆 喰ライ呑ノ

マンー」

「我が誓約の掌、葦牙が拷石 粉碎せん！」

「我が誓約の鉤爪、葦牙が獄卒 挽き裂かん！」

とまあ、10羽ぐらいのセキレイ達が1ヶ所に集まって祝詞を唱えるという自体となったのだが、島全体が揺れ始めたので松が船内のカメラで確認すると社長があわくつてる状態だという。

理由は、神器が鵲鴿基幹と共鳴する特性を持っているが故に神器の内部エネルギーが、制御装置の想定を超えているので制御不能となっているらしい。

つまり、M・B・Iの想定以上にセキレイ達が強くなったと言うことだ。

本来であれば、鵲鴿計画どころではないのでとつと島から脱出するのがベストなのだが、会社の巡視船は状況を察して島から離れてしまった。

そのため、兵士を海に放り投げながら島全体を隆起させないと沈んでしまう。

そうしないと、沈没する時に大量の海水や土砂が襲いかかるのでセキレイはともかく、生身の人間ではひとたまりもない。

そのことを知ってか、御子上が自分のセキレイに呼びかけているのだが、アドレナリンが大量に分泌されているセキレイには届かないらしい。

その結果、危険ではあるがシングルナンバーの祝詞を使うことになった。

想定以上の負荷が掛かり、船の機能が充分ではない現状ではあまりやりたくはないがここで俺達がくたばったら元も子もない。

できることなら、やりたくはないが陸奥や月海、焰達の協力を得ることにした。

神器が暴走するとは露とも知らずに。

## 第25話 機能停止、そして……

「……あれ？俺、どうしてここに？」

俺は目を開けると、目の前には破損してうち捨てられた戦車やヘリコプターがあつて島の砂浜には、船体が大きく裂けた軍艦があつた。状況から察するに、第一次神座島侵攻の直後だと分かるのだが違和感を感じた。

何故なら、島を探索しても研究員は勿論だが初代懲罰部隊に参加していた美哉達や、調整中のセキレイすらいないからだ。

そのため、島を見渡せる場所に来てからここに至るまでのことを思い出すことにした。

「ええつと確か、船の異常で島が沈没しそうになったから陸奥の力で隆起させようとしたんだつたな。その結果、皆の協力もあつて島は沈没を免れたがその直後、何故かは知らないけど意識が遠のいてここにいる訳だ」

俺がそう言つて、頭を悩ませていると後ろから物音がしたので振り返つてみたら、随分と懐かしい顔があつた。

「……ああ、あんたか。また、転生かい？」

「それだつたらどれだけ楽じゃつたことやら」

そこには、俺をセキレイのいる世界に転生させた幼女（の格好をした）神がいた。

「誰が幼女神じゃ、誰が。お主がへマをしたからこうやって来てやつたんじゃぞ？感謝するのじゃ」

相変わらずの読心術だな。それに感謝を強要する神様に感謝したくねえや。

「ほほう？となればこのまま、彼女達を悲しませるつもりかの？」

……鴉羽達か。

「そんな名前じゃつたかの？まあ、何はともあれ。彼女達の生死を大きく変えたのは評価しよう。じゃがこのまま、終わつても良いのかの？」

そいつは困る。少なくとも鶺鴒計画の終わりはちゃんと見たい。

「なら、やるべきコトは決まっておろう？お主にしか、できぬことが……。」

鴉羽 side

「おい！起きろ、道人！おい！」

「道人さん！」

「松、どうにか出来ないのか？」

「無理ですよく、焰たん。葦牙の機能停止なんてそれこそ、みつたんにしか」

「確かに健人を機能停止から救ったのは道人クンだけど、その本人が倒れちゃったらねえ」

「マス、ター……イヤ……逝かないで……」

陸奥達が祝詞を発動した直後、道人を始めとした葦牙が急に倒れてしまったので神器を原因とする不具合が生じたのは分かるのだが、それ以上のこととなると船の中に入って制御室に行かないといけない。

しかし、葦牙が機能停止やそれと同等の状態になったらその葦牙と婚いだセキレイも、機能停止に陥ってしまうため、神座島に上陸して残されたセキレイ達のタイムリミットも残り少ない状態だ。

そんな現実を、知ったセキレイ達は絶望に覆い尽くされたが1羽だけ、諦めていないセキレイがいた。

「……鴉羽、みんな。私に魂を預けて頂けませんか？」

「結女？何を……っ！」

「結女たん、まさか……」

「はい！鵺基幹と葦牙基幹を有している私なら、道人さんの葦牙基幹を守れると思います！」

「……つまり、どういう事なんだ？」

「つまりはですね……」

突然の結女の発言に、鴉羽と松は何かを察したようだが焰や風花、秋津は状況をよくわかっていないようだ。

そのため、松はその3人に結女の特性を教えた。

結女は、鵺鴿基幹と葦牙基幹を併せ持っているのだがその構造は、葦牙基幹を鵺鴿基幹で覆って守っている状態だ。

つまり、道人が持つている葦牙基幹を直接的に守ってやれば神器が放つ毒性の影響を、道人は受けなくなると言うもの。

しかし、結女だけでは道人の魂を再起動するだけの力はないため、彼と婚いだセキレイである鴉羽を始めとする5羽のセキレイが協力して魂チカラを分け与える必要がある。

その説明を受けた彼女達は、一縷の望みを見いだしたようだったがその瞬間、彼女達から力が抜ける感覚がした。

そのことから、鴉羽達が機能停止する時間が迫ってきているので迷っている暇はないので、鴉羽は結女にこう言った。

「結女エ、絶対に！絶対に道人を嵩天に連れて行って勝つんだぞ！じゃないと祟ってやる！」

「ふふつ、鴉羽って道人の正妻的な立場だったからねえ」

「それでいて、皆のことも平等に接してくれたから嬉しかったわん」

「こうなったら結女さんをお願いするしかなさそうですね」

「マスターを…お願い…！」

彼女達は、結女にそう言うってから道人の周りに立って次々に声を掛けた。

「道人、私と最後まで付き合うと言いながら先に眠りやがって。目を覚まさなかつたらあつちで散々、付き合ってもらおうからね」

「私の炎たましいが道人の…キミの篝火とならん事を」

「道人クン、起きたら寝かせないわよん♡」

「みつたんが停止中に実験いたずらしてみたかったです「キミ最低」…やはり反応がないとつまらないので早く再起動するが良いですよ！」

「マスター、起きたらデートして奢ってもらおうからちやんと起きてね」

「道人さん…！」

鴉羽達が、そう言ったのを確認してから結女が道人の魂に火を入れるために鵺鴿基幹で、道人を包むとその場にいた6羽のセキレイと道人が輝きだした。

道人 s i d e

「なら、やるべきコトは決まっておろう？お主にしか、できぬことが」  
……。

……。

俺にしかできないこと。

そんなものは、既に決まっている。

それは――。

「全てのセキレイの道しるべになること。そして、繋いだ手を絶対に離さない」

「……………」

「俺は研究バカで葦牙でしかないが、そんな俺に手を差し出してきた彼女達を絶対に離したくないんだ」

「全くの欲張りさんだなあ。そんな君が好きなんだけど」

俺がそう言うと、良く聞いた声が後ろから聞こえて後ろを振り返ると鴉羽達がそこにいた。

そのため、俺が驚いていると鴉羽達が精神感応で状況を教えてくれた上に、鴉羽が俺にキスをして来たので松と秋津から嫉妬のオーラが出たような気がした。

そのため、呆気にとられていると鴉羽がこう言ってきた。

「全ては結女ライバルに託してきた。だけどキミの魂は私達が護る。だから安心して良い」

「鴉羽……………」

「征け！道人！結女が待っているぞ!!」

「……………おう！」

俺がそう言うと、その場は光に包まれた。

## 第26話 嵩天

「……ん？結女？」

「起きられましたか？道人さん」

「…？結女、これはいった…!?」

誰かの重みと暖かさに、俺が目覚めると目の前に結女がいたので起き上がって辺りを見回すと鴉羽達が俺の周りで倒れていた。

さっきのことと言い、この現状は機能停止した俺を再起動させるために彼女達が己の機能停止と引き換えにやった結果なのだろう。

全く、こうならないように神器から過剰に発生したエネルギーのガス抜きを行うプログラム作成したのに、その結果がこれとは俺もまだまだだな。

俺が、そう思っていると結女はこう言った。

「みなさん仲間の想いは結女が引き継ぎました！——この羽に!!」

彼女がそう言うのと、背中から大きな光の羽が生えて嵩天へと行けるようになった。

そのことが、周囲のセキレイ達に知れ渡るとあちこちから声が聞こえてきた。

「北のひと！お願い、助けて。マスターを助けて…!」

「ますたー」

「ますたあー」

「結女様！皆人さんを救って下さい！」

その声が彼女に伝わったのか、結女は嵩天を指さして宣言した。

「伝わって来ます。私の光の羽に、皆さんの想いが。その想い、私がある！そこへ！届けます!!嵩天へ！」

「……」

「だからみなさん、安心して機能停止して下さい下さいねー♡」

「ムキーンツ！ムカつくー!!」

真面目な雰囲気だったのに、ここに来てシリアスブレイクである。

結女は、二代目懲罰部隊の隊長をやっていたのにどこか抜けているんだよなあと思いつつ、現状を見てみるとこの計画の勝者は俺達の下

うだ。

他の葦牙達は、未だに再起動せずに眠りについていて上に残っているセキレイ達も、嵩天に行くだけの力は残っていない。

そうなれば、必然的に行くのは俺達な訳で神座島にいるセキレイ達の想いを胸に、俺と結女は空へと昇るのだが問題はどうやって嵩天まで行くかだ。

「ところで結女、どうやって行くんだい？」

「それは勿論、回転しながら行くんですよ！」

「か、回転って……ぬおおあああああ!!」

結女がそう言って、俺の両手を持つと繋いだ部分を中心に駒が回る要領で回転を初めて空を飛んだため、俺は情けない声を出してしまった。

そして、その様子を見届けた他のセキレイは次々に力無く倒れて機能停止になった。

「くう、なんもなしに空を飛んでいるのは怖すぎるが……ここが嵩天か」

俺は結女の手伝いによって、嵩天の上空に到達するとその様子を確認した。

嵩天の中央には、台座があつてその中心には鶴鴿紋と同じセキレイのマークがある。

そして、それを囲うように十数本の柱が立っているのだがそこまで確認すると、空中を飛ぶのに必要なエネルギーを使い切ったせいで今度は嵩天へ落ち始めた。

「流石に、皆人達と出雲荘で出会った時のように木に引つかかれないぞー！」

「大丈夫です！熊の手！」

俺の叫びに、結女は自信を持ってそう言うとう自分の技を使って落下するエネルギーを相殺して、俺達は無事に上空に浮かぶ島に降り立った。

「ここが嵩天か。長年、セキレイについて研究しているがここに来る



のは初めてだ」

「——そうですね、 “あなた” がこの世界に来てから私達は始まったのです」

後ろから、その声が聞こえたので振り返ってみると大きな儀式を行うために、正装姿の巫女さんの格好をした女性が立っていた。

そしてその女性こそ、No. 01であり、No. 00の機能を持っている浅間美哉本人だった。

そして、何よりも気になる発言があった。

「始まった？つまり、原作から外れたこの世界が始まるきっかけになつたのが俺だと？」

「そうです。そして、あなたが幼女神と呼んでいる存在が誰に似ているのかは既に気付いているはずですよ」

「…… “あなた” じゃない “あなた” から見た世界にいたあなたの姿だつたんだな」

そう、俺を転生させたのは美哉をかなり幼くした姿をした存在だった上にそれこそ、年齢が二桁に行かないような幼女だったので——ちゃんと良い勝負だ。

そして、そいつは美哉に対して俺がいることで原作の世界とは別の世界だということを知らされたのだろう。

鵺鴿計画が始まったら、俺達がここに来ることも含めて。

そのため、俺は美哉に聞いてみた。

「セキレイは基本的に、脳筋なのは知っているからあんたがここにいるのもよくわかってるつもりだ。だけど健人はどうした？彼は鵺鴿計画に参加するのを反対していたじゃないか」

「健人さんには悪かったのですが、ダメと言われて止まるほどにセキレイは賢くないのですよ？」

「つまり、彼の反対を押し切ってここに来たのか」

美哉が面白そうに、クスクスと笑いながらそう言うので俺は健人の心配を察してヤレヤレと首を振った。

そして、それを見た美哉は和やかな雰囲気から真面目な雰囲気になつてこう言ってきた。

「私はNo. 01であり、No. 00である者。全てのセキレイと全ての葦牙の魂の裁定をする者。最後の葦牙とセキレイが力を渡すに足る存在であるかを試す者——」

「——つまり、勝者のみが報われる、と言うことか」

「そう言うことです。あなた達はご褒美がもらえるかな？」

「ヤレヤレ、これだから脳筋は……」とぼやくと、美哉は余裕を持った表情で話を続ける。

「フフ……ここまで昇ったセキレイにはもう言葉は要りませんね。最後に聞いておきましょう」

「……」

「葦牙とセキレイよ、汝らは嵩天に何を望む？」

美哉にそう聞かれて、俺と結女は息を併せてこう言った。

「俺達の願いは……」

「……ただ一つです」

「全てのセキレイに」

「全ての葦牙に」

「自由な羽ばたきを！」

「ではその願い！その拳で！叶えて御覧なさい！」

「はい……」

俺と結女で宣言すると、美哉は嵩天の番人として俺達の前に立ちただかったので結女は元氣そうに返事をした。

それを確認した俺は、結女達から距離を取って観戦することにした。

セキレイ同士の最後の戦いは、苛烈さを増すと予想できるので彼女達の邪魔にならないようにするのも葦牙の役目だ。

要は、この戦いは全てのセキレイと葦牙の子孫である俺達に関わっているNo. 00の、主導権争いと言うことになる。

つまり、古代の日本に降り立ったセキレイ達は神器と呼応した人と交わったがその力は、世代を超えても決して消えることがないので場合によっては不特定多数の人類大虐殺なんかも出来る。

とは言え、それが俺達の望みではなくて機能停止したセキレイとセ

キレイに婚がれた葦牙が、自由な空を羽ばたけるようにしたいという望みだ。

そのため、まずはN o . 0 0の保持者である美哉からそれを奪わないといけない。

「大丈夫です！私達は絶対に負けません！」

「ああ、俺は君達を信じている。だから行ってこい！」

「はいー！」

俺の不安を払拭するかのようには、結女がそう言うので俺も思いきつて返すと結女は美哉と戦うことになった。

その様子は、どこことなく楽しそうでありながらも美哉からは倒して欲しそうな感じがした。

まるで、今にでもN o . 0 0の機能を結女に明け渡したがっているような感じだ。

しかし、そんな美哉の心情を知ってか知らずか結女はこう言った。

「N o . 0 0！」

「…？」

「私達は、みんなと戦うのと同時にあなたに鍛えてもらってとても強くなりました！本当にありがとうございました！」

「…」

「だから！本気で戦っても大丈夫ですよ♡」

「…！」

それを聞いた美哉は、少し呆気にとられていたがすぐに笑って言い返した。

「…フフ、それは心配いりません。最初から私は本気です♡」

美哉がそう言うのと、長さが1メートルぐらいの日本刀から斬撃が飛んできた。

## 第27話 勝負の行方

美哉からの斬撃が、地面に到達すると大量の土煙が発生したが結女はそれを回避して、上から美哉に対して蹴りを入れようとした。

しかし、美哉にとっては結女の技であろうともすぐに対応できてしまうため、カウンターとして美哉が駒のように回転して結女の蹴りに刀身を当てた。

その衝撃で、結女が吹っ飛ばされたのだが無事なようなので俺は彼女に駆け寄って声を掛ける。

「結女」

「道人…さん」

「大丈夫だ、君は負けない」

「道人さん？」

「俺達の願いは、皆の願いは嵩ここ天まで届いた。だからきつとNo.00にも届く」

「道人さん」

「きつと届くから君は勝てる。頑張って！」

俺の言葉に、最初は何のことだか分からずに戸惑っていたが俺が持ってきた肩掛け鞆から、彼女専用のグローブを取り出して渡すと結女は笑顔になってこう言った。

「はい！私の葦牙様♡」

「結女……」

そう言うのと同時に、俺に抱き着いたと思ったらキスされた。

無線機や薬、グローブなどを持ち込めたのは前々から不測の事態になった場合の対応として、社長に申し出ていたためであって本来なら自分のセキレイに有利になるような者は持ち込めない。

これは、公平なルールの下でやるべきという社長の理念に基づいて作ってきたものだが、神座島にある船が未だに人間のコントロールの及ばないこともあるが故に特例として許してくれた。

他には、緊急用の止血剤などの持ち運び可能な医療機材と1食分の食料と水ぐらいいだ。

とは言え、現状においてはそれらの全てが無意味に思えるほどの戦いなので、俺にはグローブを渡すことぐらいしか出来ない。

そんな彼女は、恥ずかしそうにこう言った。

「えへ、つい抜け駆けしちやいました。でもありがとうございます、道人さん！私達！頑張ります！」

「……行つてこい！結女！」

俺がそう言うと、俺が渡したグローブを身に付けた結女は駆け出していったがその直後、俺は親しい5羽の幻影を見た。

『全く、大した抜け駆けだが彼女だけでは少々力不足だな。フン！』

その声が聞こえた瞬間、美哉に斬撃が飛んで彼女はその迎撃に当たってから、それぞれに攻撃が4回も続いた。

『花旋風』

『蛇炎』

『クフフ♡』

『氷柱』

風が、炎が、氷が発生すると同時に嵩天も大きくぐらついたため、大きな隙を結女に与えることになってここで初めて美哉が苦しい表情になった。

そして、結女の攻撃で発生した土煙が晴れると美哉は、ヤレヤレといった感じの表情で結女達にこう言った。

「…ああ、全く——あなた方はここに昇れるのは一羽だけなんですよ。ねえ？皆さん」

美哉がそう言うと、結女の周りには5羽のセキレイが立っていてそしてそれは美哉がよく知っているメンバーだった。

鴉羽を始めとして松、風花、焰、秋津の5人。

俺と婚いだメンバーは、俺の再起動時に自分の魂の一部を俺自身に預けているために、機能停止にならずにそれぞれの技を使うことが出来た。

それを確認した美哉は、戦いをやめて言葉を続ける。

「…みなさんで嵩天まで来ちゃったんですね」

「みんな」

「…私<sup>ひとり</sup>1羽では道人さんを嵩<sup>ここ</sup>天まで連れて来る事は出来ませんでした」

彼女の言葉に、満足そうに俺は呟くと結女以外の皆が振り返ったが結女は自分の胸の前に両手をかざすと、事実をいって美哉と会話を始めた。

「そして、N<sup>わ</sup>o<sup>た</sup>・08だけではきつとN<sup>あ</sup>o<sup>な</sup>・00にはとても敵いません！」

「——それは負けを認めているのですか？」

「いいえ、違います！」

美哉の質問に、結女はそう断言すると自分の思いを言葉に紡ぐ。

「N<sup>o</sup>・00、あなたは強い。強いからとても孤独です。だからこそ、あなたをその座から解き放たなくてはなりません」

「……」

「あんたがいるべき場所へ。出雲荘へ帰す為に！」

「……」

その言葉と共に、俺達が出雲荘に来た当初や健人とのやり取り、皆人と結がやって来てから増えていった仲間達。そして、千穂と鈿女。

出雲荘で、築いてきた一時は確実に結女や結達を強くした。

そのことを思い出したのか、美哉が笑みを浮かべると結女の言葉に疑問を呈した。

「私には敵わないのでは？」

「はい！まだまだ敵いません！強さも！料理も！掃除も！洗濯も！」

その疑問に、結女は紛れもない事実を述べて答えていくがそれでも1つの、変えられないつながりを美哉にぶつけた。

「ですが！皆と一緒になら！道人さんが繋いでくれた大好きな仲間と一緒になら！」

「征け、結女。美哉に今まで全てをぶつけるんだ」

『言う事はないです』

『結女…行っちゃって……』

『思いつきり、いけばいいのよん♡』

『私達の想いを全部、キミに届けたからね』

「仲間や…今までに出会ったセキレイ達。皆との絆を紡いだこの拳なら！」

「No. 00にも！どこまでだって！届きます!!」

結女がそう言うと、美哉は満足そうな表情になって裁定をした。

「——魂は6羽…が実際に昇って来たのは1人と1羽…裁定のルールに於いて嵩天はあなた方を認めています。ほぼ裏技ですけどね♡」

裁定をし終わった美哉…いや、No. 00は最後の闘いの為に刀を構えて宣言をした。

「ではその拳で、倒してごらんなさい。No. 00を…この私を！」

「……」

「あなた達に未来はその先にあります！」

「はい！」

その言葉と共に、結女は自分の祝詞を唱えた。

「我が誓約の『縁』、葦牙が願い 鶺鴒が願い 天に届けん！」

祝詞を唱えた結女と、No. 00である美哉が一撃で決める為に互いに急接近して己の全てを拳と刀でぶつけ合った。

ぶつかり合った瞬間、巨大な土煙と光が発生して嵩天が揺れたが土煙が晴れていくと、そこには仰向けに倒れた美哉の姿と光の羽を生やした結女がいた。

結女にNo. 00の権限が、移行したことが分かったのだが気絶している美哉のことが気になっていると彼女はこう言った。

「——大丈夫、No. 01は機能停止しているだけです。生物としての死ではありません」

「結女……」

「前の管理者であったNo. 01が停止して、嵩天の全ての権限は私に移行しました。嵩天は私の機関に伝えてくれています」

「……」

「さあ、道人さん。葦牙様の望みを」

彼女は、自信を持ってそう言ったので俺は自分の望みを伝える。

「…以前から言っているように俺の望みは君と一緒にだよ。『全ての鶺鴒

鳩に自由な羽ばたきを」

「……」

「そしてもう1つ、絶対に叶えたい願いがあるんだけど聞いてくれるかい？」

「なんででしょう？」

「俺は…No. 08の結女…君と婚いで皆とこれからもずっと一緒にいたい」

「…っ！」

俺がそう言うと、結女はかなり驚いていたが俺は言葉を続ける。

「でもこれは嵩天や誰かに叶えてもらうものじゃないからな。その望みを、夢を叶える為に俺自身が努力しないといけない。これが俺の願いだ」

「…道人…さん…えへ♡えへへ、嬉しいです！ですが今はまだダメなんです」

「ん？どうしてだい？」

「本当なら嵩天は、葦牙と鶺鴒が揃っていないとはいけないんですが私は鶺鴒基幹と葦牙基幹の両方を、兼ね備えているので1人で大丈夫です！」

「……」

「だって道人さんは皆のところに帰らなきゃダメなんです」

「おい、さつきから何を…」

結女とのやり取りに、ある程度の未来が見えてきた瞬間に彼女からキスされた。

「私も私の夢の為に頑張ります！だから私、いつかきつと帰ります。あなたの元へ」

そして、そう言いながら俺は彼女に押されて嵩天から落ちた。

それを悟った瞬間、離れていく嵩天から声が聞こえながらも叫ばずにはいられなかった。

「鴉羽さん、松さん、風花さん、焰さん、秋津さん。道人さんをよろしくお願いしますね♡」

「ゆ、結女えええええええ!!」



そして、重力という強力で全てのものに平等に掛かる力に引っ張られながら、俺は涙を流して呟いた。

「結女、必ず帰って来いよ。絶対に……！」

「美哉さん、お役目ご苦勞様でした。ゆっくり休んで下さいね」

葦牙を降ろして1羽になった嵩天で、機能停止で眠っている美哉に声を掛けた結女は彼女も地上に降ろしてから、先に降りた道人とその仲間達を見てこう呟いた。

「私の仲間達、後はよろしくお願いします♡」

そして、本当に1羽になると台座が動き出して鶴鴿紋が描かれた中心部が開いて、新しくなった管理者を招き入れる準備は整った。

それを確認した結女は、その台座に開いた空間に飛び降りてからこう言った。

「——さあ、嵩天！私と1つになりましょう！」

そして、その時から結女は新たな管理者として嵩天と1つになった。

## 第28話 鵺鴿計画後 その1

「よし！ついに完成したぞ！葦牙基幹付与の薬と一時停止の薬が！」  
鵺鴿計画が終了してから1年、神座島では停止していた葦牙達が息を吹き返して戦闘以外で倒れたセキレイ達も全員が再起動したが、それと同時に困ったことも起きていた。

それは、葦牙が止まることで停止した場合と停止してから時間が経ってしまった場合、そのセキレイは婚いでいた時の記憶が欠如するという事実だった。

この事実は、神座島にいたセキレイだけではない現象として、M・B・Iが検証した結果が報告された。

記憶が、欠如したセキレイ達の中には結達もいたのだが鴉羽達の場合は、俺を再起動する時に魂の一部を預けた状態だった為に難を逃れた。

この現象を松が調べた結果――

『うちはですね。言うなれば肉体が止まっていても魂は覚醒していたのでよって厳密には機能停止ではなく、鵺鴿紋も消えずに記憶も失わなかったのですよ』

――とのことだった。

なににせよ、停止した葦牙とセキレイを甦らせたの結女が嵩天の力を使ったからだがその際に、葦牙とセキレイとの間で一悶着があった。

『ありえないよっ、ありえない！この僕を忘れちゃうなんてーっ、みんなのばかあー！』

『…なんだ？この雨の日に捨てられた子犬と目が合った……みたいな…』

『わ…私もですわ』

『私も…』

『そうだ！また羽化すれば思い出すかも！おいで！みんな!!』

『マジか……こういうことは妙齢の美女相手が良いんだがな…』

『それ、何回聞いたかわかんない!』

『ますたあー!』

『ラブリーイ!』

『ちよつ、くーちゃん!月海!痛い、痛いよ!結ちゃんも強く押さないで!』

まあ、結果から言えばその場にいた全員が再羽化して元通りになった。

停止してから、すぐの再羽化だったから記憶も全て戻ったんじゃないかと高美さんは言っていたが、そこにはそれぞれの絆があつたんじゃないかと俺は思う。

それから、船の中で試合を観戦して調整に奔走した御中社長はとうとう以下の通り。

『ハハハハハ!諸君!ようやく、船の応急処置が完了したぞー!さあ、ゲームの続きを…』

『社長、終わったんだぞ?あんたが処置をしている間に全てが終わったんだ』

『……………』

俺がそう言うと、社長は愕然としてショックを受けていたがその時、M. B. Iのヘリコプターがやって来たので本社の方でも騒ぎは一段落したようだった。

そのヘリコプターから、ユカリと千穂が俺達に声を掛けてきたので、皆の前で俺は鶴鴿計画の終了を宣言した。

『……………みんな、最終戦は終了した。帰りましょう、新東帝都へ——』

俺はその時のことを振り返りつつ、2本の細い試験管を見つめると俺の研究室のドアが開いた。

「道人さん、試験管を持ってどうしたんですか?」

「ん?ああ、皆人か。この1年の間で研究してきた薬が完成したんだ」

「…！本当ですか!？」

「ああ、これで美哉も安定するはずだ」

この1年で、無事に皆人も新東帝都大に入学できたので大学に通いながらバイトで、M・B・I 本社の俺の研究室に出入りするようになった。

そのため、毎日が勉強漬けの日々となつてかなり大変そうだったが彼は1つの決意を示した。

『鵲鴿計画を手伝いたい?』

『勿論、闘わせる方じゃなくてシステムからの解放、セキレイというくびきから解き放ちたいんだ』

『……』

『羽化や鵲鴿紋、祝詞。それから機能停止のこと。この計画を通して、俺は何も知らないのが悔しいんだ』

『……』

『それにはまず、M・B・Iにいるのが1番の近道だと思つたからこれが俺にとつてのごほうびの代わり』

『……』

『これはあなたや健人さんにとつても悪くない話じゃないかな』

『…全く、考えることは同じなんだねえ』

『と言うと?』

『俺も健人も同じ考えさ。今じゃ、彼も他の研究室で研究しているはずだよ』

その時の、皆人の喜びようと言つたら試験に合格した時ぐらいの勢いだったのだが、俺と皆人で今後の予定を打ち合わせしているとユカリと千穂が部屋に入ってきた。

「あつ、お兄い!と、お兄ちゃん。おはよー」

「ユカリと千穂さんも来てたんだ」

「彼女らはそれぞれの付き添いでな」

「うん、セキレイ診断なんだって」

「鈿女ちゃんも診断中です。そろそろ、終わるはずですよ」

俺らがそう言い合っていると、高美さんの声と共に椎菜と鈿女が研究室に入ってきた。

「終わったぞ、今回も異常なしだ」

「お待たせしました、ユカリさん」

「千穂もお待たせー」

「佐橋さん、武田さん、くーは元気ですか？」

「うん、また会いに来てやってよ」

「彼女も喜ぶはずさ」

男同士での挨拶が終わると、ユカリはエロ親父の口調で椎菜に近づいた。

「ねえねえ、着替え。のぞいていい？」

「ユ、ユカリさくん」

「道人も見たかったら来て良いよー」

「お誘いは嬉しいが予定が入っていてね。またの機会にするよ」

俺は、鈿女の誘いを丁寧に断ると彼女達の着替えを待つてからある誘いをした。

「そう言えば、出雲荘でごちそうになるんだけどお二人は来るかい？」

「マジ？行く行くー」

その返事を聞くと、松にメールを入れている最中にユカリ達は研究室から出て行って、皆人も大学の講義に出る為に去って行った。

その直後、俺の携帯に電話が入った。

「もしもーし、武田ですよー」

『あつ、通じた通じた。電話生きてた♪ こんにちは、壱ノ宮です☆』

『ドドド！バババ！ガガガッ』

「ぬお!?……壱ノ宮よお、まだ紛争地帯かい？」

『はい、なかなか目的地につけなくて』

『夏朗ーっ、こっち制圧したーっ』

『クク…道…通れる…』

銃の音が聞こえたと思ったら、遠くで紅翼達の声が聞こえるので実際に紛争地帯の真っ只中にいるんだろう。

その中でも、夏朗は平常運転でのんびりとした口調だ。

『ええつとですね、主任に伝えて欲しいことがあつて電話したんですけどおー』

「あ、そこにいますよ。かわりましようか？」

『嘘です、すみません。ちよつとあなたの声が聞きたくてかけちゃいました。てへ☆』

「ははは…」

偶に、軽いノリも混ぜるからついて行けない時もあるがそれでも無気力だった彼の中で、ある目的が出来たのだから大きな前進と言えよう。

「…見つかりそうか？そこで亡くなったという友人の手掛かりは」

『まだ分かりません…でも、辿り着けそうな気がするんですね。なんたつて彼女達が一緒ですから』

その言葉に、俺はしみじみと一皮むけたなあと思っていると軽い調子で言葉を続けた。

『まあ、有給分で帰れるかは分かりませんがねー、あはは。あつ、私用で懲罰部隊を使っているのは内緒ですよー』

「ああ、その分の埋め合わせを帰ってきてからしてくれればいいから」  
『あんまり、無茶ぶりはしないで下さいよ。こう見えても平社員ですから』

「最初からそのつもりさ」

『…じゃ、また電話しますね』

「はい、どうぞ気をつけて」

俺達は、そう言い合ってから電話を切つて夏朗は紅翼達と目的地に向かい、俺は健人の研究室に向かった。

何故、葦牙基幹付与の薬を用意したかというと美哉の体調が不安定になつているからだ。

1年前の決戦の後、俺が神座島に着地すると美哉も落ちてきたので受け止めたのだが、目覚めた時には俺達のことわからない状態だった。

N<sup>美</sup>o<sup>哉</sup>・01は永い間、嵩天と繋がっていてそれが突如として切断さ

れたことで鵠鵠基幹に不具合が生じたとのことだった。

そのせいで、記憶も混濁しているのではないかと松は言って俺が羽化した方が良いのでは、と進言してきたが膨大な知識を使わないのはいかなるものかと思つて拒否した。

技術がここまで発展しているこの国で、ゴールが見えているのにそれを使わないのは技術に対して失礼だと言うことでここまでこぎ着けた。

さらに、俺がこの薬を開発できたという報告を受けた健人はかなり喜んでいて、無痛注射器を使つてすぐに薬を体内に入れた。

この薬は、体内に入つてから1時間はしないと発動しないし、何よりも健人専用の薬だ。

葦牙基幹を持たない彼の体質を、待つている体質にするには遺伝子レベルで能力を組み込まないと行けなかつたので、彼の遺伝子に合うように薬を開発した。

開発するまで、かなり苦労したがこれで美哉は羽化が出来る上に体調も安定するから良いのだが、美哉からすればやや不本意かもしれない。

何故なら、この薬によって健人に性格が変わるかもしれないからだ。

そう言った副作用は、可能な範囲で取り除いているから問題ないとは思いますがそれでも絶対ではないので、これからどうなるのかは分からない。

最悪、鴉羽達からも嫌われるかなと思いつながらこれからのことを話し合いつつ、それぞれの仕事を進めていった。

## 最終話 鵜鴿計画後 その2

一通りの仕事を終了し、出雲荘隣に帰る準備をしてると俺の携帯に電話が掛かってきた。

そのため、今日は電話が多いと思いつながら出てみると懐かしい声が聞こえた。

「もしもー……」

『僕だけどっ!』

「……御子上か。どうした?」

『あのさあ、なんか“島の船”と似た素材の破片が出てきたんだけど!』

「そりゃ、本当か。すぐに調査班を送らせるよ」

『うん!よろしく頼むよ!僕、あのおばさん苦手なんだよね!社長とは全然、連絡取れないしさー!』

「……こつちからも伝えておくよ」

『じゃあ、頼んだからね!』

そう言つて、御子上からの電話が切れた。

御子上は現在、セキレイの痕跡を探して世界中を飛び回っている。

なんでも、セキレイのことをもつと知りたいという事で俺や皆人達とは違う方法で、アプローチしているようで今日のはその報告という訳だ。

ちなみに、御子上のセキレイは再起動した者も含めて誰一人としてかけることなく、彼に付いていったので今では大人数での冒険の旅をしている。

それはそれで楽しそうだが、氷我の場合はセキレイの数をかなり減らした。

今回の計画において、強引にセキレイと婚いだことへの反省なのだろうかと思つてみたりするが、本当のところは分からない。

何故なら、M・B・Iと敵対している医療法人である氷山会グループの総帥にグループ最年少で就任した為、おいそれといつて会って話をすることができないからだ。



そのため、彼と婚げなかったセキレイは他の葦牙を探すことになったがそれはそれで、新たな道ができたからその道しるべとして相談に乗ったりもする。

そんな訳で、俺は高美主任に御子上達がいる場所を特定してからメールで、地図を載せて調査班を送るように進言した。

この方が相手は空いた時間に見れるし、聞き間違いなんかも避けられる上に文章構成も見直せるので俺はこっちの方が好きだ。

そんな訳で、健人と一緒に帰ろうとするとM・B・I本社の入り口で鴉羽が待つていたので、聞いてみるとどうやら俺達の帰りを待つていたようで、3人で一緒に帰っている間に鴉羽があることを話してくれた。

「昼過ぎから美哉がそわそわしていたけど、何か知らないかい？」

「あー、それは帰ってからののお楽しみだよな？ 健人」

「そうだね、帰ったらすぐに分かるよ」

「2人ともつれないねえ」

俺達がそう言うのと、鴉羽は残念そうにしながら俺と手を繋ぐ為に隣に立って一緒に帰った。

この1年、M・B・I本社に戻った俺は薬の開発と同時並行で世界各国との駆け引きを、行っていた為に結女をN・O・Oの役目から解き放つことが出来なかった。

いや、正確に言うならば情報を健人や社長に渡していたので間接的には関わっていたが、その枠組みを作っただけで詳細を詰めたのは2人だ。

それだけ、俺は俺で忙しかったのだが健人がM・B・Iに戻った事の方が大きい。

そもそも健人が離反した理由が、美哉を鵓鴿計画から遠ざけたかったのと社長の悪ふざけによって発動した計画に口を挟めなかったのが復帰の大きな理由だ。

その結果、美哉は記憶の混濁と体調不良が続くことになったので自分の行動に後悔して、セキレイのシステムを変えようと行動に移したそうだ。

まあ、出来る技術があるのにそれを使って抗わないと自分が望まない結果になっても、受け入れるしかできない事を痛感したと本人が言っていたからすんなりと本社勤務になった。

おかげで、原作と大きく変わったのは――

「あつ、道人さん！仕事が終わったんですか？」

「ああ、結女か。そっちはどうだい？」

「はい！無事にトラブルが解決しました！」

――結女が、最初の1ヶ月でひよつこりと帰ってきたことだ。

帰ってきた当初は、流石の俺でも驚いてしまったのだがその日の昼に神座島にあった船が嵩天に向かって飛び上がり、役目を交代したとのことだった。

一応、全体像を提示しただけなんだが社長と健人の力が組み合わせると、ここまで早くなるのかと感じた一瞬だった。

また、この1年で唯一の救いだったのが結女がそばにいてくれたからこそ、たった1年で薬が出来たことでデータの照合がしやすかったのが大きい。

そのため、俺は彼女に開発した薬を手渡した。

「…結女」

「？なんですか、道人さん」

「今日はこれを渡したかった。鶴鴿計画が終わってから丁度1年になるからな」

「…これは？」

俺が彼女に、試験管に入った薬を手渡すと結女が聞いてきたのでこう答えた。

「葦牙と婚げるようになる薬だ」

「…！」

「俺はこの1年、これを作る為に頑張ってきた。だから受け取って欲しい」

「ありがとうございます！道人さん！」

俺がそう言うと、結女は心の底から嬉しそうに満面の笑みを浮かべて俺に抱き着いた。

元々、結女はこつちに帰ってきてからトラブルに対応する為にあつちこつちで活動してたが、今日は神座島での戦いから丁度1年と言うことで出雲荘で宴会がある。

そのため、この数日間は睡眠時間を削ってまで開発に勤しんでいたのも、彼女の笑顔を見れるだけでも充分儲けものだ。

そして、結女が婚ぐのは皆の前で、と言うことになったので急いで帰り道を歩いていると、ガーディアンとしての仕事が終わったであろう焰とも出会った。

「仕事は終わったのかい？」

「ああ、なんとか宴会には出れそうだ」

「全く、高美さんも再調整が終了する時期を重ねたせいで焰とやり取りできる時間が少なくなっていたな」

「うん、彼女に言っておいてくれる？こきつかい過ぎるって」

「はいよ」

焰も焰で、ガーディアンとしての仕事が多忙だったので結女にも手伝ってもらっていた。

鴉羽は、興奮するとやり過ぎる可能性が高い上に風花はお酒に釣られるし、秋津は口数が少ないせいで誤解されるかもしれないからだ。

シングルナンバーは、クセのある奴ばかりだったが実力はかなりあるからなんとも言えない。

しかし、皆人も気にしていたんだが婚いだら主従というシステム自体が、現代に適合していないようなのでそれも変えていく必要がある。

ある意味、セキレイというのは俺達に課せられた試験や課題なのかもしれない。

そして、それらを1つずつ解決していくことが彼女達をよく知りたいという欲求を、満たす可能性が非常に高い。

御子上が、世界各地を飛び回っているのもそれが起因している訳で、この1年で分かったのはセキレイのシステムは現代技術で変えられると言うことだ。

とは言え、出雲荘に到着すると既に瀬尾や真田、ユカリや鷗君など

の葦牙とそのセキレイ達が集まっていたので宴会を始める前には結女と、健人は美哉と婚いだ瞬間を見せた。

これによって、全てのセキレイが婚いだ事になってより一層、宴会が騒がしくなった。

ユカリや鶯からは、俺達に対して冷やかしの声や驚きの声が出たが瀬尾達は、美哉が羽化したことに驚いていた。

それも当然で、美哉は健人一筋だった上に健人はセキレイと婚げないと言う彼らの常識を、覆したのは俺に付与された知識があつてこそだった。

そんな俺も、鴉羽や焰達から結女の羽化に対して驚かれたがすぐに歓迎された。

そして、出雲荘の裏庭からは笑い声が聞こえてその場にいる皆が笑顔になっているのを見て、俺はこう思った。

俺は今、とても幸せだと。